

研 究 紀 要

第 10 集

- アラビの乱前後（上）—帝国主義とエジプト— …………… 松 村 正 樹 (1)
- 高校における変換を軸とした図形指導について …………… 数 学 科 (10)
- 半加算器教具の製作に関する工夫 …………… 馬 嶋 玄 敏 (18)
- GOD'S LITTLE ACRE: ON WILL THOMPSON'S WAY OF LIFE
…………… Ichiroh Yoshioka (29)
- 製 墨 史 考 …………… 奥 谷 道 夫 (1)
- 「高村光太郎」ノート その四、高村光太郎と室生犀星と …………… 井 田 康 子 (19)

1 9 6 8

奈良女子大学文学部
附属中学校・高等学校

アラビの乱前後 (上)

— 帝国主義とエジプト —

松村正樹

1. はじめに

昨年邦訳出版されたD.W.コンデの「朝鮮戦争の歴史」を読んで教えられるところが多かったが、その際に、帝国主義のアジア侵略に当って、侵略に抵抗するアジア諸国民の側に立って歴史の証言を残した何人かの欧米人のことを改めて想起させられた。

太平天国革命史を革命の内側からつづった英人リンドレー、第一次大戦後の中国革命の歩みを生き生きと伝えたエドガー・スノー、「中国は世界をゆるがす」の著者ジャック・ベルデン、「秘史朝鮮戦争」のI.F.ストーン、さらに中国、朝鮮、ベトナムにわたってその内部から詳細なルポを送り続けているW.バーチエットもその一人に数えてよいだろう。これらの人々の著書は邦訳もされて広く読まれ、我々の歴史を見る眼を拡げるのに大きく貢献してきた。

しかし、イギリス帝国主義によるエジプト侵略を、終始エジプト国民の側に立って記述したW.S.ブラントの名はあまり知られていない。彼が1907年に著した*Secret History of the English Occupation of Egypt*はその書名からもうからもうかがわれるように、アカデミックで体系的な史書ではなく、リンドレーの著作と似た個人の回想録的な性格をもっている。また母国イギリスの野心と侵略行為に向けられた彼の非難と憤りは読む者を驚かせるほどで、冷静な“客観的”歴史叙述を重んじる過去の日本の歴史学界ではほとんど黙殺されてきた観がある。(1) しかし、帝国主義が歴史の動因として働いている時代について、その侵略に対して抵抗する側の“主観”こそ事実を正しくつかむことができる立場に立てば、彼の著作は19世紀末～20世紀初頭のイギリスのエジプト侵略に関して、実に多くのことを語ってくれそうである。以下の小論は、この書物に多く依拠しながら、アラビの乱を中心とする時期のエジプトの政治的情勢、ことに反帝国主義的な民族運動の成長過程を事実即して究明しようとしたものである。なおその際に、侵略する側から書かれたイギリス官辺筋の著書の多くも、その記述自体によって、あるいはそれが故意にゆがめようとしたものを復元することによって、少からず真実の呈示に役立つことは云うまでもない。

(1) ブラントの著を重視して書かれた論文としては、毛里興三郎：アラビ革命をめぐる諸問題、(歴史評論1965年11月号)の他にはほとんど見当たらない。

2. エジプト財政危機の性格

エジプトが列強の干渉を招く因となった財政危機が、第5代太守イスマイル(1863～89)の時代にもたらされたことは、諸説の一致して認めるところである。前太守サイドの遺した約329万ポンドの負債が、イスマイルの治世に際限なくふくらみ、1876年には整理負債6810万ポンド、一時借入金2600万ポンドに達し、その利子支払と減債基金にあてられる費用が歳出の4%を占めているという実情であった。(1) そこから、エジプト財政危機の原因を太守個

人のパーソナリティに帰して、“浪費王イスマイル” (Ismail The Spendthrift) 伝説により、ヨーロッパ勢力の免罪をはかろうとする政治的立場が生れてくる。例えば、スエズ運河に投資した1600万ポンド以外の全負債が浪費されたとか、全負債のうち公共の用途にあてられたのは僅か $\frac{1}{10}$ にすぎないとして、イスマイルを「歴史にも小説にも比を見ぬ浪費家」だときめつける英国官辺筋の見方がそれである。(2) プラントもこの点では彼らと同じ見方に立ち、イスマイルの放漫財政を口を極めて非難し、彼の全治世のコストを4億ポンドと見つもっても誇張ではないと述べている。(3) たしかに財政のでたらめさを否定することはできないのだが、しかしまた、イスマイル時代を前代に比較すると、教育予算が13倍にふえ学校数が25倍になり、鉄道が4倍以上に延長された他、灌がい用水路、通信線、港湾施設なども飛躍的に拡充され、輸出も約3倍に伸びて、1875年にエジプト財政を調査したイギリス大蔵省官ケイヴですら「現太守のもとでエジプトの生産力が著しく高まった」(4) ことを認めている。これらはすべてエジプトの自生的近代化の一定の意味での指標であって、〈エジプトの近代化はイギリスによる占領をもってはじまる〉という、クローマーなどの愛用するテーゼに対する確実な反証である。またイスマイルが、“Khedive” (副王) の称号をうけてエジプト支配者としての地位を固めるために、トルコ皇帝に莫大な貢納—例えば1866年からは年額15万プルセンに増額—をなしたことも、たしかに財政難の一因となっていたが、従来スエズ運河会社に認めてきた特惠をとりあげた姿勢と共通して、これも列強および宗主国トルコからの、エジプトの民族的独立度を強化せんとする姿勢のあらわれと解すべきであろう。要するにイスマイルは、祖父メヘメット・アリの政策の後継者として、エジプトを上からの近代化によって独立の強国たらしめるコースを専制君主の立場から追求したと言えるが、その近代化政策の財政面に食いこんで、あくなき利潤を追求したヨーロッパ人の側に、エジプトを無類の財政危機に追いこんだ真の原因があった。

「ロンドン、パリの全金融業者は、この無経験なエジプト副王からだましとるべく共謀した。Anglo-Egyptian Bank, Banque Franco-Egyptienne などさまざまな華美な名のもとに、彼を誘惑して高利の新借款をおこなわせるだけの目的で、多くの擬制的銀行が地から生える岸のように一夜にして生れ出た。」(5) これらの銀行は、ロンドンやパリから3~6%の利子で供給される資本を10%以上の高利でエジプトに貸しつけるのが普通であったし、英仏の国際起債市場で募られるエジプト公債は、額面の $\frac{1}{4}$ ~ $\frac{1}{6}$ を銀行家の指先に附着して残し、利率は9%以上、後になるほど高くなって、1872年の借款では14%に達している。したがってエジプト政府の手に渡るものは額面をよほど下まわることになり、1868年のオープンハイム & ゴッシェン銀行による公債では額面1100万ポンドのうち700万ポンド、1873年の同銀行によるそれでは額面の30%でしかない、という驚くべき実情であった。(6) さらに彼らのやり口は、借款の附帯条件たる利率や起債手数料、契約不履行に際しての補償金などによるのみでなく、次々に契約される一連の借款系列の操作によって、いっそう悪質となる。この種の職業にたずさわる紳士たちの最高戦略は、短期借款をたくみに操作してその更新を彼らにもっとも有利な条件で強要することによって、資本の回転率と利潤率を高めることから成っていたからである。こうして1868年宗主国トルコの皇帝はエジプトのあまりの起債度数に驚いて5年間の借款禁止令を発したが、その禁の解けた1873年のごときは、翌年あるいは翌々年に満期となる短期借款をできるだけ多く成立させようとして、金融業者間に激しい競争が生じている。そしてその競争の中から浮び上がったビショップスハイムを中核とするシンディケ

ートは、翌年解散の時に加入者に160万ポンドを分配することができた。(7) ヨーロッパ金融業者のやり口はまさに「文明国の一般市井の金貸しなら刑務所入りを免れないような」性質のもので、ノーマルで正直な利子計算がなされていたならば、エジプトは充分その債務を履行してきたであろう、というドイツのエジプト史学者ハーゼンクレファーの言には我々を深く首肯させるものがある。(8) のちにエジプトに対する植民地支配の担当者となるクロマーでさえ、イスマイルが「彼のもっとも避けるべき種類のヨーロッパ人の手中におちこんだ」ことを認めざるをえなかった。(9)

かくて“浪費王イスマイル”伝説は、自らの帝国主義的驕行と犯罪を隠蔽し、ひいてはイギリスのエジプト占領の目的はエジプトの文明化にあった、というもっともらしいテーゼに結びつけるためのメルヒェンであり、歴史の偽造であったことが明白である。事實は、専制君主イスマイルの志した近代化・強国化政策にともなう資本需要が、英仏金融業者の好餌となって、ヨーロッパ資本の論理がエジプトを食い荒らし、副王を頂点とする封建的支配機構をそのまま収奪管として、エジプト農民の租税と生産物がヨーロッパ資本に転化・蓄積されて、エジプトの自生的発展の芽を圧殺していったのである。この視点から言えば、最初に財政難があって列強が介入したのではなく、最初にあった単なる資本需要が、それに食いついたヨーロッパ資本——その背後には帝国主義政策の道をふみ出そうとしているそれぞれの国家権力がある——によって、彼らの利潤のために、深刻な財政危機に転化されていったと言うべきであろう。そして、ヨーロッパ資本のつくり出したエジプトの財政危機が、その資本の属する国のエジプト侵略のための口実となる。

エジプトは、増大する負債を償却する最良の方法が、さらに新たな借款を仰ぐことにあると信じこまされた。こうして、一つの公債がもう一つの公債を追いかけて、古い公債の利子を支払うために新しい公債が募られ、英仏金融市場から借りた金で英仏に巨額の工業製品を発注するという悪循環にはまりこみ、ついにスエズ運河会社の持株176,602株を手ばなさざるをえなくなった。エジプトの財政危機にとっては、それも焼石に水でしかなかったが、他方この株を買取ったイギリスが、インドと本国を結ぶ「インペリアル・ルート」のかなめとして、運河とエジプトに対する利害と関心を深め、東方政策の新しい段階に足を踏み出したことは周知の通りである。セポイの大反乱を鎮圧し、やがて1877年インド帝国の名のもとに樹立されるインド直接支配の体制と、スエズおよびエジプトに対する積極政策は、イギリス帝国主義の世界戦略を構成する。そしてそれはまた、従来1840年代からロシアを仮想敵として組立てられていたトルコ保全政策から、公然たるトルコ分割政策へのイギリス外交の大きな転換をも意味していた。

(1) Cromer : *Modern Egypt*, 1908, vol. 1. P. 9.

(2) A. Milner : *England in Egypt*, 1904, P. 176.

(3) W. S. Blunt : *Secret History of English Occupation of Egypt*, 1907, P. 19.

(4) Report by Mr. Cave on the financial condition of Egypt, *Accounts & Papers*, vol. 83. P. 12.

(5) A. Hasenclever : *Geschichte Ägyptens im 19 Jahrhundert*, 1917, P. 155.

(6) L. H. Jenks : *The migration of the British capital to 1875, 1925*, P. 317.

(7) L. H. Jenks : *ibid.* P. 319.

(8) A. Hasenclever : *ibid.* P. 155.

(9) Cromer : *ibid.* P. 18.

3. エジプトにおける英仏共同管理

イギリスのトルコ保全政策は、トルコをロシアの南進を阻む防壁として利用する目的で、その弱体化と領土の細分化を防ぐため、1840年代から一貫してイギリス外交の一つの軸をなしており、とくにクリミア戦争前後にその典型的な発現を見せた。この政策からすれば、エジプトはトルコ帝国の重要かつ不可分の一部とみなされるため、スエズ運河の計画に対し、それがエジプトをトルコから切断し分離させるおそれありとして、イギリス政府がよるこばなかったこと、また工事開始後種々その妨害を試みたことは当然であった。

ところが、この運河の完成が今までのイギリス政府の伝統的政策に変更を迫るのである。「他国全部を合せたよりも、イギリス一國が運河を利用する方が多い。(当時運河を通行する船舶の半がユニオン・ジャックを掲げていた) この通路はわが国にとって重要問題となっている。……とにかく我々は、わが国の主たる利益が依存するところの大きい企業を外国の独占に委ねることのないよう最善をつくすであろう。(1)」というのが、運河株買つけに際してのイギリス外相ダービーの言であるが、かくて伝統的なトルコ保全政策は、スエズ運河による「インベリアル・ルート」、そのルートを載せたエジプトの重要性との二者択一の形ではかりにかけられる。この際ばかりの一方の皿に重みを加えたものとして、同年トルコが破産宣言を出して、ロシアに対する防壁としてトルコを補強し「近代化」しようとのイギリスの夢が崩れ去ったという事情もあったが、とにかくこの時点でトルコ保全政策は決定的に放棄された。イギリスは「勝ち目のない馬に賭ける(2)」のをやめたのである。そしてそのあとに続くものは、イギリスの利益のために進んでトルコを分割する政策であった。

この新しい政策の最初の明白なあらわれは、露土戦争(1877~1878)の際に示される。それまでの長い間、トルコはあたかもイギリスの属領のように考えられ、その外交政策は事実上ロンドンで決定されていたような状態で、経済面でもイギリス政府の異例の利子支払保障のもとに多くのイギリス資本が投入され、ロシアを敵にまわすかぎり、トルコはいつでもイギリスの強力な支持を期待できる立場に慣らされていた。ところが、イギリスはこの戦争に際して、ロシアの行動を口先では非難しながら、それがイギリスの重大利益を侵さぬかぎり中立を守ることを宣言したのみか、ロシアが戸口に迫っている苦境に乗じて、キプロスの占領・駐兵権をトルコに強要したのである。1878年6月秘密裡に締結されたこのキプロス協定は、プラントの言う通り、東地中海に「非公式ながら実質的なイギリスの保護領」を設定しようとするもので、イギリス政府はこの協定の存在をひたかくしにそのままベルリン会議に臨んだ。ところが会議進行中にロンドンの夕刊紙グラヴがこの秘密協定の内容をスクープして報道したため、ロシア、フランス代表の憤激をかい、会議は決裂の一手手前までいった(3)。結局ビスアルクのとりなしで英仏間に秘密協定が成立してフランスの怒りはとけ、イギリスのベルリンにおける苦境はきりぬけられたのだが、この英仏秘密協定の主な内容は次の二点である。イギリスがキプロスをとる代償として、①フランスは任意の時期にトルコ領チュニジアを占領しうる。②エジプトの財政難をめぐる処理問題において英仏は完全な同一歩調をとること。

プラントは、この英仏の闇取引がチュニジアをフランスに約束することによって、列強のアフリカ大分割を開始させ、「その結果ビゼルトからチャド湖、ソマリランドからコンゴにおよぶ住民の上にはかりしれぬ苦しみを負わせた」ものとして、痛烈な攻撃を加えてい

る。(4) 事実フランスは、この協定における「任意の時期」を1881年5月にえらんだ。英独政府が奇妙な沈黙を守る裡にフランスの侵略が開始され、西チュニジアではブレール將軍がトルコの知事を強要して、劍の尖に刺してつき出した条約に署名させて、フランスの保護権が設定された。が、東チュニジアでは、砂漠の住民は武器をとって立ち上り、夏の半ばまでに反仏抵抗の波はアルジェリアにひろがり、その気運は東にも伝わってエジプトをゆさぶるにいたる。エジプトの民間改革派と軍隊内の革新勢力の動きは、このチュニジアの斗争にはげまされるところが大きかったのである。(5) 従来ベルリン会議については、英仏独奥の列強がロシアの南進阻止に成功した面、およびバルカン問題についての調整のなされた面を中心とした意義づけがなされてきたが、それが列強による公然たるトルコ分割会議であったこと、さらにアフリカ分割の外交的いとぐちをふくんでいたという面をとらえて、あらためて見直されるべき性格をもっている。

ベルリンにおける英仏帝国主義の利害の調整は、すぐさま半植民地的状況下にあるエジプトにひびいてくる。ベルリンに在るイギリス外相ソールズベリーから、アレクサンドリアのR. ウィルソン宛に発せられた一片の電報は、ウィルソンの行ないつつあるエジプト財政の調査・監督に、フランスが完全に対等の資格で参加できるようにはからえ、という指令を伝えた。これがその翌年に樹立される英仏共同管理 (Dual Controll, Condominium) の基礎であって、我々はここにキプロス・チュニジア・エジプトが、侵略者の血に染まった糸によってつながっている事実、そして北アフリカ・西アジア諸地域住民の侵略者に対する闘いが一つに結ばれねばならぬ必然性を見ることができる。(6) ここで共同管理体制の樹立にいたるまでのエジプト内部での経過を簡単にたどってみよう。

運河株売却後、イスマイルは歳入増をはかるためエジプト蔵相の下で働く財政通の英人2名の派遣を求めたのであったが、イギリス政府は逆にエジプト財政の全面的調査と勧告の使命を帯びたケイヴ使節団を派遣した。このこと自体が、「株買付けから直線的にみちびかれるイギリスの考えぬいた末の措置」(7) であったが、その調査の結果であるケイヴ報告書がエジプトの意志に反して青書 (Blue Book on Egypt) の形で公表されたため、エジプトの公的信用は完全に失墜する。そして、ケイヴ派遣から半歳を経ずして1876年5月に、エジプトに対する各国債権者の利益代表から成る公債管理委員会 (Commission of The Public Debt, Caisse de la Dette Publique) が生れ、11月にはこの委員会の頂点をなす総監督官 (General Controller) 制が創設され、英大蔵省官でロスチャイルド財閥とつながりの深いR. ウィルソンがエジプト政府の歳入を、仏人ブリニエールが歳出面を監督することとなった。(8)

このようにして進行した英仏の干渉は、やがて財政の枠をこえてくいこみ、1878年8月、アルメニア出身の銀行家ヌバルを首班とし、英仏人各1名を閣僚とする変則的・植民地的内閣を成立させた。ウィルソンは蔵相に、ブリニエールは公共事業相にと、英仏の債権者代表がエジプトの内閣の要職を占拠して、強力な干渉体制が築かれたことになる。アレクサンドリアの外国金融業者以外に支持層を持たず、回教徒官吏層からヨーロッパ借款商人の手代と見られていた売弁的銀行家を首相に、英仏債権者代表を閣僚にすえたこの内閣は、当然のことながら、エジプト人民のぎせいにおいて専制君主の対外債務を履行させることを全政策の基軸としたため、エジプト人の民族感情をしげきせずにはいなかった。ヌバルがキリスト教徒であったこと、悪名高い国際裁判所 (混合法廷) (9) 創設の立役者であったことも農

民の反感をかう一因であったが、民有地の強制収用、官吏の大巾な縮員などを行なって、外人閣僚の登場が生活窮迫の原因だと考える農民がエジプトの村々にふえていった。

ヌバル内閣が2500人の士官を給料不払いのまま解雇したことを直接の因として、1879年2月、カイロ街頭で軍隊を中心に、解雇された官吏、学生、群衆が加わっておこされたヌバル退陣を要求する示威行動は、上記の国民的反感の表現であったが、他面では、英仏の圧力でヌバル内閣に行政の実権をゆずらされて専制権力を行使できなくなった不満から、同内閣更迭の機会をねらっていたイスマイルが、国民、なかんずく軍隊の反ヌバル感情を操って起させた、という陰謀的な側面をも持っていた。(10) 彼は国民の訴えをとりあげるポーズを見せてヌバルを解任し、そのあと英仏によりイスマイルに忠実な回教徒ラゲーブが、2人の外人閣僚を留任させたまま組閣したが、債権者のかいらいたるヌバル政権を失った英仏はイスマイルに強く抗議し、やがて4月に一定の民族主義的要素を代表するシェリフのもとにエジプト人のみから成る新内閣が成立すると、英仏はイスマイルを退位させるための外交的策謀を開始し、6月、トルコ皇帝に圧力をかけてイスマイルの廃位を通告させた。(11) 17年にわたる彼の治世はかくて終り、その子テウフィクが副王となったが、列強の圧力は、その野望に対する障害となった君主を廃することができるまでに、深くエジプトの地にくいこんでいたのである。

(1) Annual Register, 1875, P. 122.

(2) Gooch & Masterman: A Century of British Foreign Policy. 1917, P. 29.

(3) Blunt: *ibid.* P. 34.

(4) Blunt: *ibid.* P. 36.

(5) Blunt: *ibid.* P. 123.

(6) 毛里・前掲論文, P. 14.

Hasenclever: *ibid.* P. 226.

(7) Hasenclever: *ibid.* P. 184.

(8) この段階ではイギリスが一歩先んじており、これに対するフランスの不满が先述の秘密協定締結の際にもちこまれた。

(9) 国際裁判所は1876年に成立し、名譽裁判長がエジプト人、副裁判長が外人、判事は高裁の場合外人7、エジプト人4の比率で、事実上の外国法廷であった。(Milner: *ibid.* P. 46.)

「借金の証書に署名した農民は、外国の手続に従って外人裁判官の前に出頭させられ、外国語によって扱かれ、結局何のことかわからぬうちに自分の土地や財産を奪われるのであった。」(Blunt: *ibid.* P. 46.)

(10) Hasenclever: *ibid.* P. 187.

(11) この退位工作の裏面について、ブランドは、ウィルソン→ロスチャイルド財閥→ビスマルク→英仏政府→トルコ皇帝、という圧力ないし工作ルートを想定している。(Blunt: *ibid.* P. 65.)

4. 1881年における軍隊の民主化斗争

新副王テウフィクのもとに成立したリアズ内閣時代の最初の重要な変化は、英仏による総監督官制の再建である。2人の総監督官が入閣した時からこの制度は不要のものとなって廃止されていたが、外国債権者代表が閣内の要職を占めるといふあまりに露骨な内政干渉体制が、農民大衆から保守的支配層にまでおよぶエジプトの広汎な反感によって、一步後退を余儀なくされた今、英仏はそれに代るべきものを構築する必要があった。再建された総監督

官は、閣議出席、諮問、調査の権限を帯び、本国政府の同意なしに解任されえないものとなり、その地位は失った閣僚の座を補うに足るものとなった。列強にこのような売弁譲歩を行ないつつ、リアズ内閣は国内の立憲運動・民族運動を抑圧する反動政策を展開していくが、1881年9月、反政府運動の渦の中に倒され、ここにエジプトの立憲勢力伸長の道が開かれるのであるが、この反動内閣打倒のための突破口を開いたのが、1881年2月および9月に生じた軍隊の反政府示威行動であった。

この軍隊の運動は、その本質においていわゆるトルコ・サーカシア寡頭支配層への挑戦であったので、ここでエジプト社会におけるトルコ系民族とアラブ民族との関係に簡単にふれておく。オスマン帝国治下の古いエジプトでトルコ族が絶対的優位を占めていたことは言うまでもないが、アリ以後、エジプトが半独立的地位をえ、またイスマイルが貢納とひきかえにえた勅令(1873年)、彼の退位後の新しい勅令(1889年)がトルコ皇帝にエジプトに対する宗主権を残しながら、大体において政治面ではエジプト独自の判断と行動を保障したので、トルコの政治的支配はエジプトについては外殻を残すのみとなった。(2)ところが、エジプトの社会問題としてのトルコ・アラブ両民族の対立は依然として未解決であり、ジョン・ボウリングが1840年に「エジプトにおけるオスマンリの勢力は絶大である。彼らは強い勢力を行使して国家の大ていの高職を独占し、国家権力の貯蔵庫をなしている。」(2)と書いたことが、70年代の末においても基本的には変わってなかった。彼らはアリー族を頂点とする特権の大地主階級で、高級官僚、高級将校の地位を独占しつつ、その領地で農民を酷使し、エジプト人に対する民族的差別を露骨に行なった。

このようなエジプト社会で、アラブ勢力が比較的進出していたのは軍隊だけであった。サイドの時代からエジプト人が士官に昇進できる道が開かれ、下級将校を多くエジプト人が占め、農民、ことに貧農出身の兵士の支持をえて地歩を固め、大地主層を母胎とするトルコ・サーカシア系の高級将校と対立した。イスマイル時代のトルコ・サーカシア系将校に対する優遇策がテウフィクにうけつがれて、無能な彼らが高給を食みつつある一方でアラブ士官の減給、解任が露骨に行なわれ、昇進の上でもことさらに不利な扱いをうけたことが、彼らの不満を増大させていたが、リアズ内閣の陸相オスマン・リフキイがトルコ系大地主の最右翼に属し、アラブ士官に対し極端な差別行政を行なったため、アラブ士官、兵士の蓄積された不満は政府に対する陸相罷免請願の形で結集された。

政府がこの運動の中心になったアームッド・アラビ(Ahmed Arābi)ら3人の連隊長を逮捕したことから、エジプト人士官を連隊長とする兵士がカスル・エル・ニル政庁を占領して3人を救出し、兵士大衆の示威の力で陸相の罷免をかちとったのが2月1日の事件(以下カスル・エル・ニル事件と呼ぶ)である。(3)この事件後、軍隊内部におけるアラブ士官、兵士の勢力が著しく高まったことは勿論だが、ことに指導的役割を演じたカイロ第4連隊長アラビ(4)の名はひろく国内民衆の口にのぼるようになり、不正を訴える請願書が彼のもとに殺到し、農村の長老や村落里長(Sheikh)らが彼と連絡をとりはじめた。これに対しリアズ内閣もあらゆる手段によって軍隊内の反政府勢力をくじこうとしたため、まもなく9月に政府と軍隊とのより決定的な衝突を生ずることになる。

カスル・エル・ニル事件のあと、あらたに軍の支持をえて陸相となったアームッド・サミがリアズによって罷免され、後任の陸相ダオウド・バンジャがアラビらの反政府的連隊をカイロから地方に移駐させようとしたことがきっかけとなって、9月9日、前回に比べてはるか

に大規模な軍隊の示威行動がおこされた。アラビらは大砲をひいた2500の兵によって副王のいるアブディン宮を包囲し、①リアズ内閣の退陣、②議会の開設、③軍隊の増員、の三要求を提出し、その結果リアズ内閣は倒れ、アラビらの推すシェリフ・パシヤガ新内閣を組織することになった。(5)

この9月の事件（以下アブディン宮事件と呼ぶ）のもつ意味は、エジプト民族運動史上無視できぬものをもっている。運動の中核が軍隊であり、軍隊を反政府示威にかりたてたものがトルコ・サーカシア旧勢力に対する憤りであった点はカスル・エル・ニル事件と同じであるが、彼らの提出した要求内容の上で大きなちがいがあつた。前回の事件では陸相の更迭を要求したにとどまるが、アブディン宮事件では議会開設・憲法制定という軍事的視野をこえた国民的要求をかかげている。これは軍隊がエジプトの立憲・民主化斗争の新しい手としての自覚をもったことを意味する。(6) この事件後アラビはプラントに「私は軍の代表であり、軍はそのまま国民の代表である。」と語つたというが、(7) 当時のエジプト農民約420万人は、ヨーロッパ資本の進出下に進行した階級分化によって、在村小地主階級、零細な農地しか所有しない小作兼自作農民、大地主の搾取や重税、さらに高利貸のぎせいとなつて土地を失つた農民（日傭い耕作者または分益小作農）の三階層に分化しつつあつた。このうち小地主階級は所有地数エーカーのものから相当広大なものまでをふくむが、トルコ・サーカシア系大地主からは明瞭に区別され、彼らのようにヨーロッパ語を学んだりヨーロッパ風の生活様式を採りいれたりせず、ゆたかな彩色の衣服とターバンをつけ、民族的伝統がその衣食住と観念を滲くいろどつていた。彼らは農村共同体の Sheikh として、自村の農耕・灌がいなどの行政を行ない、強い共同体的規制によって地域農民を危みこみつつこれを支配していた。(8) と同時に彼らは、トルコ・サーカシア系大地主に比べて同一面積について3倍以上の地租負担者として、特権的大地主とその政権に対する対立者として共同体をひきいて立っていた。エジプト軍隊におけるアラブ系下級将校は、この小地主階級を出身層とし、一般兵士は自小作農以下の農民出身であつたから、農村における民族的伝統と宗教的風習にいろどられた共同体指導者と共同体成員との一体的な関係が、おそらく軍隊の内部にももちこまれて、下級将校と兵士の結束の堅さを保障したと思われる。そして、彼ら、軍服をまとつた農民は、アラビらの指導のもとに、1881年を通じて、トルコ・サーカシア系大地主階級に対する反封建的農民斗争を代位して闘つたのであつた。これと同盟の関係にあつたのが、在野の立憲主義者のグループと、エル・アズハル大学を中心とするイスラム革新派の勢力(9) とである。ただ、その反封建斗争が、この段階では軍内部に局限され、エジプト社会、ことにその基礎的な底面をなす農村社会における封建的大土地所有が、危機をはらみながらも旧のままの姿で存続していること、したがつて大地主＝特権官僚としてのトルコ・サーカシア階層が副王と直結した形で、アラブ中小地主・共同体農民を支配する力を保つていたことが、のちに帝国主義に対する民族的抵抗が要請される時点で、致命的な弱みとなつて露呈されるであらう。

ともあれ、長い異民族支配によって植えつけられたエジプトの民族的＝階級的矛盾の結節点であつた軍隊は、1881年の兩次の事件を経てトルコ・サーカシア支配層の私物から脱して、軍内部の民主化を進めアラブ士官の指導権をうち立てた。リアズ内閣退陣のあと、待望の憲法制定を大きな任務とするシェリフ内閣が成立すると、アラビは軍隊の役目は終つたとして軍隊をひきいてカイロを去り、いささかも政権への野心を示さなかつたし、(10) 英仏の財政

監督官制についても、むしろエジプトにとって有益なものと考え、進行中のエジプトの反封建・立憲民主化の改革に干渉しないかぎり、英仏との友好を維持すべきだとなしていたというが、(11) エジプトの軍隊が来るべき民族的危機において果すであろう役割は、すでにこの時点で予見できるのではないだろうか。アラビはブラントに「国民を沈黙させようとするものに対しては、必要とあらば、アラーの神の加護により、国民を保護するという軍隊の責任を行使することを恐れはしない。」(12) と語っていたが、アラビらのひきいる軍隊が民族的抗抵の前衛となるべき時機は目前に迫っていた。というのは、カスル・エル・ニル事件とアブディン宮事件にはさまれた1881年5月、フランスのチュニジア侵略がおこり、エジプトが第二のチュニジアになるのではないかとの不安が急速にひろまっていたし、フランス軍のチュニジアにおけるイスラム寺院冒瀆、回教徒婦女子への蛮行が敬虔なエジプト回教徒の深い怒りをかっていた。アブディン宮事件において軍隊の要求した軍増員の計画もエジプトを第二のチュニジアたらしめぬための火急の要請であったし、事件後発禁を解かれた諸新聞は、ヨーロッパ勢力の進出がはびこらせたエジプト国内の酒場・売春宿・不健全な歌曲などの植民地的風俗をイスラム教の立場から激しく非難しはじめていた。そして、エジプトがリアズ反動政治の倒壊をよるこび、自由化・立憲へのコースをふみ出した1881年末、エジプト国民の知らぬところで、英仏政府はエジプトに対する威嚇的な政策を準備しつつあり、それは翌年初頭の英仏共同覚書 (Joint Note) となつてあらわれ、エジプトの民主改革の路線と対決しようとする。その時、軍隊はふたたび国民の保護者として、売弁化したトルコ・サーカンア保守支配階級と結んだイギリス帝国主義とのたたかいに立ち上らねばならない。

(1) Milner : *ibid.* P. 37.

(2) Cromer : *ibid.* P. 175.

(3) Blunt : *ibid.* P. 136. Cromer : *ibid.* P. 178.

(4) アラビは1840年ザガジグ近傍のホリエーの小村落の Sheikh の家に生れた。一家は長くその地に住み8エーカー半の土地をもち、14才で軍隊に入り、サイドに見出されて異例の昇進をとげた。アラビと親交のあったブラントは、彼のことを、「丈高く筋骨たくましく、動きがゆったりしていて典型的なエジプト農民のタイプ」と述べている。Blunt : *ibid.* P. 139. この事件後アラビの農民解放の思想は多くの人々をひきつけ、「el wahhid" (the only one) と呼ばれたという。

(5) Blunt : *ibid.* P. 148. Cromer : *ibid.* P. 183.

(6) Hasenclever : *ibid.* P. 205.

(7) Blunt : *ibid.* P. 170.

(8) 毛里 : 前掲論文、P. 15. Milner : *ibid.* P. 322.

(9) アズハル改革派は君主の専制がイスラム精神に反すると主張し、全回教徒の自由かつ平等な共和国を理想とし、かつてイスマイルの暗殺を計画したことさえあった。Blunt : *ibid.* P. 125.

(10) Blunt : *ibid.* P. 154.

(11) Blunt : *ibid.* P. 173.

(12) Blunt : *ibid.* P. 171.

高校における変換を軸とした 図形指導について

数 学 科

1. 図形と数式の対応

図形の性質を代数的に学習する一方法として図形を点の集合と考え、その点に対して、数又は順序をもった数の組を対応させることを考える。そのためには座標系が導入されなければならない。



まず基本的な図形である直線について、直線のある条件をもった点 (x, y) の集合と考え、その条件を数式（一次方程式）で与えることにする。

$$\text{直線} \longleftrightarrow ax+by+c=0$$

一般の図形について、その図形のある条件をもった点 (x, y) の集合と考え、その条件を点の集合である関係式として数式で表わすことが出来る。

$$\text{図形} \longleftrightarrow \text{数式 (座標の関係式)}$$

2. 図形の運動と座標変換

こうして数式で表わされた図形について、個々の図形の性質をしらべるために図形相互の位置関係が大切な要素と考えられる。即ち一つの図形を他の位置へ移すことである。これらの移動については、既に学習した次の

- (1) 平行移動 (2) 回転移動

- (3) 対称移動

の三通りがあげられるが、いずれも図形上の点を代表する点の座標の間の関係式として、とらえることが出来る。

- (1) 平行移動

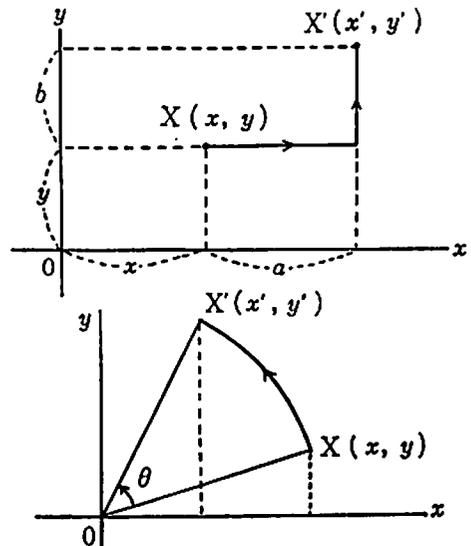
すべての点 (x, y) を a, b だけずらして点 (x', y') に移す。

$$\begin{cases} x' = x + a \\ y' = y + b \end{cases}$$

- (2) 回転移動

すべての点 (x, y) を θ だけ回転して点 (x', y') に移す。

$$\begin{cases} x' = x \cos \theta - y \sin \theta \\ y' = x \sin \theta + y \cos \theta \end{cases}$$

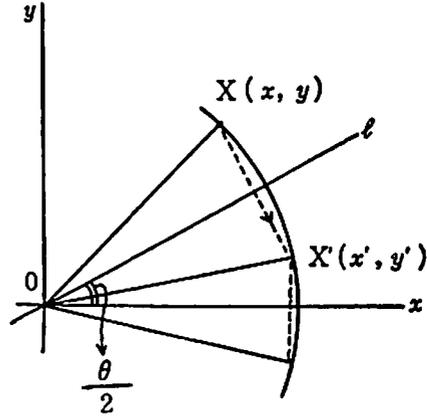


(3) 対称移動

すべての点 (x, y) を原点を通る直線 l (x 軸と $\frac{\theta}{2}$ の角をなす直線) について対称な点 (x', y') に移す。

$$\begin{cases} x' = x \cos \theta + y \sin \theta \\ y' = x \sin \theta - y \cos \theta \end{cases}$$

(点 X' は点 X を $-\theta$ だけ回転したのち x 軸について対称移動した点にあたる。)



更に点 (x, y) を図形 F 上の代表する点と考えることにより, $f(x, y) = 0$ で表わされる図形 F が, 以上の移動によって

$f(x', y') = 0$ で表わされる図形 F' に移る。

一般に(1), (2), (3)の移動やそれらを組合せたもの

$$\begin{cases} x' = x \cos \theta \pm y \sin \theta + a \\ y' = x \sin \theta \mp y \cos \theta + b \end{cases} \text{を運動とよぶことにする。}$$

これら運動は図形の形, 大きさを不変にする移動である。

今二点 $A(x_1, y_1)$, $B(x_2, y_2)$ を考えると, その距離 l は

$$l^2 = (x_1 - x_2)^2 + (y_1 - y_2)^2$$

これが運動によって $A(x_1, y_1)$, $B(x_2, y_2) \rightarrow A'(x'_1, y'_1)$, $B'(x'_2, y'_2)$ とすれば

$$\begin{cases} x'_1 - x'_2 = (x_1 - x_2) \cos \theta \pm (y_1 - y_2) \sin \theta \\ y'_1 - y'_2 = (x_1 - x_2) \sin \theta \mp (y_1 - y_2) \cos \theta \end{cases}$$

$$\therefore l'^2 = (x'_1 - x'_2)^2 + (y'_1 - y'_2)^2 = (x_1 - x_2)^2 + (y_1 - y_2)^2 = l^2$$

よって二点間の距離は不変である。

従って図形の形, 大きさは不変である。

二つの図形の関係を調べる場合, 同一の座標系での移動に対して, 解析的に, 平面全体 (座標軸ごと) を移動することが考えられる。

今任意の点 P を $O-xy: P(x, y)$

$$O'-x'y': P(x', y')$$

とすれば (x, y) と (x', y') の間には

$$(i) \begin{cases} x = x' \cos \theta - y' \sin \theta + a_0 \\ y = x' \sin \theta + y' \cos \theta + b_0 \end{cases}$$

$$(ii) \begin{cases} x' = x \cos \theta + y \sin \theta + a \\ y' = -x \sin \theta + y \cos \theta + b \end{cases}$$

$$\text{但し } \begin{cases} a = -a_0 \cos \theta - b_0 \sin \theta \\ b = a_0 \sin \theta - b_0 \cos \theta \end{cases}$$

平面上の図形 F 上の任意の点 $P(x, y)$ とし,

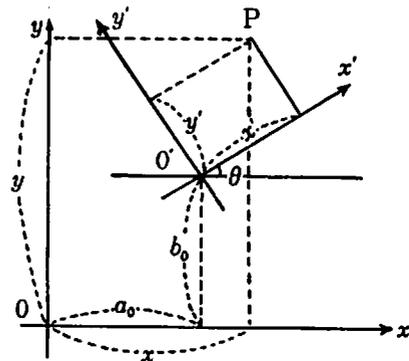
F の方程式を $f(x, y) = 0$ とする。座標軸

の移動によって点 P の座標 (x, y) が (x', y') に変わったとすれば, F の方程式

$$f(x, y) = 0 \text{ は (i) より}$$

$$f(x' \cos \theta - y' \sin \theta + a_0, x' \sin \theta + y' \cos \theta + b_0) = 0 \text{ になる。}$$

先にのべたように図形 F が移動によって図形 F' になったとすれば



F'の方程式 $f(x', y')=0$ は (ii) により,

$$\begin{aligned} & f(x \cos \theta + y \sin \theta + a, \\ & -x \sin \theta + y \cos \theta + b) \\ & = 0 \text{ となる。} \end{aligned}$$

即ち図形の方程式は、二つの座標系間の座標の関係式によって、それぞれ与えられることになる。

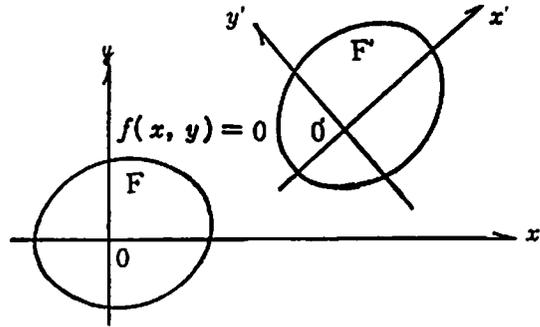
二つの座標系について座標の関係式を一般式を用いてのべると、

$$O-xy: P(x, y)$$

$$O'-x'y': P(x', y')$$

$$(i) \begin{cases} x=f_1(x', y') \\ y=f_2(x', y') \end{cases} \quad \text{逆にといて} \quad (ii) \begin{cases} x'=g_1(x, y) \\ y'=g_2(x, y) \end{cases}$$

上にのべたように、ある座標系で表わされた点を別の座標系で表わされた点に対応させることを変換とよぶ。



3. 合同変換とユークリッド幾何

ユークリッド幾何学で取扱うのは、上にのべた座標の変換によって不変な図形の性質である。一方図形上の点と一つの実数の組 (x, y) の間に1対1の対応が存在すると仮定して、その点 (x, y) を点 (x', y') にうつす式を

$$\begin{cases} x' = x \cos \theta + y \sin \theta + a \\ y' = x \sin \theta + y \cos \theta + b \end{cases} \quad \begin{cases} x = x' \cos \theta + y' \sin \theta + a' \\ y = -x' \sin \theta + y' \cos \theta + b' \end{cases}$$

とすれば、この式の a, b, θ にいろいろな値を与えることによって一つの変換の集合をうる。これらの集合の任意の一つの変換によって不変な性質を研究していくのがユークリッド幾何学であり又これによってユークリッド幾何学の対象になりうる性質をもった図形をいれている空間をユークリッド空間とよぶ。

この空間において $\overline{PQ} = \sqrt{(x_1 - x_2)^2 + (y_1 - y_2)^2}$ と定義すれば P, Q が座標の変換によって P', Q' に移されたとき、常に $\overline{P'Q'} = \overline{PQ}$ となってユークリッド幾何学の対象となる性質で図形的意味をもつことになる。

ユークリッド平面上のすべての直線を直線にうつす変換の式は一次式であるからこの変換は一般に

$$\begin{cases} x' = a_1x + b_1y + c_1 \\ y' = a_2x + b_2y + c_2 \end{cases} \quad (a_1b_2 - a_2b_1 \neq 0) \quad \text{と表わされる。}$$

運動は一次変換の特殊な場合であるが運動以外に図形の形、大きさを不変にする変換はない。(理由) 形、大きさを不変にすることは距離を不変にすることである。今距離を l とすれば

$$l^2 = (x_1 - x_2)^2 + (y_1 - y_2)^2 \rightarrow l'^2 = (x'_1 - x'_2)^2 + (y'_1 - y'_2)^2 \text{ になったとする。}$$

$$\begin{cases} x'_1 - x'_2 = a_1(x_1 - x_2) + b_1(y_1 - y_2) \\ y'_1 - y'_2 = a_2(x_1 - x_2) + b_2(y_1 - y_2) \end{cases}$$

$$\begin{aligned} \therefore (x'_1 - x'_2)^2 + (y'_1 - y'_2)^2 &= (a_1^2 + a_2^2)(x_1 - x_2)^2 + (b_1^2 + b_2^2)(y_1 - y_2)^2 \\ &\quad + 2(a_1b_1 + a_2b_2)(x_1 - x_2)(y_1 - y_2) \end{aligned}$$

よって $l^2 = l'^2$ になるためには

$$a_1^2 + a_2^2 = b_1^2 + b_2^2 = 1 \quad a_1 b_1 + a_2 b_2 = 0$$

$|a_1| \leq 1$ $|b_1| \leq 1$ より $a_1 = \cos \theta$ $b_1 = \sin \varphi$ とおける

これをとけばいずれも運動のいずれかになる。

$$\begin{cases} x' = a_1 x + b_1 y + c_1 \\ y' = a_2 x + b_2 y + c_2 \end{cases} \quad a_1^2 + a_2^2 = b_1^2 + b_2^2 = 1 \quad a_1 b_1 + a_2 b_2 = 0$$

を合同変換とよぶことがある。

4. 新しい変換

距離を不変にすることによって角の大きさも不変にする合同変換は図形の形、大きさを不変にするが、次に角のみを不変にする変換はいかに表わしうるか考えてみる。今変換を

$$\begin{cases} x' = a_1 x + b_1 y + c_1 \\ y' = a_2 x + b_2 y + c_2 \end{cases} \quad \text{として、これによって二直線が}$$

$$\begin{cases} l_1 x + m_1 y + n_1 = 0 \\ l_2 x + m_2 y + n_2 = 0 \end{cases} \rightarrow \begin{cases} l'_1 x' + m'_1 y' + n'_1 = 0 \\ l'_2 x' + m'_2 y' + n'_2 = 0 \end{cases} \quad \text{にうつされる。}$$

そのとき $\begin{cases} l_1 = a_1 l'_1 + a_2 m'_1 \\ l_2 = a_1 l'_2 + a_2 m'_2 \end{cases} \quad \begin{cases} m_1 = b_1 l'_1 + b_2 m'_1 \\ m_2 = b_1 l'_2 + b_2 m'_2 \end{cases}$ なる関係がある。

簡単にすすめていくために次の順序で考えてみる。

(i) $l'_1 = 0, m'_2 = 0$ のときを考える。

$$\cos \theta = \frac{l_1 l_2 + m_1 m_2}{\sqrt{l_1^2 + m_1^2} \sqrt{l_2^2 + m_2^2}} \quad \cos \theta' = \frac{l'_1 l'_2 + m'_1 m'_2}{\sqrt{l'^2_1 + m'^2_1} \sqrt{l'^2_2 + m'^2_2}} = 0$$

よって $l_1 l_2 + m_1 m_2 = 0$ でなければならない。

$$\begin{aligned} l_1 l_2 + m_1 m_2 &= a_1^2 l'_1 l'_2 + a_1 a_2 (m'_1 l'_2 + l'_1 m'_2) + a_2^2 m'_1 m'_2 \\ &\quad + b_1^2 l'_1 l'_2 + b_1 b_2 (m'_1 l'_2 + l'_1 m'_2) + b_2^2 m'_1 m'_2 \\ &= (a_1^2 + b_1^2) l'_1 l'_2 + (a_1 a_2 + b_1 b_2) (m'_1 l'_2 + l'_1 m'_2) \\ &\quad + (a_2^2 + b_2^2) m'_1 m'_2 = 0 \end{aligned}$$

$$l'_1 = m'_2 = 0 \quad \text{だから} \quad (a_1 a_2 + b_1 b_2) m'_1 l'_2 = 0$$

$$\text{任意の } l'_2, m'_1 \text{ についてなりたつためには} \quad \underline{a_1 a_2 + b_1 b_2 = 0}$$

(ii) つぎに $l'_1 = 0$ となるときを考える。

$$\cos \theta' = \frac{|m'_2|}{\sqrt{l'^2_2 + m'^2_2}}$$

$$\begin{aligned} \cos \theta &= \frac{m'_1 m'_2 (a_2^2 + b_2^2)}{|m'_1| \sqrt{a_2^2 + b_2^2} \sqrt{(a_1^2 + b_1^2) l'^2_2 + (a_2^2 + b_2^2) m'^2_2}} \\ &= \frac{|m'_2| \sqrt{a_2^2 + b_2^2}}{\sqrt{(a_1^2 + b_1^2) l'^2_2 + (a_2^2 + b_2^2) m'^2_2}} \end{aligned}$$

$$\therefore (l'^2_2 + m'^2_2) (a_2^2 + b_2^2) = (a_1^2 + b_1^2) l'^2_2 + (a_2^2 + b_2^2) m'^2_2$$

$$\therefore l'^2_2 (a_2^2 + b_2^2) = l'^2_2 (a_1^2 + b_1^2)$$

$$\text{任意の } l'_2 \text{ についてなりたつためには} \quad \underline{a_2^2 + b_2^2 = a_1^2 + b_1^2}$$

(1) 相似変換

$$\text{次に} \quad \begin{cases} x' = a_1 x + b_1 y + c_1 \\ y' = a_2 x + b_2 y + c_2 \end{cases} \quad \begin{cases} a_1^2 + a_2^2 = b_1^2 + b_2^2 \neq 0 \\ a_1 b_1 + a_2 b_2 = 0 \end{cases}$$

なる変換を考え相似変換とよぶことにする $\frac{a_1}{b_2} = \frac{a_2}{-b_1} = k$ とおけば $k = \pm 1$

よって

(i) $k=1$ のとき

$$\begin{cases} x' = \alpha x - \beta y + c_1 \\ y' = \beta x + \alpha y + c_2 \end{cases}$$

(ii) $k=-1$ のとき

$$\begin{cases} x' = \alpha x + \beta y + c_1 \\ y' = \beta x - \alpha y + c_2 \end{cases}$$

いずれの場合も条件 $l'^2 = (a_1^2 + a_2^2)\{(x_1 - x_2)^2 + (y_1 - y_2)^2\} = (a_1^2 + a_2^2)l^2$ で一定倍に拡大又は縮小される。よってこの変換の場合、大きさは変わる。

しかし不変な要素はユークリッド幾何学におけるいくつかの要素を含んでおり同じ式を用いて定義することが出来る。

(例) 1. 直線について

今 $l_1x + m_1y + n_1 = 0$ を満足する点 (x, y) の集合を直線ということにする。この直線に(i)、(ii)の変換を行なってみよう。

(i)(ii)を逆にといて ($\alpha^2 + \beta^2 \neq 0$)

$$\begin{cases} x = \frac{\alpha}{\alpha^2 + \beta^2}x' + \frac{\beta}{\alpha^2 + \beta^2}y' - \frac{\alpha c_1}{\alpha^2 + \beta^2} - \frac{\beta c_2}{\alpha^2 + \beta^2} \\ y = \mp \frac{\beta}{\alpha^2 + \beta^2}x' \pm \frac{\alpha}{\alpha^2 + \beta^2}y' \mp \frac{\beta c_1}{\alpha^2 + \beta^2} \mp \frac{\alpha c_2}{\alpha^2 + \beta^2} \end{cases}$$

これを上式に代入すれば

$$\begin{aligned} & \left(\frac{\alpha l_1}{\alpha^2 + \beta^2} \mp \frac{\beta m_1}{\alpha^2 + \beta^2} \right) x' + \left(\frac{\beta l_1}{\alpha^2 + \beta^2} \pm \frac{\alpha m_1}{\alpha^2 + \beta^2} \right) y' \\ & + \left(-\frac{\alpha c_1 l_1}{\alpha^2 + \beta^2} - \frac{\beta c_2 l_1}{\alpha^2 + \beta^2} \pm \frac{\beta c_1 m_1}{\alpha^2 + \beta^2} \mp \frac{\alpha c_2 m_1}{\alpha^2 + \beta^2} + n_1 \right) = 0 \end{aligned}$$

即ち $l'_1x' + m'_1y' + n'_1 = 0$ なる形の一次方程式をうる。

$$\begin{cases} \lambda(\alpha^2 + \beta^2)l'_1 = \alpha l_1 \mp \beta m_1 \\ \lambda(\alpha^2 + \beta^2)m'_1 = \beta l_1 \pm \alpha m_1 \\ \lambda(\alpha^2 + \beta^2)n'_1 = -\alpha c_1 l_1 - \beta c_2 l_1 \pm \beta c_1 m_1 \mp \alpha c_2 m_1 + n_1(\alpha^2 + \beta^2) \end{cases}$$

よって一つの一次方程式を満足する点 $X(x, y)$ の集合に対して相似変換を施して得られる点 $X'(x', y')$ の集合も、また一つの一次方程式を満足していることがわかる。これによって直線は、相似変換によって定義される相似幾何学の図形の対象の一つであるといえる。

(例) 2. 二直線のなす角について

$$\begin{cases} l_1x + m_1y + n_1 = 0 \dots\dots ① \\ l_2x + m_2y + n_2 = 0 \dots\dots ② \end{cases} \text{のなす角を } \theta \text{ とすれば}$$

$$\cos \theta = \frac{l_1 l_2 + m_1 m_2}{\sqrt{l_1^2 + m_1^2} \sqrt{l_2^2 + m_2^2}}$$

今 相似変換(i)、(ii)を施すことによって二直線の式が

$$\begin{cases} l'_1x' + m'_1y' + n'_1 = 0 \\ l'_2x' + m'_2y' + n'_2 = 0 \end{cases} \text{ になったとするとその二直線のなす角は}$$

$$\cos \theta' = \frac{l'_1 l'_2 + m'_1 m'_2}{\sqrt{l'^2_1 + m'^2_1} \sqrt{l'^2_2 + m'^2_2}} \text{ となる。}$$

(例) 1. より

$$\begin{cases} \lambda(\alpha^2 + \beta^2)l'_1 = \alpha l_1 \mp \beta m_1 & \mu(\alpha^2 + \beta^2)l'_2 = \alpha l_2 \mp \beta m_2 \\ \lambda(\alpha^2 + \beta^2)m'_1 = \beta l_1 \pm \alpha m_1 & \mu(\alpha^2 + \beta^2)m'_2 = \beta l_2 \pm \alpha m_2 \end{cases}$$

ここで $\lambda\mu(\alpha^2 + \beta^2)(l'_1 l'_2 + m'_1 m'_2) = l_1 l_2 + m_1 m_2$

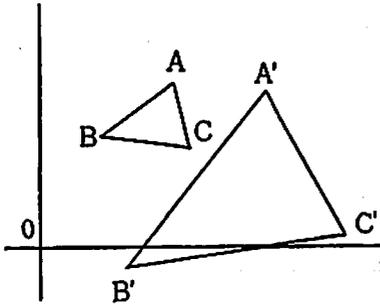
$$\lambda^2(\alpha^2 + \beta^2)(l'^2 + m'^2) = l^2 + m^2$$

$$\mu^2(\alpha^2 + \beta^2)(l'^2 + m'^2) = l^2 + m^2 \quad \text{をうるから}$$

$$\cos \theta = \cos \theta'$$

即ち二直線のなす角は相似変換によって不変であることになり、相似幾何学の図形の対象といえる。更に(イ)、(ロ)については

(イ)の場合 (正向)



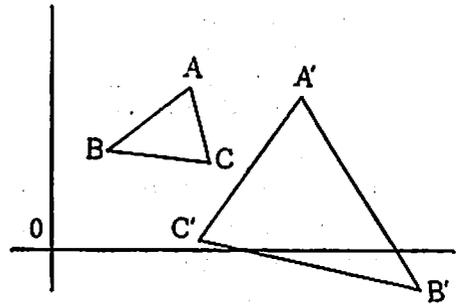
特に

$$k=1, \alpha^2 + \beta^2 = 1 \text{ のとき}$$

Euclid 幾何学における

回転移動
平行移動} となる。

(ロ)の場合 (負向)



特に

$$k=-1, \alpha^2 + \beta^2 = 1 \text{ のとき}$$

Euclid 幾何学における

対称移動となる。

(2) アフィン変換

$$\text{更に一般化し } \begin{cases} x' = a_1x + b_1y + c_1 \\ y' = a_2x + b_2y + c_2 \end{cases} \quad (a_1b_2 - a_2b_1 \neq 0)$$

なる変換を考えアフィン変換とよぶことにする。

今迄と同じ考えから六つの定数に関係する一つの変換の集合を作るが、これらの集合の任意の一つの変換によって不変な点の集りとしての図形の性質を研究していくのがアフィン幾何学である。

この幾何学の対象となる図形の性質の主なものは、

(例) 1. 二点 $X_1(x_1, y_1)$ $X_2(x_2, y_2)$ の $m:n$ の内分(外分)点 $X_3(x_3, y_3)$

$$x_3 = \frac{nx_1 + mx_2}{m+n} \quad y_3 = \frac{ny_1 + my_2}{m+n} \quad \text{にアフィン変換を施したとしよう。}$$

$$\begin{cases} x' = a_1x + b_1y + c_1 \\ y' = a_2x + b_2y + c_2 \end{cases} \text{ をといて } \begin{cases} x = \alpha_1x' + \beta_1y' + \gamma_1 \\ y = \alpha_2x' + \beta_2y' + \gamma_2 \end{cases}$$

$$x'_3 = \frac{nx'_1 + mx'_2}{m+n} \quad y'_3 = \frac{ny'_1 + my'_2}{m+n} \quad \text{を得る。}$$

よって内分(外分)比は不変である。

(例) 2. 直線について

ここで $l_1x + m_1y + n_1 = 0$ を満足する点 (x, y) の集合を直線としアフィン変換を施すならば (例) 1 と同じく

$$(\alpha_1 l_1 + \alpha_2 m_1)x' + (\beta_1 l_1 + \beta_2 m_1)y' + (\gamma_1 l_1 + \gamma_2 m_1 + n_1) = 0$$

即ち $l'_1x' + m'_1y' + n'_1 = 0$ の形をとる。

$$\text{但し } \begin{cases} \lambda l'_1 = \alpha_1 l_1 + \alpha_2 m_1 \\ \lambda m'_1 = \beta_1 l_1 + \beta_2 m_1 \\ \lambda n'_1 = \gamma_1 l_1 + \gamma_2 m_1 + n_1 \end{cases}$$

よって直線は直線に移る。

(例) 3. 二直線の平行性について

二直線 $\begin{cases} l_1 x + m_1 y + n_1 = 0 \cdots \cdots \textcircled{1} \\ l_2 x + m_2 y + n_2 = 0 \cdots \cdots \textcircled{2} \end{cases}$ が平行であることを

$\frac{l_1}{l_2} = \frac{m_1}{m_2} \neq \frac{n_1}{n_2}$ とするならば $\textcircled{1}$, $\textcircled{2}$ がアフィン変換を施して

$\begin{cases} l'_1 x' + m'_1 y' + n'_1 = 0 \cdots \cdots \textcircled{1}' \\ l'_2 x' + m'_2 y' + n'_2 = 0 \cdots \cdots \textcircled{2}' \end{cases}$ に移されたとする。

(例) 1. (例) 2. より

$$\begin{cases} \lambda l'_1 = \alpha_1 l_1 + \alpha_2 m_1 \\ \lambda m'_1 = \beta_1 l_1 + \beta_2 m_1 \\ \lambda n'_1 = \gamma_1 l_1 + \gamma_2 m_1 + n_1 \end{cases} \quad \begin{cases} \mu l'_2 = \alpha_1 l_2 + \alpha_2 m_2 \\ \mu m'_2 = \beta_1 l_2 + \beta_2 m_2 \\ \mu n'_2 = \gamma_1 l_2 + \gamma_2 m_2 + n_2 \end{cases} \text{ だから}$$

$$\frac{l_1}{l_2} = \frac{m_1}{m_2} = k \text{ とおいてたしかめれば}$$

$$\frac{l'_1}{l'_2} = \frac{m'_1}{m'_2} \neq \frac{n'_1}{n'_2} \text{ をうる。}$$

よって平行性は保持される。

以上(例)として取上げた3つの概念はアフィン幾何学の対象となる。

5. ま と め

従来のユークリッドの公理的方法は、たとえば合同、相似という量に関する概念が、公理、公準とよばれるものからはじまる論理的な進め方であった。これに対して、以上のべた解析的手法では、図形の性質に関する定理そのものの特徴をもととする分類を重視してきた。すなわち、変換によって、図形がいちような圧縮を受けるときにもなお保持される不変な性質を調べることによって定理が正しいものとして残るか、或は間違ったものになるかを分類することができることを示した。

しかしながら、新しい変換による図形の性質も常に従来の公理的図形の性質によって理解されるものであり、特に高校教材では運動の立場から量の概念を展開するところに、それが強くうたがわれている。

こうした方法の中で、

- (i) 数式の展開という煩雑さから抜けられない。
- (ii) アフィン幾何学から射影幾何学への発展
- (iii) 幾何学での無限遠点、無限遠直線の導入
- (iv) 各種変換の掘り下げ
- (v) 非ユークリッド幾何学への展開

などの問題が数多くとり残され、こうした問題点から変換を軸とする導入の足掛りであるといえる。今後このような点を考慮しながら図形指導を進めていきたい。

各種変換による幾何学の対象になるもの

運 動	相 似	ア フ ィ ン
直 線	直 線	直 線
二直線のなす角	二直線のなす角	
二点間の距離		
二点間の比	二点間の比	二点間の比
二直線の平行	二直線の平行	二直線の平行

半加算器教具の製作に関する工夫

馬 嶋 玄 敏

1. はじめに

普通科高校における物理科で、現在取扱っているエレクトロニクスの領域では、真空管回路とトランジスターの働きのごく初歩的な部分にとどまっている。

この教材を取上げることの重要さは、いまさら論をまたないが、物理Bの学習指導を通してさえ、エレクトロニクスの理論と技術を十分に身につけさせることは、とても無理なことである。そのうえ、中学における技術・家庭科の履習内容が男・女によって違っており、特にこのエレクトロニクスの領域での男女差が大きくなっている。このような現状から考えるとき、高校物理で男・女を同一の内容について指導するとしても、生徒の理解の程度、技術面での差、この領域に対する興味の程度等については、格段の違いがおこっている。

2. 記号論理と電気回路

望ましい電気回路を設計するとき、数多くの電気回路とその働きを良く知っているならば事は簡単である。しかし、このことを普通科の高校生に望むには当然のことながら限界がある。

ここで考えられることは、記号論理式の解析をし、これを回路化することに焦点を合わせて学習指導をすすめるのも一つの方法ではないかと考える。論理式の解析によって作られた回路が、論理式によって得た結論とよく一致することが必要である。この目的のために、基本的と考えられる回路を選び出すとすれば、つぎの3つになるのではないだろうか。

アンド回路 ($A \cap B$) ・ オア回路 ($A \cup B$) ・ ノット回路 ($\sim A$)

がそれで、これらを組合せることによって加算器や半加算器が作り上げられることになる。

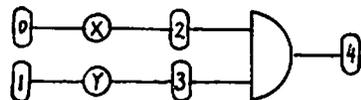
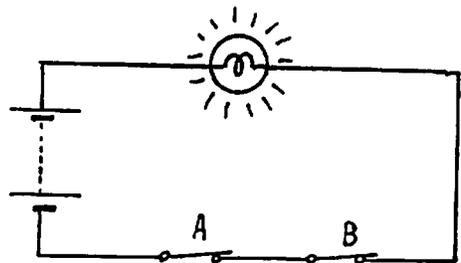
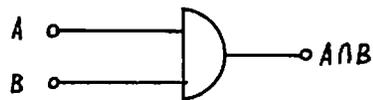
3. 基本回路の検討と教具の工夫

a. アンド回路の教具

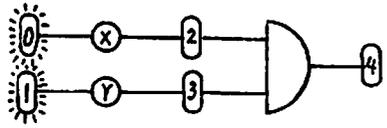
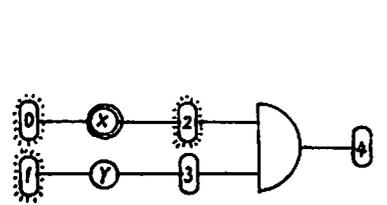
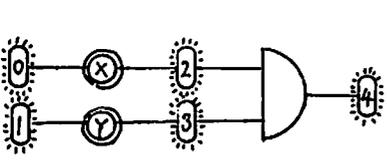
アンド回路においては、入力側に情報AとBが同時にいったときに、はじめて回路が閉じることになり出力側にその情報が出ていくわけである。

原理は以上の通りであるが、これを教具として活用できるものとして情報の進行状況が明確に指示できるものの工夫が望まれるわけである。

教具の表面には、アンド回路の図を記載し、図中の○は電球をあらわしている。情報の進行は、この電球の点滅によって



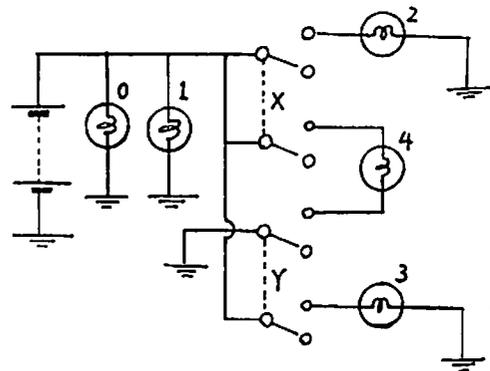
知ることとする。⑧, ⑨は情報の入力进行操作するスナップスイッチである。
つぎに、この回路の教具について順を追いながら説明する。

回 路 図	情報進行状況の解説
	<p>スイッチX・Yともに開いている状態であれば、電球0, 1は点灯しているが、アンド回路には全く入力がない状態を示している。</p>
	<p>0から情報の入力があったものとし、スイッチXを閉じると、電球2が点灯する。しかし、アンド回路の片方に入力があっただけであるから出力側には情報の伝達はない。 同じようにして、0のかわりに1から情報の入力があったとすれば、スイッチYを閉じ、電球3が点灯する。すなわち、アンド回路では、入力側の2・3いずれか一方だけの入力では、出力側への情報伝達はないわけである。</p>
	<p>情報が0と1の双方に入力が同時にあったとすると、スイッチX・Yの回路をともに閉じる。電球2・3が点灯し、同時に電球4も点灯する。すなわち出力側に情報が伝達されたことになる。入力側への入力は、情報が片方だけでは出力としては得られず、二つ揃うことが条件となる。</p>

以上のようなスイッチ操作によって、情報進行の状況を豆電球の点滅によって明示できる教具の配線としては、図のようなものがよい結果を得た。

必要な部品

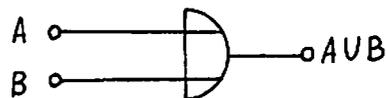
- 豆電球およびソケット 各 5コ
- 電源用タミナル 2コ
- 二回路一接点スナップスイッチ 2コ
- 配線用錫メッキ線 約 1m
- ベニヤ板 (30×60cm) 1枚



この回路において、X・Yそれぞれのスナップスイッチを操作することにより、アンド回路の情報進行の状況が、前述の表のように示すことができる。

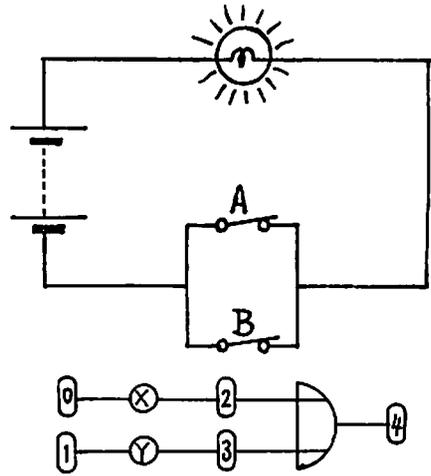
b. オア回路の教具

オア回路においては、入力側に情報AまたはBのいずれかが入ったときに回路



が閉じる。もちろん、情報A、Bが同時に入ったときにも、全く同じように回路が閉じることになる。このようにして出力側に情報が出ていくわけである。

このオア回路についても、アンド回路の場合と同じような情報の進行状況が明示できる教具の工夫が望ましい。これについても、スキッチの操作順に従って説明することにする。図中の記号や作動については、前述と同じような約束をする。

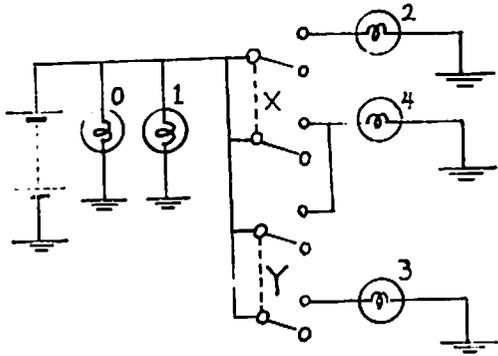


回 路 図	情報進行状況の解説
	<p>スイッチX・Yともに開いている状態であれば、情報の入力がないので、電球0、1は点灯していても、2、3、4は点灯していない。</p>
	<p>0から入力があったとして、スイッチXを閉じる。 オア回路の片方2に入力があったので電球2が点灯するが、このとき同時に電球4も点灯する。これは、電球0から入った情報が2を経て4に達したことを示している。すなわち、オア回路から出力側に情報が出たことをあらわすことになる。</p>
	<p>つぎに、情報が0ではなく、1から入力があった場合を考える。このときは、スイッチYを閉じるので情報は3を経て4に達する。すなわち、入力が0-2-4と通ったのと同じようにこのときには、1-3-4の経路を通ったことになる。 さらに、入力側0、1に同時に入力があった場合、別々に1つ宛の入力があったのと全く同じように、出力側に情報が伝達されることになる。</p>

以上のようなスキッチ操作によって、情報進行の状況を豆電球の点滅によって明示できるように、アンド回路の教具と同じような考えによって、図のような配線で試してみた。この目的のためには十分であると考えている。

必要な部品

[この教具については、アンド回路の教具と全く同じもので製作ができる。]

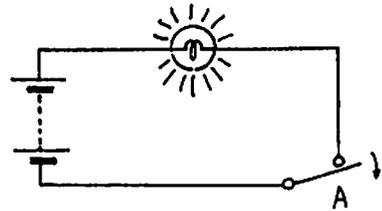
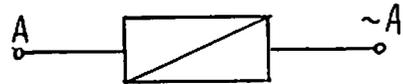


この回路の原理をしめす結線図を見ると、スキッチの OFF と ON が逆になっているだけで、この回路をしめす教具の配線も極めて簡単である。

ノット回路についても、アンド回路やオア回路と同様に情報の進行状況と操作との関係を考察してみることにする。

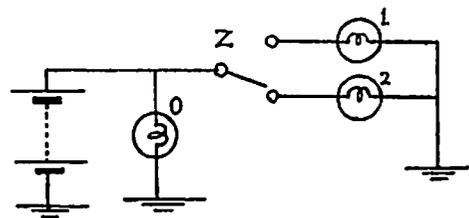
c. ノット回路の教具

ノット回路では、入力側に情報が入っていないとき、出力側に情報が出ており、入力側に情報が入ると、回路が開き、そのために出力側にいままで出ていた情報が消えてしまう。



回路図	情報進行状況の解説
	<p>スキッチ Z が開いていれば、情報の入力がない状態であるから、電球 0, 2 は点灯している。すなわち、ノット回路であるので、入力のないときは出力側に情報が出ていることになる。</p>
	<p>電球 0 から入力があったとする。これは情報がスキッチ Z を通過したことになるので、電球 1 は点灯する。ノット回路の入力側に情報が入ったので、出力側に出ていた情報は消されることになる。すなわち、電球 2 は消えるわけである。</p> <p>つぎに、いままで入力側に達していた情報が停止したとする。このため、ノット回路の出力側には、情報が反転して出てくる。このために、電球 1 は消え、電球 2 が点灯する。</p>

ノット回路のはたらきを示す教具の回路としては、図のようなものが適當である。



必要な部品

豆電球およびソケット	各3コ
電源用タミナル	2コ
一回路二接点スナップスイッチ	1コ
配線用錫メッキ線	約60cm
ベニヤ板 (30×60cm)	1枚

4. 半加算機の教具の工夫

これまで述べてきたアンド回路、オア回路、ノット回路の3つの基本回路を適宜組合せることによって、いろいろな情報処理が可能になってくる。さしあたり有効な処理能力をもつ回路としては、加算器を考えることができる。ふつう数処理の簡便さから2進法が使われるわけであるが、この場合の加算器としては、

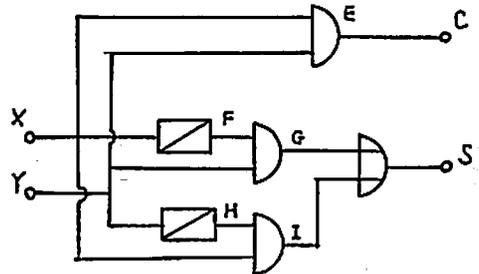
$$0 + 0 = 0 \quad 1 + 0 = 1 \quad 0 + 1 = 1 \quad 1 + 1 = 10$$

の4通りの処理ができればよいことになる。

はじめの3通りについては、比較的簡単であるが最後の $1 + 1 = 10$ については、上のケタへの繰り上がりが必要になる。このための情報処理機能をもつ回路として半加算器が適当である。

図において、上のケタCへの繰り上がりについて考えてみる。

入力側 $X \cdot Y$ ともに情報1とすると、ノット回路のために $F \cdot H$ へは情報が達せず、このために $G \cdot I$ への情報も0、したがって、 S も0となる。これにたいして、 E はアンド回路の出力側であるから C は1。結局 C への繰り上がりができたことになる。



つぎに、 X に0、 Y に1とすると、 G を経て S に達し S は1、 C は0である。すなわち繰り上がりなし。

同様にして、 X に1、 Y に0とすると、 I を経て S に達し S は1、 C は0で、これも繰り上がりなしとなる。

もちろん、 $X \cdot Y$ ともに入力がなく0であれば、 $C \cdot S$ ともに0となるわけである。

この半加算器の場合、 S に導かれる情報と、 C に導かれる情報について、論理式であらわせばつぎのようになる。

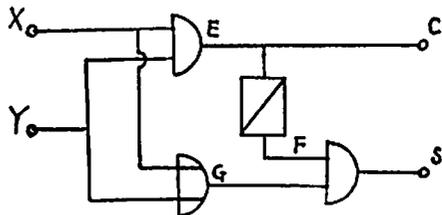
$$\begin{cases} S = \{X \cap (\sim Y)\} \cup \{(\sim X) \cap Y\} \\ C = X \cap Y \end{cases}$$

つぎに、同じ結果が得られる半加算器で別の回路のものについて考えてみることに

X	Y	X + Y
0	0	0
1	0	1
0	1	1
1	1	10

する。この回路についても、 $X \cdot Y$ ともに1とすると、 E に出力があり、 F は消える。このために C は1、 S は0となり上のケタに情報が繰り上がったことになる。

つぎにXに0, Yに1とすると, Gを経てSに達しSは1, Eはアンド回路の出力側のために0, したがって, Cは0となる。同様にして, Xに1, Yに0とすると, やはりGを経てSに達し, Eには情報は達せず, Cは0, Sは1となる。最後にX・Yともに入力がなければ, C・Sともに0となるわけである。

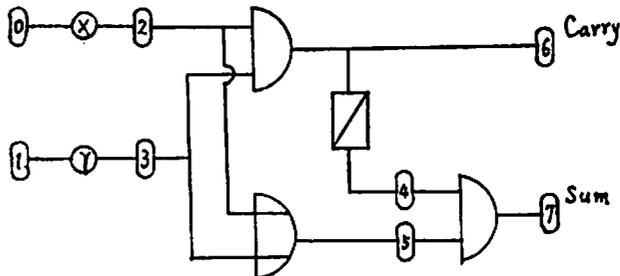


この回路について, S・Cに達する情報について, 論理式であらわせれば, つぎのようになる。

$$\begin{cases} S = (X \cup Y) \cap \{\sim(X \cap Y)\} \\ C = X \cap Y \end{cases}$$

5. 半加算器パネルの結線回路の工夫

半加算器の2例を比較してみたが, 作用については何ら変りはない。ただ, 回路についていえば, 後者の方がはるかに簡単である。基本回路の数も極めて少なくすむ。そこで, この回路についてパネルを作ることにした。



図の0から7までは, 豆電球をあらわしている。X・Yはスナップスイッチである。この回路図を教具の表面に記入しておき, スwitchの操作で半加算器の情報伝達の様子を示そうとするものである。

X・Yのスイッチ操作と, 豆電球の点滅の関係を表にすると, 右の表のようになる。表中の○印は点灯の状態を示している。

	0	1	2	3	4	5	6	7
O	○	○			○			
X	○	○	○		○	○		○
Y	○	○		○	○	○		○
X+Y	○	○	○	○		○	○	

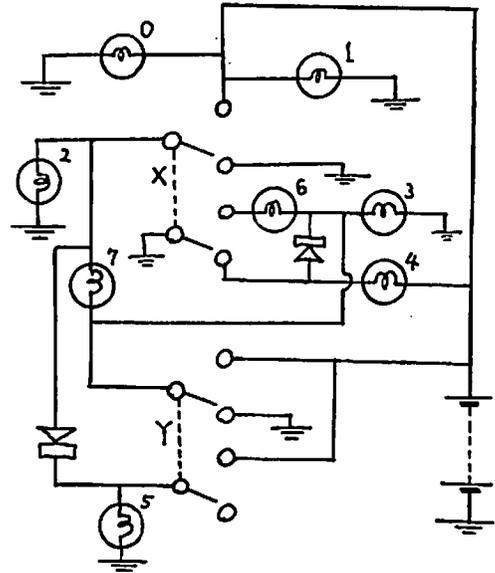
豆電球6はCのことであるのでX+Yのときだけ点灯し, 7はSを示しているので, XまたはYのときだけ点灯すればよいことになる。

この点滅を示す表から, パネルの結線をすると, 図のようなものが良い結果を得た。

このパネルのスイッチXのみをONにすると, 電球3, 6が並列になり, これが電球7と直列となるので, 電球7には電源電圧の%だけ作用し, 電球3, 6には電源電圧の%だけ作用する。正規の電源電圧を保っておけば, 電球7はやや暗いが他の電球の明るさとは, あまり目立たない。また, 電球3, 6については, 作用する電圧が低いので点灯しているのは, ほとんどわからない。また, ダイオードが回路に入っているために電球4, 5はやや暗くなる。ただし, この場合はダイオードの特性によって改善の可能なことである。シリコンダイオードを使用したか, 実用にはほとんど障害はなかった。

つぎに、スイッチYの方をONしたときには、スイッチXをONしたときのような回路の問題がないので点灯すべき電球には、すべて正常な電圧がかかっている。

このパネルを使って操作すれば、基本回路であるアンド回路、オア回路、ノット回路の3つの回路を含んでいるので、これらを別々の教具として製作しなくとも原理の解説には十分な効果が得られるものと考えられる。



必要な部品

豆電球およびソケット	各7コ
電源用タミナル	2コ
二回路二接点スナップスイッチ	2コ
ダイオード	2コ
配線用錫メッキ線	2m
ベニヤ板 (60×100cm)	1枚

6. おわりに

現代は情報の時代であるといわれている。我々がこの情報処理の能力を備えることは、社会の形成者として常識である。このときの情報処理に有効な役割を演ずる加算器の機構をよく理解し、処理の原理をよくわきまえて操作ができることは非常に心強いことである。

各企業に導入されつつあるコンピューターは、もっと高度な処理能力を持ったものではあるが、ここでは、その手ほどきの段階にとどまるとはいえ、原理的には極めて簡易な働きをたくみに利用しているということを知りたいと考える。

生徒に対する学習の動機づけとしては、数処理の理論を教え込む立場もあろうが、ここでは、エレクトロニクスをこの方面に発展的にとり上げ、原理を理解させるための教具として、比較的有効なパネルを試作したのでここに紹介する次第である。

***GOD'S LITTLE ACRE* : ON WILL THOMPSON'S WAY OF LIFE**

ICHIROH YOSHIOKA

God's Little Acre, published in 1933, is Caldwell's fourth long story, which comes after his *Tobacco Road*. They are his important works in his early days as a writer and also his masterpieces.

Erskine Caldwell was thirty when *God's Little Acre* was published. He was working over the plot of this novel in 1931 and began to write it in 1932, finishing it in three months.

This is one of the greatest best-sellers of this century in the States and 9,500,000 copies have been sold since its publication.

It is true that the novel was widely read because its publisher was accused for the crime of distribution of an obscene book. But it is chiefly because *God's Little Acre* is a great literary work that it is still popular about thirty years after its publication. In the States the serious problems of the world presented in it have remained unsolved though they have been changed a lot.

The story is about Ty Ty Walden, an old farmer, his sons and daughters in Marion, Georgia. Poor people in the South after World War I, in a farm village and a mill town, are described in a vivid way. Ignorance, poverty, and sad humor are found in every page of this book and the real life in the South those days is to be thoroughly realized. Under such circumstances those poor people are almost always full of energy, which is characteristic of the story.

Ty Ty is the hero of the story who had been frantically digging up his farm for gold over fifteen years with his sons, Buck and Shaw.

The most interesting character, however, is Will, Ty Ty's son-in-law. He was working in a cotton-mill at Scottsville near Marion, but it has been shut down with the workers locked out a year and a half. Will's candid behaviors, a little instinctive, are depicted with Southern social problems for their background.

A great panic was brought on in 1929 and the times were at their worst all over the country. More than 14,000,000 workers were thrown

out of employment in early thirties, and jobless people demonstrated everywhere in the U. S. big cities, demanding, "Job or Wage!" Farmers united themselves as well as workers and tried to prevent their land-mortgage from being forfeited. In 1932 the people elected Franklin D. Roosevelt as President, not Hoover who was first making much of taking proper measures for the relief of big businesses.

God's Little Acre was written just about this time when American people were almost in the depths of poverty.

Now back to Will he is a typical mill worker in the South. He is a good-natured worker and does not hesitate to make advances to some women but his wife. Troubles over a female and violence resulted from poverty, ignorance, and corruption are daily occurrences. Although he is poisoned by them just like other people he will not lose his stout mind of a worker. He is in this point quite different from the other characters.

Here is required the further examination of Will's way of life.

(1) Will and Cotton-mill

The mill where he was working has been shut down eighteen months. When he knew that the loom-weavers were beaten because of starving in the other mills and that they were operating regularly he stiffened, thinking that he had to help his friends find some means of living. The management was carrying a lock-out. The others might break open its steel-barred doors and wreck the machinery. But he said resolutely to the others.

"We can't let anybody go in there and wreck the machinery..."

"What we want to do is to go in there and turn the power on."

"I've always been in favor of turning it on and never shutting it off. And that's what I've tried to tell the local."

Will even talked about turning on the power in his sleep at night. His father Ty Ty persuaded him in vain to be away from the mill and to help him dig a hole for gold on his farm before he got his head shot off.

The next passage will give an exact explanation of Will's mind.

"He knew he could never get away from the blue-lighted mills at night and the bloody-lipped men on the street and the unrest of the

company towns. Nothing could drag him away from there now. He might go away and stay a while, but he would be restless and unhappy until he could return."

According to his wife, Rosamond, he is a loom-weaver through and through, and talks about a loom just like it was a baby. He could not be content on a farm.

What is interesting is that Will won't rely on AFL at all and abuse them.

"What can you tell that son-of-a-bitch AFL? Nothing! They're drawing pay to keep us from working."

It can be easily understood that AFL could not always give a right lead to those workers as a trade union worthy of the name was not to be formed in 1920's. As for AFL, they were only satisfied with national prosperity of twenties and did not take up a positive attitude toward getting higher wages. It is clear that they were disposed to avoid any strike, which is shown in Will's bitter complaint.

"The local draws pay for sitting on their tails on the platform and shaking their heads when somebody says something about turning the power on. The sons-of-bitches."

The workers and their families were starving as they were driven out of the mill. The state was giving out yeast because everybody in the Valley got pellagra from too much starving.

Besides the company was eager to employ girls because they would never rebel against the harder work, the longer hours or the cutting of pay. And rent for the company houses were still charged.

Will could not hold his anger.

"The mill can't get us back until they shorten the hours, or cut out the stretchout, or go back to the old pay. I'll be damned if I work nine hours a day for a dollar-ten, when these rich sons-of-bitches who own the mill ride up and down the Valley in five-thousand dollar automobiles."

Will was afraid for fear the company might run the mill with another operators and get out Will and his fellows. He wisely knew that "if the mill ever once got started without them they wouldn't have a chance in the world".

So Will resolved that they would take the mill away from the company and turn on the power and run it themselves. He was prepared for death. He could not sit still and see the company starve them with a dollar-ten.

On the day Will was going to enter the mill, the management called together three cars of plain-clothes guards from the Piedmont. Not only men but women and girls were gathering around the company fence. After eighteen months of waiting, they thought that there would again be work in the mill.

The mass of men were excitedly pouring through the opened doors and soon they occupied the whole mill. But the moment Will turned on the power and they ran back to their accustomed positions, he was shot by a guard.

Suddenly there was a silence and the machinery stopped running again. His friends confessed that they didn't know what to do now Will wasn't any more. Men were walking slowly homeward up the hill discouraged and injured too, women and girls beginning to leave with tears in their eyes.

Will Thompson indeed was a man of decision and had iron nerves, but he made two big errors, for which he lost his life and only could get his fellows to play a part of a mob.

First, no matter how week-kneed AFL were and no matter what antipathy he had to them, it was not quite right of him to disregard the decision of the local. They had voted to arbitrate. Secondly, he did not realize what it meant that the workers were going to occupy the mill at all. He did not even think if there was any chance for occupying it. There was no clear prospect. He only wished to turn the power on.

Although Will Thompson, a good worker, realized that they workers need rise themselves against the owners of the company, he could not have a deep view of organized labor or class struggle. He over-estimated one man's ability. He had to rely upon the strength of a mass.

He talked his wife about himself on the night before he was killed with a pistol.

"But over here in the Valley, I'm Will Thompson. You come over here and look at me in this yellow company house and think that I'm nothing but a piece of company property. And you're wrong about that, too. I'm Will Thompson. I'm as strong as God Almighty Himself now,..."

(2) Will and Rosamond

Rosamond, Will's wife, is Ty Ty's daughter. She is kind to Will and a good wife, while he does not show himself worthy of the trust.

He will have his own way in woman hunting. Once he was in bed with Darling Jill, Rosamond's sister and Rosamond fired a pistol at him in anger. The scene is described with much humor. He was also loud in his praise of Griselda just before his wife. Griselda is Ty Ty's daughter-in-law and Will sometimes even declares that he had promised himself to get beautiful Griselda, Buck's wife, after he saw first, until he ventured to put it in practice.

It is strange that those young women should be willing to lie naked by Will. One reason he was so attractive to them was that he knew what they really wanted and that he could give a straightforward answer, of which the conversation between Ty Ty and Griselda after Will's death will give a vivid account.

"Of course you know — these things about what a man would want to do when he saw me."

"I reckon I do. Maybe I do know what you mean."

"You and Will were the only men who ever said that to me, Pa. All the other men I've known were too—I don't know what to say—they didn't seem to be men enough to have that feeling—they were just like all the rest. But you and Will weren't like that. A woman can never really love a man unless he's like that."

Will was a "real man" anyway to those young women though he was not so big or strong. The way he looked that made him different from the others was "how he was made inside" according to Ty Ty. "Will could feel things."

Rosamond loved this "real man" with all her heart. She was very often worried by his positive attitude toward Darling Jill and Griselda, and it so

happened that he ripped Griselda's clothes from her before his wife, and did what he had been wanting to do. And yet on the night before Will entered the mill she feared if he was all right as she felt something that sounded strange in his voice. On the next morning she knelt on the floor at his feet, putting his shoes and socks on his feet and saw him to the door.

Rosamond, with Griselda and Darling Jill, was among the crowd of women and children wildly excited outside the company fence. If the machinery started running, they would have something beside fat-back and Red Cross flour. She was seeking after the figure of her husband among a surge of closely pressed bodies. When she heard the other women crying, "Let's hear the machinery, Will Thompson. Turn the power on.", she was very much proud of Will.

"She wished to climb up high above the mass of crying women and shout that Will Thompson was her husband. She wished to have all the people there know that Will Thompson was her Will."

But to her great sorrow the report of a shot put an end to his life and in a moment she found herself Will Thompson's widow.

She still could not possibly believe that he would not come to life any more even when she saw his limp body. Rosamond thought to herself while she was watching her husband being put into the ambulance. "He was Will Thompson now. He belonged to those bare-backed men with bloody lips. He belonged to Horse Creek Valley now."

BIBLIOGRAPHY

Austin, Aleine : *The Labor Story*. Aoki-shoten, 1954.

Bo, Imano : *Caldwell*. Nanun-do, 1967.

Cunliffe, Marcus : *The Literature of the United States*. Penguin Books, 1954.

Handlin, Oscar : *The American People*. Penguin Books, 1966.

Rideout, Walter B : *The Radical Novel in the United States*. Harvard Univ. Press, 1965.

本校研究紀要バックナンバー目次

第1集 (1958) 70頁

アメリカ史学史の一断面	池 本 幸 三
精神適性および身体適性よりみた学校小集団の実証的研究	丹 羽 勲 昭
鳶沼湖沼群(青森県)における湖沼堆積泥の色と珪藻遺骸の群構造	渡 辺 仁 治
とんと昔覚書	中 川 芳 雄

第2集 (1959) 72頁

自由民権運動と朝鮮問題 —とくに大阪事件について—	中 塚 明
「家庭経営」の指導にあたって	清 水 歌
理科における実験・観察技能の評価について	次田・佐藤・渡辺・森井・竹村
「山城国謡歌九番」について —中世末期歌謡の一考察—	橋 健 二
ジョン・L・チャイルズの教育思想 —「教育と道徳」を中心に—	三 鼓 慶 造

第3集 (1960) 64頁

体育における男女差の研究	横 山 一 郎
その1. 体育的活動の実際場面における男女差の実証的研究	藤沢キミエ・太田昌子
糸結びテストに見られる指先の器用さの年令的発達について	橋・中西・中村・井田・山口
高校生の文章表現能力に関する調査とその考察	

第4集 (1961) 100頁

郡山金魚養殖池における水色の発現機構と金魚の生産	
2. 金魚池に生産されるプランクトンの種類	渡 辺 仁 治
国学と民俗学との接点 —宇井可道の民俗研究を中心に—	奥 谷 道 夫
Imagism における Image の特質	中 西 幸 二
高校数学において集合の考えをどのようにとり入れるべきか	樋口忠清・笠野卓夫
幾何と表現の問題	香川・岡田・勝田
中学生の基礎的裁縫技術(まつりくけ)の発達について	清 水 ・ 藤 沢 ・ 太 田
当附中・高生徒のYGテスト結果について	樋口・前川・清水・野村
複合語の形式について —連話形式との比較による—	山 口 堯 二

第5集 (1962) 54頁

Spelling の Errors とその記憶法	中 西 幸 二
高校生における学友関係の実証的研究	横 山 一 郎
その1. 本校生の悩みにおける学友関係の一考察	
その2. 本校生の学友関係の実態に関する一考察	
その3. 本校生の学友関係の集団場面に関する一考察	
「今昔物語集」と「俊頼髓脳」との関係(一)	橋 健 二

第6集 (1964) 88頁

数学科学習指導の効果的な方法について (第一報)

CBA化学コースの実践研究について

微速度撮影法を通して見た生物現象

本居宣長の政治論

国語学力評定における客観テストの妥当性についての一調査

高校生の文章理解能力に関する調査とその考察

数 学 科

中 村 馨

森 井 実

奥 谷 道 夫

中 西 昇

国 語 科

第7集 (1965) 84頁

CBA化学コースの実践研究について (第二報) 熱力学概念指導の試み

暦法、とくに置問法についての一考察

高校運動部集団に関する実証的研究

中学校における被服製作指導に関する一考察

高校生の文学作品の理解についての調査とその考察

井田・小谷・武部・中西・野浪・山口

中 村 馨

馬 嶋 玄 敏

横 山 一 郎

藤 沢 きみえ

第8集 (1966) 74頁

THE STUDY OF SPORT CLUBS AT SCHOOL IN JAPAN

BSCSの実験について (付評価)

「高村光太郎」ノート

Ichiro Yokoyama

森 井 実

井 田 康 子

第9集 (1967) 62頁

山村の巨大都市化に対する適応 —吉野山地の野迫川村の場合—

数学に於ける抽象性と記号化についての一考察

新しい地学教育をめざすもの

A REPORT ON THE ENGLISH TEXTBOOKS OF

THE SOVIET UNION

森 鷗外「雁」の表現

作文の推考における段落の修正 —中学二年の感想文についての考察—

野 村 京 子

好 田 順 治

馬 嶋 玄 敏

Ichiroh Yoshioka

亀 井 雅 司

小 谷 稔

研究紀要発行規定

1. 本誌は本校における教育の理論方法に関する各種の研究と実践の成果を発表するために発行される。
2. 年1回、11月に発行する。
3. 発行人は学校長とする。
4. 発行所は本校内におき、研究調査課が編集・発行の実務にあたる。
5. 本誌は全国各大学附属学校・奈良県の高등학교および本校教官に配布される。
6. 本誌発行に要する経費は、国費でまかなわれる。

工房より(大正十三年)

- 1 しきりに桜の幹をいそぎのぼる蟬は止まりてなきはじめたり
- 2 なきかけ又なきなほすみんなのあかるきかなや必死のうたは
- 3 鳴きをはるとすぐ飛び立ちみんなは夕日のたまにぶつかりにけり
- 4 いつしんなきどよもせば袋もて探る気になれず蟬の腹を見る
- 5 子供等に蟬を分けてもらひたりうれしくてならす夕めしくふにも
- 6 ちりちりとときしる蟬の音すみゆげば耳にきこえずただ空に満つ
- 7 天上にひびきどよもす夏の日の歌のうたひ手さびしき小蟬
- 8 だしぬけにちちと声立てまた黙るかなしき蟬上籠の中の蟬
- 9 生きの身のきたなきところどこにもなく乾きてかろきこの油蟬
- 10 手にとれば飛ぼうともせずのろろと手のひら痒くあるきまはる蟬
- 11 どこに口があるかわからぬこの蟬に何をあたへんあたるものなし
- 12 つつましく手にはふ小蟬ちちとなきたちまち飛びて青空に入る
- 13 飛びたつとき吾が手を搔きてゆきし蟬の足の力の忘れれなくに
- 14 小刀をみな研ぎをはり夕闇のうごめくかけに蟬彫るわれは
- 15 羽を彫り眼だまをほれば木の蟬もじつと思して夕闇にはふ
- 16 じつとしてこれやこの木の朽つるまで木ぼりの蟬はあり縁とすらん
- 17 ちひさき虫にはあれどわれよりも命ながしとはしきわが蟬
- 18 電燈にあてて木蟬をわが見れば見れども飽かず虫けらの蟬
- 19 ひつそりと翼をさめてゐる蟬のつばさ手ずれてやや光りたり
- 20 髪をとき木をきり居りとみづからの心に知りつくたびれにけり
- 21 松の香部屋に吹きみち切出の刈さき夏の雨ひかりたり
- 22 三角の木ぎれ手に持ち墨引きていとしきものか蟬の眼をみれば

昭和二十一年

太田村山口山の山かげに裊をくらひて蟬彫るわれは

田園の憂鬱(佐藤春夫)

彼のあるか無いかの知識のなかに、蟬というものは二十年目くらいにやつと成虫になるというようなことをいつかどこかで、多分農学生かだれかから聞き聞いたことがあったのを思い出した。おお、この小さな虫が、ただ一口に蛙鳴蟬騒と呼ばれているほど、人間には無意味に見える一生をするために、彼自身の年令にはほとんど近いほどの年を経ていようとは、そうして彼ら

の命はわずかに数日―二日か三日か一週間であらうとは、自然はいったい、何のつもりでこんなものを造り出すのであらう。いやいや、こんなものと言つてただ蟬ばかりではない。人間を。彼自身を？神が創造したと言われているこの自然は恐らく出たらめなのではあるまいか。そうして出たらめを出たらめと気付かないで解こうとする時ほど、それが神秘に見える時はないのだから。いやいや、何も分らない。そうだ、ただこれだけは分かる―蟬ははかない、そうして人間の雄弁な代議士の一生が蟬ではないと、だれが言おうぞ。

庭の蟬(伊東静雄)

旅からかへつてみると

この庭にはこの庭の蟬が鳴いてゐる

おれはなにか詩のやうなものを

書きたく思ひ

紙をのべると、

水のやうに平明な幾行もが出て来た

そして

おれは書かれたものをまへにして

不意にそれとまるで異様な

一種前生のおもひと

かすかなめまひをともしなふ吐気とで

蟬をきいてゐた。

蟬(堀口大宇)

ラフオンデーヌの寓話。

さてこれはわたくしの思話。

蟬がゐた

夏ちゆう歌ひくらした

秋が来た

困つた、困つた、

(教訓)

それでよかつた

人の帽子にとまつて啼く。
あんまり取りいい蟬なので
子供も蟬をほしがらない。

鼠は人の眼の前で

でんぐりがへしをうつたりする。

金毛白尾の狐さへ

夕日にきらきら光りながら

小鳥をくはへて畑を通る。

部落の人は兎もとらず鳥もとらず、

馬は家族と同等で

おんなじ屋根の下にねる。

おれもほんやりここに居るが

まつたく只で住んでゐる。

山のとまたち

山に友だちがいつばいゐる。

友だちは季節の流れに身をまかせて

やつて来たり別れたり。

カツコーも、ホトトギスも、ツツドリも

もう、さやうなら、をしてしまつた。

セミはまだゐる、

トンボはこれから、

変らないのはウグイス、キツツキ、

トンビ、ハヤブサ、ハシブトガラス。

兎と狐の常連のほか、

このごろではマムシの家族。

マムシはいい匂をさせながら

小屋のまはりにわんざとゐて、

わたしが踏んでも怒らない。

栗がそろそろよくなるよと、

ドングリひろひの熊さんが

うしろの山から下りてくる。

恥かしがりやの月の輪は
つひにわたしを訪問しない。

角の小さいカモンカは

かはいさうにも毛皮となつて

わたしの背中に冬はのる。

真珠湾の日

宣戦布告よりもさきに聞いたのは

ハワイ辺で戦があつたといふことだ。

つひに太平洋で戦ふのだ。

詔勅をきいて身ふるひした。

この容易ならぬ瞬間に

私の頭脳はランビキにかけられ、

昨日は遠い昔となり、

遠い昔が今となつた。

天皇あやふし。

ただ此の一語が

私の一切を決定した。

子供の時のおちいさんが、

父が母がそこに居た。

少年の日の家の雲霧が

部屋一ぱいに立ちこめた。

私の耳は祖先の声で充たされ、

陛下が、陛下がと

あへく意識が眩いた。

身をすてるほか今はない。

陛下をまもらう。

詩をすてて詩を書かう。

記録を書かう。

同胞の荒廃を出来れば防がう。

私はその夜木屋の大きく光る駒込台で

ただしんけんにさう思ひつめた。

なやみに堪えずふところにかへりて
いと静かに又眠りゆく。

ペンと劍

劍も

銃も

取ることを知らないかはり
運命は一本のペンをあたへ

銃と劍のかはりにせよと命じた。
運命はそれで生きることを得させ

復讐と虚偽を叩きこはすことを教へた。

しかもそのペンさへも問だるつこく

頼りないと思ふことはやめよう、

このペンをまもることは

己をまもりつづけることに外ならない。

これをすてて生きられない。

これより外に武器は見当らない。

最後の最後まで持ちつづけ

まもり続けるものはペンより外にない

いふなかれ

すでに生気なしと、

ただよりよき運命の下に

そのみちびきに従はんとするため

ペンは命の終まで持ちつづけるのだ。

何をまよふのだ

何も用もないのに恐るのだ。

朝ぜみの胸けき目さめなしけり(蜘蛛)

ふるさとや松に苔づく蜘蛛のこゑ(〃)

かたかけやとくさつらなる蜘蛛のから(〃)

山ぜみの消えゆくところ幹白し(軽井沢)

あきせみの明るみ向いて陸かな(秋蜘蛛)

夏あはれ生きてなくもの木々の間(夏)
崖深き春蜘蛛の町に入り(春蜘蛛)

同棲同類

——私は口をむすんで粘土をいぢる。

——智恵子はトンカラ機を織る。

——風は床にこぼれた南東豆を取りに来る。

——それを雀が横取りする。

——カマキリは物干し綱に鎌を研ぐ。

——繩とり蜘蛛は三段飛。

——かけた手拭はひとりでじやれる。

——郵便物ががちやりと落ちる。

——時計はひるね。

——鉄瓶もひるね。

——芙蓉の葉は舌を垂らす。

——づしんと小さな地震。

——油卵を伴奏にして

——この一群の同棲同類の上から

——子午線の大火団がまつさかさまにがつと照らす。

(夜明けのかなかなに)

夜明けのかなかなに起された。

眼をつぶつてきいてみると、

水色の、青磁色の、雨過雲天の、

あくまで透明の、あくまで一途の、

又うつさうと暗いほど青々した

あの土川波ののつびきならぬ

積極無道の夏がぶんぶん匂つて来た。

別天地

山の蜘蛛はだしぬけに

ほそみち（日本美術）

夏になつた、

明けがたの四時にはもうことしの
初の蝉が遠方で鳴いた、

その声は明け方のいろを溶かした、
僕の脳のはそみちをとほり

よろこびの曲を置き忘れて行つた、
見なれ聞きなれた曲ではあるが

いくら聞いても

あきることのない蝉の歌、

ちつとも なつてゐない歌だが

明けがたの僕の眼をさました。

お尻をうごかし

羽根をゆすぶる初蝉は僕から通り抜け
世界の樹木を亘つて行つた。

かくて（昭和詩集）

蝉は

おのれ死なむことを知らず

ただに鳴きやまざること

あはれとやわれらいふならん。

蝉は

鳴きてあますところなく

かくて死にゆけり。

「あはれこの下にねむれる蝉

その生涯をもてあますところなく

歌ひおぼれしと言ふ」

蝉（吟味詩集）

此処は奉天のみやこなり。

此処こそは奉天といへるなり。

洋馬車はだんだらの幌をかけ

幌の上に蝉のとまりて

じいと鳴きけり。

形小き満洲の蝉はも

じいと鳴きけり。

われは満洲の蝉を頬にあて

蝉となにごとをか囁き交はさんとす。

蝉の言葉を聞かんとはせるなり。

生ける鮎

山ざとの

古りたる家に

夏されば

蝉鳴き茶店

いとなみにけり

蝉なけば

蝉も嬉しき山ざとの

すずしき緑に

我は憩ひつ

愛猫（青き魚を釣る人）

抱かれてねむり落ちしは

なやめる猫のひるすぎ。

ややありて金のひとみをひらき

ものうげに散りゆくものを映したり。

葉のおもてにはひかりなく

おうしいつくし、法師蝉、

気みちかに啼き立つる賑はしきも

はたとばかりに止みたり。

抱ける猫をそと置けば

光太郎と屎星と

光太郎と屎星と

どちらも偉い詩人

どちらの詩も心をゆさぶる

それぞれ進った心の琴線をかきならす。

卵しぐれきゝながら

二人の詩をよんで、

たわごと書いて……

天上のお二人

苦笑なさらないで下さい。(一六六八年夏)

参考資料

卵頃(定本より)

いづことしなく

しいいとせみの啼きけり

はや卵頃となりしか

せみの子とらへむとして

熱き夏の砂地ふみし子は

けふ いづこにありや

なつのあはれに

いのちみちかく

みやこの街の遠くより

空と屋根とのあなたより

しいいとせみのなきけり

あさせみ(題)

まだ日のあたらぬ間に朝蟬が啼いてゐる。

遠い森の奥、どこか幽遠な世から聞えるやうである。

あさせみの啼くの聞き

乳母車を押しながら私は散歩してゐる。

石白く寂しいふるさとの川辺の土手の上、

これが自分の姿であるか？

土手から見えるものは茫々たる頃の風景ばかりだ、

その風景の果に見えるものは山と山との重畳。

ひぐらしのうた(動物詩集)

あんないい声がどこから出るのだらう、

うすいセロファンの羽根から

世界一の音楽がはじまる。

指揮もなければ、

伴奏者もないのに

朝と夕方には

すばらしい夏の歌が

はじまる、

ひぐらしが鳴くと

小鳥たちも

しばらく鳴きやんでしまふ、

あんまりいい声なので

小鳥たちははづかしくなるのだらう。

さみしうれしと鳴けり(その他より)

われあまた蟬のうたをつづりぬ

五十路かかちて

けふも蟬の鳴けるをきき

哀しうれしさみしとおもへり。

蟬は夕かけて

哀しうれしさみしとは鳴きけり。

四方の木々かけて

あはれ蟬はも

哀し嬉し淋しとは鳴きけり。

あさうだと人々が思ふのである。それが詩の発足で、それから詩は無限に分化進展する。私自身のこの一種の詩の分野も、詩の世界は必ず、これを抱括して詩そのものの鞏固とするに違いないと信じてゐる。」(自分と詩との関係)と述べ、何の不安も持っていない。彫刻の安全弁として詩作するが、「詩を書くことと腹が立つ、腹が立つから詩を書くのだ。詩を書くことと笑ひ出す。笑ひがこみ上げるから詩をかくのだ。……書いて、書いて、書きまくつて、怒と笑を蹂躪しよう。」の憶ふの詩のように天衣無縫である。「詩とは人が如何に生くるかの中心より迸る放射のみ。」(余はかく詩と観ず)であるから、「いくら目隠をされても己は向く方へ向く。」(詩人)と詩作する。不安や迷がない。扉星は「文章以前」に次のように詩作している。

自分は行き詰つてゐるやうだが、
何時の間にか茫々たる何処かの道へ出てゐる。

自分はもう書けないかと思ひ惑ひながら
やはり何物かを書いてゐる。

自分は書くことに何かを発見して行く
文章など自分には既う要らないことに気がつく。

扉星は求道者である。努力家である。だから、作つた詩は心血がそそぎ込まれている。だから「行ふべきもの」に

詩よ亡ぶるなかれ、

詩よ生涯の中に漂へ、

我が嗚言と亡びることなかれ、

我が英氣よ運命を折檻せよ

行き難きを行け

詩よ滅ぶるなかれ、

我が死にしも詩よ生きてあれ。

汝の行ふべきものを行へ。

と、我が嗚言も亡びることなかれと願う。光太郎は腐葉土とするに違いないと信じてゐるが、光太郎は彫刻家として会心の作品を創るために苦しみ、詩を安全弁としてゐるためか、不可避のものとして、おのずから詩がほどばしり出るのであるか。「おれの詩はおれの実体以外になく、おれの実体は極東の一彫刻家であるのに過ぎない。」(おれの詩であるからこそ、躊躇なく作れ、他の詩をはぐくむ詩となると思うのである。)雪の頃からかかつて

るる詩が、桜が散つてもまだ出来ない(悪婦)のような時も、勿論ある。が、大体は生れながらの詩人は生れながらの声を不可避に詩としたようである。

⑥ 戦争と二人

昭和十八年の「日本美論」の「ペンと剣」の詩では、扉星は「このペンをまもることは己をまもりつづけることに外ならない。」「ただよりよき運命の下に、そのみちびきに従はんとするため、ペンは命の終まで持ちつづけるのだ何をまよふのだ、何の用もないのに避るのだ。」と、逡巡がない態度をうちだしている。軍国主義華やかなりし頃、かえつて扉星は、まよいの心を捨てることが出来たのである。軍国主義の見えざる重臣が、心をはっきりさせたのである。自分にいきかせるような口調である。ペンは剣よりも強しといひきれなかつた点に俗世間を解脱できない扉星らしさがある。光太郎は、「真珠湾の日」には身をすて、陛下をまもり、詩をすて詩を書こうと、「ロマンラン」には二いろの詩を作り、記録の詩が印刷されたと書いてゐる。光太郎にはためらいがない。純真に思いつめるのである。詩集「記録」、「大いなる日に」には戦争を道義的にうけとり、献身的に作つた詩でない詩、記録の詩が収録されている。

戦争協力の結果になつてしまつた光太郎に、終戦は一大ショックであつた。そして戦後は、山口山に自己流瀆のわびしい生活をしたのである。

終りに

作品などを通して比較してきたことは、二人の詩人の併対比的に浮彫りにしてみたからである。まだ比較検討の余地はいろいろあり、5・6の項はもっとふれたいが、紙数制限があるので、割愛する。

扉星の抒情は、情緒的、感覺的で、素朴な野生と人間臭がある。生活の欲情も強く、夢を追う審美的官能的な作家であり、卑俗な題材を卑俗におちいらせぬ芸術感を持ち、感受性は鋭敏である。前進をやめぬ執拗な努力家であり、あくまでも人間的である。

光太郎のは、知性があり、批評精神がちらつき、感情と思想がある。美の純粋性、美の究極的実体の追究に憑かれたモラリヲト、ヒューマニストの、理性と意志とに根を据えた、不可避な作詩である。

とにかく比較すればする程、根本的な違いがあり、その世界観、人生観、芸術観の相違に掘り下げるべきであるが、他日にゆずる。

やさしい牝獅子の帰りを待ちながら、
自由と瀾歩の外何も知らない。

勇氣と潔白の外何も持たない。

未来と光の外も見ない、

いつでも新らしい、いつでもうぶな魂を

寂寥の空気に時折訪れる

目もはるか宇宙の薫風にふきさらして、

獅子は傷をなめてゐる。

犀星のライオンは動物園の眠れるライオン。素直に見た通り、感じた通りである。未知数の力、今は柔かい毛並と優しい呼吸つかひと、気ばらないで、見たまま、感じのままを再現している。

光太郎のライオンは、自身の心の投影がある。つんぼのやうな孤独の中心で終りまでは、その感が深い。孤独の王者なる野性の獅子、憤怒と、侮蔑と、嘲笑と、自尊の一声、これは反俗の叫びである。自由と瀾歩と勇氣と潔白と未来と光、永遠に新しいうぶな魂は光太郎の世界のものであり、その願いでもある。猛獣箱は光太郎の心の世界の野生の猛獣であり、世間普通のもではない。協力会議の詩に「会議の空気が窒息的で、私の中にある猛獣は、官僚くささに中毒し、夜毎に曠野を望んで吼えた」とある通りである。或間でも「己は野を馳けまはるけだものだ」といっている。動物園の檻の中の動物達を歌ったには白熊・象の銀行・苛察・ぼろぼろな駝鳥・マント狒狒がある。それぞれヒューマニティにみちた目でみ、自由を奪うものへの怒りが爆発している。まったく光太郎の内部感情の吐露を猛獣をかりて表現しているのである。白熊と象の銀行・苛察には痛程の孤独がある。寂寥がみちている。光太郎の心がそのまま、猛獣を通して伝わってくる。犀星のとは趣が全く違う。さすが猛獣箱をまとめただけのことである。

5 時に対する態度

無題（光太郎）

詩人とは特権ではない。不可避である。

詩とは文字ではない。言葉である。

言葉とはロゴスではない。アクトである。

アクトは原始に立つ。「余は文学のみ。」

不安（鶴・犀星）

詩とは何か

詩と我々の関係とは何か

我々の信じていい詩が何処にあるのか、

どういふ詩を信じていいのか、

詩は大なる芸術であるかどうか、

詩の中に我々が生涯潜むことができるか、

最早この一つの真実に就て

不安はないか、

不安なく詩の中に「我」を抛つことができるか、

「我」に抵抗するもの前に

我々は自身の詩を持つて何人の前にも立ち得るか

詩こそ生涯の仕事であると言へるか。

光太郎のは「結局私は詩を不可避に書くに過ぎない。従つて私は自分の詩を無価値状態の場に放置する。価値の決定は一切人まかせである。一〇〇でもゼロでも己むを得ないのである。私が不可避といふのは言をかへれば特権といふ事になる。「詩人とは特権ではない。不可避である。」と嘗て書いたのも、同じ事を見方の相違から別々に表現し、後者の態度を詩作の内的必然と認めたのである。詩は個人といふ因子から数学のやうに不可避的に開展する。それは計算者の自由勝手は許さない、即ちそれが詩及詩人の特権である。」「（道程）について」が解説になつているといってよい。真の詩とは詩精神が激刺として、やむにやまれぬ心の要求から作られる。独り酸索を奪つてに「嘔吐に似た詩の熱塊が、五臓を圧して逆転する」又「独り酸索を奪つて詩は夜天に燃え始める」とあるのも不可避に詩が作られることが示されている。

犀星は不安なく詩の中に「我」を抛つことができるか、詩こそ生涯の仕事と言へるか、不安をもって、詩に対しては、光太郎の場合とは随分差がある。光太郎は「詩の世界は宏大であつて、あらゆる分野を抱摂する。詩はどんな矛盾をも容れ、どんな相剋をも包む。生きてゐる人間の胸中から真に迸り出る言葉が詩になり得ないことはない。（中略）詩はともかく言葉にある生得の感じを持つてゐる者によつて形を与えられるのであつて、それが言葉にある生得の感じを持つてゐない者の胸中へまでも入り込むのである。あ

光太郎の前述の頰を彫るや鯉を彫るとは違って、客観的に自分の姿を描く、刃物を研ぐ人。犀星の描き方と通じる点があるので比較してみた。もともと救世観音を刻む人と比較した方がよいかもしれないが、刃物を研ぐ人は、研ぐ人、この人、追ってあるのかなどと客観的に描いて見せるが、光太郎の心姿である。ただ、一途にひたすらに芸術に精進する意欲があふれている。そんなことさへ知らないように、一瞬の気を眉間に集めて、一心不乱、忘我集中、彫る事につながる作業にさえ、この心、この姿、無限級数を追うのである。自己の烈しい芸術的意欲を浮き彫りにしている。犀星のは、絵である。うす暗い床の間の石刷りの鹿をつれた翁と童子の絵と、菊を彫る人と、世界を幻想的に結びつけたものである。絵でも、古風なイメージと香が漂う。客観的に描いていても、彫刻家を自任する人と、普通人の差が明確である。彫る意欲は犀星にはない。ただ、夢幻的イメージを描こうと試みているだけである。

4 猛獣をテーマとした詩など

光太郎には猛獣窟という一群の作品がある。十六篇ある。烈しい気魄の反映である。犀星にはこのような作品群はないが「ライオン」というのがあ。光太郎には「傷をなめる獅子」があるので比較してみる。

ライオン

ライオンはまだ眠つてゐる

これを揺り起すことはできない

石を投げること

吠えさせることもできない

力は解らない。

柔かい毛並を透して

優しい呼吸づかひが見えるだけだ。

傷をなめる獅子

獅子は傷をなめてゐる。

どこかしらない

ぼうぼうたる

宇宙の底に露出して、

きんぎょの、きんぎょの、きんぎょの、

遠近も無い丹砂の海の片隅、

つんぼのやうな酷熱の

寂寥の空気にまもられ、

子午線下の時、

とつこつたる岩角の上にとざりとねて、

獅子は傷をなめてゐる。

そのたてがみはヤアエのびん髪、

巨大な額は無敵の紋章、

速力そのものの四肢胴体を今は休めて、

静かなリトムに繰返し、繰返し、

美しくも逞しい左の肩をなめてゐる。

獅子はもう忘れてゐる、

人間の執念ぶかい邪智の深さを。

あの極東島のむれ遊ぶ泉のほとり

神の顔たる常緑のオアンスに、

水の誘惑を神から盗んで、

きたならしくもそつと仕かけた

卑怯な、黒い、鋼鉄のわなを。

肩にくひこんだ金属の歯を

肉ごとまぎりすてた獅子はかう然とした。

憤怒と、侮蔑と、嘲笑と、自尊とを含んだ

ただ一こゑの叫は平和な椰子の林を震憾させた。

さうして獅子は百里を走つた。

今はただだのしく傷をなめてゐる。

どこかしらない

ぼうぼうたる

つんぼのやうな孤独の中、

道にはぐれても絶えて懸念の無い

幾世紀の血を浴びた、君、忍辱の友よ、
君の巨大な不可抗の手をさしのべるか。

おお呑み難い親愛の友よ、

君はむしろ私を二つに引裂け。

このささやかな創造の技は

今私の全存在を要求する。

この山雀が翼をひろげて空を飛ぶまで

首の座に私は坐つて天日に答へるのだ。

麻の実をくだく山雀（高麗の花）

お前が終日麻の実を砕いてゐるので

そのひわ色の翼の音をさせてゐるので

机のわきでやつとわたしの目がさめるのだ。

お前がいつもひつそりしてゐたら

わたしは終日ねむつてゐるかも知れない。

何ひとつ面白くない日が多いわたしに

邪魔気ではあるが居ないより居る方がよいのだ。

あんまり眠り過ぎてゐたら

かまわず麻の実を止り木で砕いて呉れ。

麻の実をつつく山雀ながら、光太郎は見ながら彫り、屎星はその音で目を
さますのである。光太郎は芸術の絶対性を語り、絶体絶命の境地で彫刻をし
ている心情を語る。ひたむきな芸術精進の姿が、気魄が満ちている。屎星は
面白くない日を送るダルな生活の目覚し役に、邪魔物だが居る方がよい山雀
と歌うのである。利己的な偽らざる心情が、姿がある。光太郎の首の産は、
彫刻家、しかも時流に媚びることなき人の、芸術の絶対性の意識の強烈な人
にしてはじめて作れる高きがある。屎星の詩は、悟らざる野生の人のなまな
ましい生活のもたらしたものであり、一般性がある。

刃物を研ぐ人

黙つて刃物を研いでゐる。

もう日が傾くのになまだ研いでゐる。

裏刃とおもてをびつたり押して

研水をかへては又研いでゐる。

何をいつたい作るつもりか、

そんなことさへ知らないやうに、

一瞬の気を眉間にあつめて

青葉のかけで刃物を研ぐ人、

この人の袖は次第にやぶれ、

この人の口ひげは白くなる。

憤りか必至か無心か、

この人はただ途方もなく、

無限級数を追つてゐるのか。

菊を彫る人（高麗の花 大正十三）

うすぐらい床の間に

石刷りの古い百寿園がかかつてゐる。

翁が一人、童子が一人、

そして角のある鹿を従へてゐるのに

地には寂しい一木の木茸が生え

翁は鹿と何か話してゐるらしい。

この絵のまはりには白字の石刷りがある。

その古い床の間の前で

朝になると庭をへだてた墮子硝子の明りで

ぐいぐい菊の花を彫つてゐる人がある。

花は白い、

一弁ごとに鮮かに雪のやうに彫られる。

葉はみどりに――。

朝のあかりのある間に

菊は鋭い白さを低いでゆく、

鹿をつれた石刷りの翁かも知れない。

それとも聡しげな童子であるのか。

ともあれ清い香ひで

ぐいぐいまぐり立てて

美しい白菊が彫られてゆくのだ。

識に関する詩である。

「直接彫刻を主題として書いた詩ばかりが彫刻に因縁を持つのではない。詩の形成に於ける心理的、生理的の要素にそれが含まれてゐるのである。だから多くの詩人の詩の形成の爲方と、私自身の詩の形成の爲方とは何かしら喰ひちがつたものがあるやうに思はれる。」(自分と詩との関係)とある通り、所謂造型詩集の中にいられない詩も造型的感覚のもとに彫刻的に構成されてゐる詩が多い。例えば、雨にうたるるカテドラルの立体的構成は見事であり、感動の再現が、単なる抒情に墮さぬ立体的、音楽的諧調を伴う。このような点においては光太郎の詩は他の詩人たちみなと違つてゐる。「私は何を指しても彫刻家である。」(自分と詩との関係)といい、「僕の本職は彫刻である。僕の存在は彫刻一つにかかつてゐる。世の中を見ると、みんな彫刻に見えて仕方がない。」(美と眞実の生活)という。「詩はおれの安全弁」(エビグラム)。「私は自分の彫刻を護るために詩を書いてゐる」(自分と詩との関係)と明言する。彫刻家としてのものの見方が、すべての基調である。このような詩人は他には見当らない。だから犀星の詩と比較しても、その結論ははっきりしているから必要がないように思われるが、同じような題材をテーマにしているのがあって、よみ比べると興味深いので、そのうちの三つほどにふれてみたい。裸形と裸形崇拜、山雀が題材の首の座と麻の束をくたく山雀、刃物を研ぐ人と菊を彫る人など。

裸形 (智恵子抄)

智恵子の裸形をわたくしは恋ふ。

つつましく満ちてゐて

星宿のやうに森厳で

山脈のやうに波うつて

いつでもうすいミストがかかり、

その造型の瑪瑙質に

奥の知れないつやがあつた。

智恵子の裸形の背中の小さな黒字まで

わたくしは意味深くおほえてゐて、

今も記憶の歲月にみがかれた

その全存在が明滅する。

わたくしの手でもう一度、

あの造型を生むことは

自然の定めた約束であり、

そのためにわたくしに肉類が与へられ、

そのためにわたくしに畑の野菜が与へられ、

米と小麦と牛酪とがゆるされる。

智恵子の裸形をこの世にのこして

わたくしはやがて天然の素中に帰らう。

裸形崇拜 (抒情小曲集補遺)

われの肉光る

うちより湧くところの

みどりの織羅舞ふところの

われの肉光りて走しる。

荒削りの血紅の鋭どきラインの

ただこれ祈禱体なり。

むしけらもふるるながれ

眼はとこしへを射るのみにあらず

われそのものを射る。

彫刻家の心眼に映じた愛妻智恵子の裸形が、山脈のやうに波うち、うすい

ミストがかかる奥知れぬつやを持つ瑪瑙質と、対象を彫刻的美意識でとらえ

てゐる。そして思慕の情が痛い程うたわれてゐる。念願通り、十和田湖畔に

像を残して光太郎は天然の素中に帰つた。

犀星は自分の肉体を祈禱体として、崇拜する。生きるものとしての気魄を

みなぎらして、われの肉光りて走しるを祈禱する。

山雀の詩がある。

「首の座」(昭和四年)

麻の実をつつく山雀を見ながら、

私は今山雀を彫つてゐる。

これが出来上ると木で彫つた山雀が

あの暗れた冬空を飛んでゆくのだ。

その不思議をこの世に生むのが

私の首をかけたの地上の仕事だ。

そんな不思議が何になると、

木の香たかく立つて部屋に満ちる。
時処をわすれ

人をわすれ呼吸をわすれる。

この四畳半と呼びなす仕事場が
天の何処かに浮いてるやうだ。

甲冑ということばがあつても、星星のとはイメージが違ふ。星星のは戦闘のイメージにたち、光太郎のは仏像の天部のイメージがある。星星はあくまでも人間的、生動的であり、光太郎は脱俗的、天上的である。蟬を一心不乱に彫る光太郎の心と姿が鮮やかだ。生きの身のいやしさは、蟬にも光太郎にもない。このような境地からこそ、素晴らしい光太郎の蟬の木彫が生じたのだ。

蟬がうたいこまれている詩は、星星には蟬頃・あさせみ・ひぐらしのうた・さみしうれしと鳴けり・ほそみち・かくて・蟬・生ける蛙・愛猫など。光太郎には同棲同類・夜明けのかなかなに・別天地・山のともだちなど。(参考資料参照)

星星は蟬の啼くことに一番関心がある。蟬頃では「しいいとせみの啼きけり」、あさせみでは「まだ日のあたらぬ間に朝蟬が啼いてゐる」、ひぐらしのうたでは「あんないい声がどこから出るのだらう」、さみしうれしと鳴けりでは「あはれ蟬はも 哀し嬉し淋しとは鳴きけり」、ほそみちでは「あきることのない蟬の歌」、かくてでは「ただに鳴きやまざることを」、蟬では「じいと鳴きけり」、愛猫では「気みちかに啼き立つる」、生ける蛙では「蟬なけば」、前記の城壁 令嬢ミンミン、野に記されたもの、みな蟬の声がうたわれている。不思議なる顔だけが蟬の声をきかせていない。一生、うたいつづけた詩人星星としては、蟬に託した想があつたのではなからうか。さみしうれしと鳴けりの「われあまた蟬のうたをつづりぬ」の通り、相当数あり、「さみしうれしと鳴けり」、「かくて」などには星星の生涯の味喚がある。蟬頃にはじまり、すべて情緒的抒情の詩である。自然の風物のなかで育ったものらしい抒情である。同じ着想でも、詩の形態をとると俄然、饒舌となるのも、詩の王城を目ざす星星の姿があるのであり、生ける限り啼きしきる蟬の声に心ひかれたのも当然であらう。

光太郎の蟬の詩は数が少い。仕事と愛の瞬間の幸福をうたう同棲同類の伴奏が油蟬。別天地・山のともだちは、山口山の風物の一つとしての蟬。夜明

けのかなかなにだけが啼き声をテーマにしている。彫刻家であることが本領であつた光太郎としては、蟬の歌より形に心をひかれる文章が饒舌であることは当然であらう。短歌には蟬をテーマにしたのが、大正十三年に二十二首、昭和二十一年に一首ある。(参考資料参照) 短歌には、素朴な観察と素直な叙情があり、特に彫刻家としての特性は著しくない。十四番めの歌からあとは、「彫る」ことが歌われているが、立体感にみちんでいるというのではない。啼くことが歌われているのは八首。

星星には蟬の句が十句ある。(参考資料参照) いずれも生彩なし。

佐藤春夫の「田園の憂鬱」の中の蟬の文章を思い出す。(参考資料参照) 前二者と違い、童心の影はない。正面から取り組んだ、真面目そのものである。同じく大詩人、が、それぞれ持ち味が違い、それぞれの風格がうかがわれる蟬の文章ではある。

他の詩人の蟬の詩は沢山あるが、堀口大学の「蟬」伊東静雄の「庭の蟬」を参考資料に掲げた。それぞれ趣が違ふ。啼くことが取り上げられているのは同じだけれど、それぞれの生活意識や生活感情が異なれば、同じく啼く声を取り上げても、違った音色を生じ、よみあきない。夏の風物詩 蟬の歌が尽きぬように、これからも蟬の詩歌は尽きないだろう。

国歌大観をひもといてもみて蟬の歌は沢山ある。テーマは、蟬の声、そのうすい翅など。

この原稿も古都奈良の蟬しぐれの中で書いている。

3 彫刻に関する詩など

光太郎には造形詩集としてまとめる四十四篇の詩がある。父の顔・粘土・五月のアトリエ・鉄を愛す・とげとげなエビグラムの二篇・月曜日スケルトン・車中のロダン・後庭のロダン・蕙・金・十大弟子・鮫・ミンエル・オオクレエルを読む・美を見る者・偶作の第一・第十二・第十四・最後の工程・熟知・存在・首の座・北島雪山・刃物を研ぐ人・似顔・美の監禁に手渡す者・村山槐多・鯉を彫る・萩原守衛・團十郎造像由来・孤坐・芋銭先生景慕の詩・つゆの夜ふけに・銅像・キキエツツに寄す・蟬を彫る・救世観音を刻む人・美しき落葉・御前彫刻・楠公銅像・彫刻一途・美に生きる・人体饑餓・人間拒否の上に立つ・十和田湖畔の裸像に与ふ、など。造形と美意

ずんずんわたしの方を見つめて歩いてくる

ふしぎに誰かによく似た顔で

泥にまみれて道うてくるのが恐ろしい(田舎の花 大正十一年)
詩の方が先に書かれ、饒舌である。「カブトのやうに」の比喩は

城壁

蟬が一どきに啼き出した

声をそろへて戦ひ出すやうに
大きな城壁のやうな林の奥から……。

みんな鎧を着てゐる

弓矢をつがへてゐる

林と林とがつながり合つてゐる

そこをゆく汽車の音さへしない。

ただ一さいにかちどきをあげてゐる。

そして一枚の葉もうごかないのである。

しづかに熱く、土さへ暑く。(田舎の花)

詩の方では鎧になつてゐる。同じ発想で、これも饒舌。「僕は蟬の頭に梅

鉢の紋がついて……」は「令嬢ミンミン」となる。

あなたの頭にある

黄金の紋章はあれは

何といふ紋章ですか。

あなたのお髯は

鳴くことにうまく動く。

あなたは何の天才ですか。(昨日いらっして下さい)

又、「蟬は頭の上の空が高いことを知つてゐた」は後に詩がある。

野に記されたもの

一疋の蟬がじいと鳴き立つて

天に向つて

火の粉のやうに舞ひあがつて行つた。

そして間もなく

つかれてぼとりと地のうへに落ちた

蟬は天にかぎりなく

あんまり広いので怖くなり

羽根が萎えるやうな寒さが感じられ

驚いて落ちた。

そしてこんどは木から木のあひだを飛び廻つた。

どれだけ廻つても

木のないところがなかつた。

蟬はようこんで飛び廻り

うたをうたひつくし

羽根のやぶれるまで生きてゐた。

だが、天に向つて

きいきい舞ひ上つた恐ろしい日の

その広茫さが、蟬の頭にのこり、

蟬の死んだあとに記されてゐた。

野に、

野の人の知れないところに記されて居た。(昭和十八年)

着想は文に表現されており、これも詩が多弁である。さすがに詩の方がい

ずれも趣がある。文はオリジナルであり、詩は十分に歌つてある。天衣無縫

の感があるのは、詩にも童心が潜むからか。

光太郎の「蟬を彫る」は俗を離れている。蟬も光太郎も。

冬日さす南の窓に坐して蟬を彫る。

乾いて枯れて手に軽いみんなん蟬は

およそ生きの身のいやしさを絶ち、

物をくふ口すらその所在を知らない。

蟬は天平机の一角に道ふ。

わたくしは羽を見る。

もろく薄く透明な天のかげら、

この虫類の持つ靈気の翼は

ゆるやかになだれて追らず、

黒と緑に装ふ甲冑をほのかに包む。

わたくしの刻む絵の肌から

ない。多くの彫金製のセミが下品に見えるのはこの点を考へないためである。すべて薄いものを実物のように薄く作つてしまふのは浅はかである。ちやうど逆ならぬに作つてよいのである。木彫に限らず、この事は彫刻全般、芸術全般の問題としても真である。むやみに感激を表面に出した詩歌が必ずしも感激を伝へず、がさつで、ダルであることがあり、かえつて逆な表現に強い感激のあらわれることのあるやうなものである。さうかといつて、セミの翅をただ徒に厚く彫ればそれこそ厚ぼつたくて、愚鈍で、どてらを着たセミになつてしまふ。あつてしまふかあつてしまふかを感じないこと。これは彫刻上の肉合ひと面の取扱ひによつてのみ可能となるのである。しかも彫刻そのものはそんなことが問題にならないほどすらすらと眼に入るべきで、まるで翅の厚薄などといふことは気のつかないのいいのである。なんだかあたり前にできてると思へれば最上なのである。それが美である。この場合、彫刻家はセミのやうなものを作つてゐるのでなくて、セミに因る造型美を彫刻してゐるのだからである。それ故にこそ彫刻家はセミの形態について徹底的な科学的研究を遂げ、その形成の原理を十分にのみこんでゐなければならぬのである。微細にわたつた知識を持たなければ安心してその造型性を探求することができない。いい加減な感じや、あてずっぽうでは却て構成上の自由が得られないのである。自由であつて、しかも根帯のあるものでなければ真の美は生じない。

エジプト人が永生の象徴として好んで甲虫のお守を彫つたやうに、古代ギリシヤ人は美と幸福と平和の象徴として好んでセミの小彫刻を作つて装身具などの裝飾にした。声とその諧調の美を賞したのだといふ。日本のセミは一般にやかましいもののやうに取られ、アブラなどはことに暑くるしいものの代表とされてゐるが、あまり樹木の無いギリシヤのセミはもつと静かな声なのかも知れない。あるいはカナカナのやうな種類なのかも知れない。しかし私は日本のセミの無邪気な力一ぱいの声が頭のしんまで貫くやうに響いてくるのを大変快く聞く。まして蝉時雨といふやうな言葉で表現されてゐる林間のセミの競演のごときは夢のやうに美しい夏の贈物だと思ふ。セミを彫つてゐるとさういふ林間の緑したたる涼風が部屋に満ちてくるやうな気がする。(光太郎)

犀星の「蟬観」と、光太郎の「蟬観」との差は一読、あきらかである。犀

星の一言にしていへば、童心を失わない素朴な感想である。光太郎のは、全く彫刻家のものである。童心で無邪気に愛したものにへの追懐―樹木のある所で育つたものの共通性もあるが、何といつても彫刻家としての把握の仕方がユニークである。彫刻における視覚は、絵画に於ける場合と少々違つて、触覚的視覚であるといつてゐる通りのものが感ぜられる。「いい加減な感じや、あてずっぽうではかえつて構成上の自由が得られないのである。自由であつて、しかも根帯のあるものでなければ真の美は生じない。」の言の如く、蟬の観察も知識もいい加減でない精確なものである。

或男はイエスの懐に手を入れて

二つの削振を撫でてみた。

一人のかたくな彫刻家は

万象をおのれ自身の指で触つてみる。

水を裂いて中をのぞき、

天を割つて入りこまうとする。

ほんとに君をつかまへてから

はじめて君を君だと思ふ。

昭和三年作の「蝻知」という有名な詩で、彫刻家としての把握の仕方が明確にうたわれているが、「セミの彫刻的契機……真の美は生じない」の蟬観も同じである。彫刻十箇条（大正十五年）の一に「彫刻の本性は立体感にあり。しかも彫刻のいのちは詩魂にあり」とあるが、蝻の姿態は立体的に描きだされ、詩魂があふれる。

犀星のは詩人の思いつきに満ちてはいるものの、平面的、絵画的、常識的で、一般性のある主観的、感覺的傾向が強い。又むぎだしの「童」がある。冒頭の文は次の詩に通う。

不思議なる顔

地面からそろそろ這ひ出してくる蝻を見つめてゐると

誰かの顔に似てゐるやうな気がする

まだ地中の奥にゐて

いちども見たことのないものの顔が浮んでくる

這ひ出したからのままな蝻が

の美と品位とを害ひ、彫刻であるよりも玩具に近い又は文人の骨董に類するものとなる。其点でセミは大に違ふ。彼はその形態の中にひどく彫刻的なものを具へてゐる。しかも私が彼を好むのはむしろ彫刻以前からの事である。

子供は皆この生きた風琴を好む。私も子供のころ夏になると谷中天王寺の森の中で夢中に駆けまわつて彼をつかまへた。モチの木の皮をはいで石でたたいて強いモチを作り、竹竿のさきに指をなめてそれをまきつける楽しさを今でもやや感傷的に思出す。私はなぜかクモの巣の糸を集めて捉へるといふ方法を当時知らなかつた。これは最近になつて聞いた方法である。これで行れるならこの方がよい。翅も傷めないに違ひない。セミが思ひがけなく低い木の幹などに止まつて鳴いてゐるのを発見すると、まつたく動悸のするほど昂奮する。今でもする。

私は夏の夕方など時々モデル漁りに出かけることがあるが多くは自分では獲れず、顔なじみの子供らにもらつてくる。セミがあつた有りつたけの声をふりしほるやうに鳴きさかつかつてゐるのを見ると、獲るのも躊躇させられるほど大まじめで、鳴き終るとたちまちぱつと飛び立つて、あわててそこらの物にぶつかりながら場所をかえるやいなや、寸暇も無いといふやうにすぐまた鳴きはじめる、あの一心不乱な恋のよびかけには同情せずにはゐられない。よびかけることに夢中になつてゐて呼びかける目的を忘れてしまつたのではないかと思ふほど鳴くことに憑かれてゐる。実際私はセミが配偶者を得たところを見たことが無い。

東京にはチイザイ、アブラ、ミンミン、ツクツクボウシ、カナカナくらいしか居らず、ハルゼミ、チツチゼミ、クマゼミ、エゾゼミなどはゐないやうである。私が実際手にして見たのはそれゆゑはなはだ種類少く、この中でもハルゼミ、エゾゼミはまだ見ない。クマゼミは先年熱海で松の木のとつべんに鳴いてゐるのを見たが竿が届かず、手にはとれなかつた。ジイジイがいはん質朴で顔も眼が離れてゐるとほけてゐる。アブラは大きくて、精悍で、野蠻で、がんばり強く、その声の止めどもなく連続するフォルシシものものすこい通りに、姿も剛健一点張りである。私は好んでこのセミを作る。翅まで厚くて不透明で茶褐色であること、胴体が割に長くて頭の小さいことなどが彫刻にいい。ミンミンはこれに比べると豪華で、美麗で、技巧的で、上等に見える。翅の透明な、胸や腹の緑と黒の模様のおもしろい、彫刻に作つては派

手なセミである。胴体は短く、腹部の末端の急すぼまりのところ可笑しい。彫刻では翅は雲母を蒔いたり、銀粉を掃いたりする。ツクツクボウシとカナカナとは女性的で獲るとすぐ死ぬ、姿も華奢で、優美で、青々とした精霊の感じがある。クマゼミまたの名シャンシャンゼミはセミの中でいちばん巨大で色も黒、緑のほかは橙色が交り、翅も透明でしかも強く、形もよいやうであるが、これは手にとつて見たのではないから詳細は知らない。ハルゼミは先年五月末越後長岡の悠久山の松林の中でその幽遠な声を聞いたが、姿は見なかつた。

セミの彫刻的契機はその全体のま^ま、ま^まのいいことにある。部分は複雑であるが、それが二枚の大きな翅によつて統一され、しかも頭の両端の複眼の突出と胸部との関係が脆弱でなく、胸部が甲冑のように堅固で、ことに中胸背部の末端にある皺襞の意匠がおもしろい彫刻的の形態と肉合ひとを持ち、裏の腹部がうまく翅の中に納まり、六本の肢もあまり長くはなく、前肢には強い腕があり、口吻がまた尖に比例よく体の中央に針を垂れ、総体に單純化し易く、面に無駄が出ない。セミの美しさの最も微妙なところは、横から翅を見た時の翅の山の形をした線にある。頭から胸背部へかけて小さな円味を持つところへ、翅の上縁がずつと上へ立ち上がり、一つの頂点を作つて再び波をうつて下の方へなだれるやうに低まり、ちよつとまた立ち上がつて終つてゐる工合が他の何物にも無いセミ特有の線である。翅の上縁の波形と下縁の単一な曲線との対照が美しい。セミの持つ線の美の極致と言へる。その波形の比例はセミの種類によつてそれぞれの特徴を持つ。またセミを横から見ず、上方から見ても翅の美はすばらしい。左右の二枚がよく整齊を保ち、外部はゆるい強い曲線を描いてはるかに後端まで走り、内側は大きい波形を左右から合せるやうに描き、後半はまた開いて最末端でちよつと引きしまる。セミは生きてゐる時も死んでもからもたいして形に変化を来さないが、この翅の末端だけは違ふ。生きてゐる時にはそれがかすかに内側にしまつてゐるが、死ぬとそこが開いた形のままで終るやうになる。むしろかすかにしまつてゐる方が美しい。木彫ではこの薄い翅の彫り方によつて彫刻上のおもしろさに差を生ずる。この薄いものを薄く彫つてしまふと下品になり、がさつになり、ブリキのように堅くなり、ついに彫刻性を失ふ。これは肉合ひの妙味によつて翅の意味を解釈し、木材の気持に随つて処理してゆかねばなら

の違い、大げさにいえば、人生観・世界観の相違を明確にしている。これは犀星の方が先で、昭和七年九月に「蟬を考へる」の一文を書いている。光太郎は、昭和十五年二月十一日に「蟬を彫る」を詩作し、同年八月に「蟬の美と造型」を書いてゐる。ただし犀星の文章に対抗して書いたとは思われな

蟬を考へる

僕は蟬の顔に肖た人間の顔を覚えてゐる。

それ程蟬の顔と人間の顔とが類似してゐる。

僕は蟬の顔の葉枯さが好きである。蟬の顔は間抜けてゐて非常に悲しげだ。悲しみが凍りついて凝固り、カプトのやうに鉄と銅とチョコレート色を塗つてゐる。田舎に百姓がゐるやうに樹木に蟬がゐる、それが皆善良さうな顔付をしてゐる。

僕は明け方に新しい浴衣を着て、蚤からぬけ出たばかりの鮮やかな蟬を美しいと思つて、幼少の時に、恋のやうなものを感した。羽根は弱々しい明け方の藍ぼんだ色を持ち、少しづつ微風のなかに震はしてゐた。僕は指にふれて見たが追習なんぞ生れ立ての蟬が知つてゐよう筈がないから、ちよつと驚いて動いたくらゐに過ぎなかつた。僕は蟬の頭に梅鉢の紋がついてゐて、その紋は黄金のコナを吹いてゐるのに見とれた。

蟬は朝日が出る時分に、その明け方の色をしてゐる羽根が次第に亀甲色に焦けて行つた。蟬の足にハリガネが通り、頭に鉄分が溶け込む、お腹に強烈な灰色の微に似た粉が固まると、眼のなかは地球儀のやうに青い複雑なもので一杯になつた。蟬はお腹が減り、歩きたくなり、立たなければならなかつた。蟬は自分の止つてゐる樹木が何の木だかは知らなかつたけれど、その樹に砂糖のあまさに似た液体を感じた。蟬は食べたくなりお腹が減り、そして二枚の鱗のやうな腹と胸の間にある小さい笛を鳴らして見たくなつた。

蟬は頭の上の空が高いことを知つてゐた。

蟬にはお母さんがゐるのか、姉や妹がゐるのか。それとも兄弟がゐるのか知らなかつた。只、親父がゐることだけをうろ覚えにおぼえてゐた。親父は田舎にゐた。田舎の土の穴の中で十年くらゐの樹やそらや土の上を見ないで暮してゐた。仲は考へた。おれの親父は何を樂しみにくらしてゐるのだらう、そして一体あと何年間をあの穴のなかにくすぶつてゐるのだらう。

蟬は樹の皮の上に、いやだわ、と書いた。

蟬は親父をさういうふうにならなかつた。それ故か腹の笛はちよつとしか鳴らなかつた。蟬は小便がしたくなり小便をした。

蟬は同族の声を城の上で聞いた。

城は青い若葉をかがる、まだ花の薫が残る樹のなかにあつた。

蟬はジイイと啼いてまた小便をした。

僕は裸になつて庭に出、杏の木にとまつてゐる蟬を一疋、つかまへると先づそれを小石か何かを投げつけるやうに、空の方に向つて投げつけるのだ。蟬は投げつけられた弾力を自分のちからで停めることが出来ない。出来ないけれど羽根をつかつて中心を取つて、弾力の尽きた時分に巧みに廻れ右するのだ。僕は学校がへりの汗くさい裸体で、先づ二三疋の蟬をそんなふう叩きつけるのが楽しみだつた。

僕は蟬の頭に何やら記憶らしいものを彫りつけた。

記憶は詩だか歌だか判らないものだが、蟬を見るたびに、僕は其処に彫りつけた覚えをおもひ出すのだ。全く僕の手は蟬のあぶらであぶら臭かつたし、僕に握られた蟬はいつも汗を掻いて抜れてゐた。僕は蟬のはらわたを覗いて見て、何にもはらわたらしいものがないことを可哀想に思うたことがあつた。まるでお腹のなかは乾いて空っぽだつた。今でも腹の減つた蟬のことを考へると悲しくなる。(犀星)

蟬の美と造型

私はよく蟬の木彫をつくる。鳥獣虫魚なんでも興味の無いものはないが、造型の意味から見て彫刻に適するものと適さないものがある。私は虫類に友人がはなはだ多く、バッタ、コオロギ、トンボ、カマキリ、セミ、クモの類は親友の方であり、カマキリの三角あたまなどにはことに愛着を感じ、よく自分の髪の毛を抜いて彼に御馳走する。カマキリは人間の髪の毛が非常に好きで進呈すると幾本でも貪り食ふ。恐れるといふことを知らない彼の性質もなかなかおもしろい。しかし彼は彫刻にはならない。形態が彫刻に向かない。バッタ、コオロギもその点では役に立たない。トンボには銀ヤンマのやうな堂々たる者もあり、トウスミトンボのやうな楚々たる者もあり、アカトンボのやうなしやれた者もあつて、一寸彫刻におもしろさうに思へるが、これがやはり駄目。彫刻的契機に乏しい。作れば作れるが作ると却つて自然

二、作品を通して見た光太郎と犀星

1 「詩歌の城」を通して

作品を踏貫していると、二人の異質が明瞭にあらわれているのに気付く。その一端にふれてみると、光太郎には大正十二年作の「(詩歌の城)」という四行詩がある。犀星にも昭和二年六月作の「詩歌の城」という題の二聯十八行の詩がある。

詩歌の城に詩はすまず

そこに住むのは家老ばかり

威儀三千は家老に間へ

詩だけはただの親仁にきかう(光太郎)

詩や俳句を一としきり軽蔑してゐたが

このごろ仲々好い味のあることが解つた。

一日十枚文章をかいてゐても

詩や俳句が一行一句もできぬことがある。

詩や俳句の王城は誰でも敵けるものではない。

その城の中の庭や金銀の居間を知り

その居間に坐る儀礼を知り

弓や矢や盾を把り

寒夜には城を護る術をしらねばならぬ。

自分は既う何千枚書いてゐるか知らない。

自分で考えただけでも茫とする。

しかしまことの詩は何もかけてゐない。

何千枚何万枚書きつかれたあとで

数行の詩や俳句を恋ひ慕ふことの嬉しき。

わが心はまだ偽らずにゐる嬉しき。

自分はへとへとになりながら

真個の心は城の中に目ざめてゐる。(犀星・故郷図絵集)

光太郎の詩は、真の時不在の形骸だけの詩歌の城、そこには生きた人間の

感動はない。本當の人間性は、生は、美辞麗句の形式の中では生きないといふのである。詩不在の詩歌の城の意義を認めず、本當の「生」の発動こそ、真の詩なのであると、うたつてゐる。或る墓碑銘にも「彼は常に詩を作りたれど詩歌の城を認めず」とある。

犀星は、光太郎の四行詩を読んで、題の着想に、例によって先をこされた感を得たのではなからうか。それと同時に、自分のは違うぞ、と發奮されたのではなからうか。そして五年目に、十八行詩が出来た。詩や俳句の王城は誰でも敵けるものではないといひ、真個の心は城の中に目ざめてゐると、全面的に詩歌の城の優越性を謳歌してゐる。まさに光太郎とは対照的である。光太郎は生れながらの詩歌の城の城主であるがゆゑに、その空しきを見ぬき、犀星は詩歌の城を目ざして精進するがゆゑに、その意義をうたい上げ、憧憬してゐるのである。「わが心はまだ偽らずにゐる嬉しき」には、光太郎の追求する、本當の生がある。詩の本質についての二人の考え方は違つてゐない。しかし、その追究のありさまは違つてゐる。「私は泣葉、有明、上田敏時代には詩を書く気がしなかつた。此等の詩人の詩は立派な詩だとは思ひながら、何だか血脈のつながりを感じなかつた。何だか別な世界の詩のやうにしか感じなかつた。詩がさういふ世界のものである以上、私自身が詩を書かうと思ふのは僭越であるときへ思つてゐた。私自身が詩を書いてもいいかしらと思ひ出したのは巴里でヴェルレーヌやボオドレールの詩をはじめて知つた時であつた……それでもまだ詩を書くことに自信が持てなかつた。表現の法をまつたく知らなかつたのである。黄金隠窟といふやうな言葉はまるで私の性に合はなかつた。」(「道程」改訂版)のやうな光太郎の詩への出発は「詩歌の城」が作られるのも當然だと思わせる。

執拗に、ひたむきに文学を追求した犀星にとって「詩歌の城」の詩も当然である。

詩歌の城の真髓についての根本認識はすっかり違つてはゐないが、詩歌の城の認識とその入り方とは二人は違つてゐることは、詳述しなくとも、詩を一読すれば明らかである。

2 「蟬」をテーマの作品を通して

光太郎にも、犀星にも蟬に関する文章がある。それが、又、二人の人がら

を、私に感じさせた。巨星墜つというばかばかしいことばが、やはりかれの場合ふさわしく、それだけ私は依然距たりをおぼえていたのだ。「私は人の生き方のまじめき、性質にある美意識の透明さを、ずっと昔に感じたそれを、いまだ残念ながら魅せられ新しくされた。」(以上いずれも伝)

すぐれた者はすぐれた者を知るの原則どおり、知っていた。すこしは挨拶もあろうが、見えずいた世辞ではない。芥川龍之介が志賀直哉の文章にコンプレックスを感じた場合のようなものを、屎星の言に感じる。依然距たりをおぼえていたという言は、それを立証している。屎星は屎星なりに、光太郎は光太郎なりに、それぞれ素晴らしいのであって、同じ物差でははかれない。二人の素質、世界観、人生観、芸術観の相違から発して、二人の作品の質の差となって顕れたものを、同一線上を行くものでないのを、「距たり」という語を使うことによって、同じ競争場裡のものとして屎星は感じているのである。だが、二人の業績を屎星のように同じ物差ではかろうとするのは無理なのでないだろうか。詩人としての素質は二人とも豊かな天分に恵まれていたが、その質と傾向は、次元が違う。

二人の生立のスケッチ

屎星はその暗い出生、実父の死、室生真乘の養嗣子、とその成人まで願望ではなく長町高等小学校高等一年中退の学歴しかない。数え十五才から北国新聞の俳壇に俳句を寄稿、藤井紫影の北声会に出席、句作した。十九才に「さくら石斑魚に添へて」が「新声」に掲載され、選者児玉花外を知り、以後詩人として立つ決心をした。苦勞しながら、詩を作りながら、自学。苦しみながら、一つ一つ身につけていった。だから屎星の初期の作品の文語は怪しいがある。正しい文語から格はずれなのがある。例えば、「けり」「り」の接続。句、秋蟬に「しらかばにせみひとつて鳴かずけり」。蟬に、「蟬一つ幹にすがりて鳴かずけり。詩「ふるさと」(存情小曲集)の「木の芽に息をふきかけり」といった調子である。屎星の破格は独学からきている。芭蕉や西鶴の破格とも違う泥くさいものが感じられるが、屎星にとっては精一杯であり、やはりつらいものであったと思う。それだけ一層、教養ある者がねたましいのである。又、名声も欲しい人であったし、又、名声が必要でもあった。

「私がどれほど詩の原稿をたくわえていても『スバル』に掲載されるとい

うことは絶対にありえない。だが光太郎はいつでも華やかにしかも何気ないふうで登場していたのだ。私はほとんど詩を発表する雑誌は持たなかったし、たとえ掲載されても『スバル』のような立派な雑誌ではない、つまり私は毎号『スバル』である高村光太郎をしゃくにさわらずにいられたのである」(伝)

屎星の気持が伺える。名声が確定するまでのあせりが、光太郎とのほりあいを通して正直に書かれていく。田端の百姓家の下宿住いの屎星には、内実がわからぬまま、桜並木通りのアトリエに住む光太郎が、その沢庵と米一升を買った「晩餐」の詩など、小面憎く、自分をみじめに思ったのである。

光太郎は彫刻家として立つべく上野の美術学校に学び、新社社に参加、作歌がその文学生活の第一歩であり、当時としては稀な欧米留学も終え、十二分の教養を自然と身につけていた。その帰朝祝を兼ねて「スバル」の談話会たる存在を示し、詩壇に偉大なる記念碑をたてた。俗世の名声や富には背を向けて、ひたすら真の人生を追求し、美を追求した。帰朝時、用意された就職もことわり、展覧会にも、光雲の「親の七光り」を恐れて出品せず、気に入るまで彫り直し、彫り直し、「最高にして最低の道」を、世間の毀誉褒貶を外に、自分の道を自分で歩んだ。へつらわず、むさぼらず、ひたすらにわが道を行つたのである。持つものを持った人の、自由無礙な生き方なのである。二人の生いたちをかいつまんでみただけでも逆いの生じてくるのが納得できると思う。

終りに

私的には最初にして最後の出会い。屎星が書き残してくれたのは幸であった。伝記によって、屎星の心の中に住んでいた光太郎像が、明確になっているのは何としても興味ぶかい。屎星の心も偽らず、うちだされている。小説家であるから、人の心をひきつけるための技巧は勿論あろう。とにかく、屎星は交際こそしなかったが、光太郎の知己であったといえるように思う。

り」と。卑小、卑俗を如何に排したかが伺われる。これでは屎星と友達になりようがない。ただし、屎星らの雑誌「感情」に光太郎は二回、詩を寄稿している。「光太郎は駒込のアトリエから田端まで歩いて、私が折あしく不在だった机の上に、その原稿を置いて帰った。」(伝)とある。大正五年十月現代詩人号に「わが家」を、大正六年一月詩集号に「暗れゆく空」「妹に」「花のひろくやうに」「海はまろく」「歩いても」「湯ぶねに一ぱい」をのせた。一月詩集号の消息欄に「高村光太郎氏の詩集、第二詩集で最近のもの」と新しく書いたものと併せて「人間苦」として今年初春までには本になる予定。この命題「人間苦」もまだ考え中であると同氏は手紙で云つてゐられる。くわしくは二月号で発表する。」とあるから、手紙も添えたのである。が、その他では個人交渉があつたような形跡が残っていない。

異質の二人とその友

結局、この異質のすぐれた二人の詩人は、屎星の積極的な訪問も実を結ばず、親交がなかつたのは、詩界のため、やはり惜しむべきことであつたと思ふ。お互に異質であればある程、啓発しあう面も多かつたのではあるまいか。屎星に、朔太郎という親友があつたことは誰でも熟知のことであるし、その周辺に友人や後輩が沢山集まつているのは衆知のことである。光太郎とて、生来の離群性はあつても、詩が人をひきつける。詩人、草野心平がその一人であり、尾崎喜八もその一人である。尾崎喜八は「旧制の商業学校を卒業して銀行に勤めるようになった私が、高村さんの書くものに身も魂も傾倒して、或る日とうとう思い切つてその駒込のアトリエをたずねたのは大正元年か二年の事だつた。」と。尾崎の詩「古いこしかた」の友、「友」、「四月の詩の友」、相手はいずれも高村さんである。

光太郎の「女医になつた少女」も若い友人であり、ファンである。山口山のあろりに訪れていった美しい女医になつた少女である。枚挙にいとまがない程、心酔者があり、交際を願う者がいた。

「高村さんの生活意識や生活態度をあれこれ思いをめぐらしてみると、そこには後輩の私どもに、「高村さん」と呼ばせるなにかがあつた。いや、高村さんは先輩・後輩という気持をもたなかつたようだ。たとえそういう気持があつたとしても、先輩・後輩などと、知人を区別することをしなかつた。葬儀のときおくりられたおびたしい花輪の中に「年下の友人たち一同」とい

うのがあつたが、これは生前の高村さんと往來のあつた詩人や芸術家が、「後輩」でなく「年下」だという生前の高村さんの気持に沿つてそうしたのでつた。」(「高村光太郎研究」伊藤信吉、高村光太郎の周辺、人柄についての断片)

こういう対人関係であつた。パリで大人になつた光太郎には、いい意味の個人主義が身につけていた。森鷗外がそうであつた。後輩を弟子扱いしなかつた。英国の下宿で本ばかり読んでいた夏目漱石は個人主義は理解しながら、東洋的な師弟の關係は華やかだつた。

二人は相手を知っている。

「私は概して時代の老大家よりも其華な青年層の方から良い教訓をうける。……葉舟、屎星、朔太郎、吹之介、柳虹の諸氏は常に尊敬してゐた。千家元麿、佐藤惣之助、宮崎丈二、福士幸次郎等の諸氏からも多く教えられ、又後もつと年若い友、尾崎喜八、高田博厚、片山敏彦、高橋元吉等の諸氏と親しくなるようになって大いに啓発された。……其後もつと若い友、草野心平、黄瀬、坂本遼、岡本潤等の諸氏からも強い刺激をうけ、其他列挙しきれない程多くの詩人からそれぞれ良いものを教はつてゐる。殊に宮沢賢治の如き稀有の詩人を知つた事は甚大の喜であつた。」(詩の勉強)

光太郎は右のように友人を列挙している。屎星は尊敬する人のうち。屎星のひたむきな精進に感動したのか。異質の抒情性に心ひかれたのか。屎星もつて銘すべきである。屎星も光太郎の偉大さが痛い程わかつていたし、人柄も深い交渉なしに直感的によみとつて、

「芸術院会員にすいせんされても、きつと断るだろう、という私の見方に誤りはなく、かれはそれを断つた。文学者とか詩人とかいうものはあるだけのおいて、ふん掴まえるものだ。」「いまから二十年前「中央公論」が時の有為の詩人をあつめるため、私に指名をもとめた時に先ず高村光太郎をすいせんとした。しかし光太郎は「中央公論」のような大雑誌には詩を掲せたくないと断つた。」「かれは日本の詩というものでは、昇れるだけ昇りつづけた男であつた。一度も後退したことはない、高村光太郎という透明無類の風船は「泥七宝」の短章から「暗愚小伝」にいたるまで、拍手喝采の間に天上に到達したのである。」「光太郎の死は巨星墜つということばどおりのもの

の二人の交際がつづくとは誰も思わないであらう。犀星は光太郎との交際は断念しながら、光太郎をライバルとして意識し過ぎ、光太郎は当然の帰結かもしれないが、犀星に執拗な関心はない。

「さういふ友」の中で光太郎は、黙つてゐても心の通じる、

いい悪いも両手に持つ

さういふ友を持つのはいい。(中略)

この世にとつて自分自身が

さういふ友であればいい。(後略)

功利的な句の少しもない、真実に生きる者の友観がある。が、光太郎にも、人間性むきだしのもある。「友の妻」―柳敬助と八重子夫人の新婚時代に作られた詩には「君の妻は余の敵なり、君の妻を思ふたびに、余の心は忍びがたき嫉妬の為に顔へわななく」と。この柳の紹介で光太郎は智恵子に会ったのである。だから智恵子を知る以前の無茶苦茶時代の作であること、この詩については合点がゆくことと思う。ようこびを告ぐ「TO B. LEACH」―「友よ」「二つの世界」「朋あり遠方に之く」「あそこで斃れた友に」「友来る」など友観のある詩はいろいろあるが、「友の妻」のようなのは、他にはない。光太郎は又、貧しく不遇な芸術家を心の友としたようである。「存在」「村山槐多」は村山槐多を、「荻原守衛」は芋銭先生京麩の詩、「北島雪山」は「古事一則」は寒山拾得を、というふう唱歌に上げてゐる。「レオン・ドゥベル」「ミシエル オオクレムを読む」も同趣の詩である。

卑俗を嫌う光太郎

離群性はあつても人に対して心を鎖していたのではなく、世俗的な虚偽に満ちたいやな交際を嫌つただけなのである。「のつぼの奴の黙つてゐる」「或る墓碑銘」(紀要第八集三〇頁に全詩記載)などには、如何に世俗的なものに反発し、榮華や虚飾になじめぬかを浮彫りにしてゐる。

のつぼの奴は黙つてゐる

「舞台が遠くてきこえませんが、あの親爺、今日が一生のクライマックスといふ奴ですな。正三位でしたかな、帝室技芸員で、名譽教授で、金は割方持つてない相ですが、何しろ仏師屋の職人にしちやあ出世したもんですな。今夜にしたつて、これでお歴々が五六百は来てるでせうな。喜

寿の祝なんて冥加な奴ですよ。運がいいんですな、あの頃のあいつの同僚はみんな死んちまつたちやありませんか。親爺のうしろに並んでゐるのは何ですか。へえ、あれが息子達ですか、四十面を下げてるちやありませんか、何をしてるんでせう。へえ、やつぱり彫刻。ちつとも聞きませんな。なる程、いろんな事をやるのがいけませんな。万能足りて一心足らずてえ奴ですな。いい気な世間見ずな奴でせう。さういへば親爺にちつとも似てませんな。いやにのつぼな貧相な奴ですな。名人二代無し、とはよく言つたもんですな。やれやれ、式は済みましたか。ははあ、今度の余興は、結城係三郎の人形に、姐さんの踊ですか。少し前へ出ませうよ。」

「皆さん、食堂をひらきます。」

満堂の禿あたまと銀器とオールバックとギヤマンと丸髷と香水と七三と薔薇の花と。

午後九時のニツボン ロココ格天井の食堂。

スチユワードの一本の指、サーヴィスの爆音。

もうもうたるアルコールの霧。

途方もなく長いスピーチ、スピーチ、スピーチ、スピーチ。

老いたる涙。

万歳。

麻痺に瀕した儀礼の崩壊、隊伍の崩壊、好意の崩壊、世話人同士の我慢の崩壊。

何がをかしい、尻尾がをかしい。何がのこる、怒がのこる。

腹をきめて時代の曝しものになつたのつぼの奴は黙つてゐる。

往來に立つて夜更けの大熊星を見てゐる。

別の事を考へてゐる。

何時と如何にとを考へてゐる。(昭和五年)

父光雲の顔のことを思い腹をきめ、喜寿の祝賀会に出席している光太郎の、そつぽをむいた姿が見えるようである。さぞかしやり切れなかつたであろう。それが、満堂の禿あたまと、という語となつて爆発して、世俗的なものを辛辣に愚弄しているのである。或る墓碑銘において「彼は人間の卑小性を怒り、その根元の価値感に帰せり。かるが故に彼は無価値に生きた

れたいと、正式に訪問、三度まで智恵子夫人のツメタイ眼で追い返され、四度目に光太郎自身が現われ、やっと話が出来、金沢から持参の吉田屋物の丸谷の大皿を贈った時が最初である。「私はこんなに人を訪ねるに執拗であったためにも妙なし、丸谷の大皿まで何の気でもっておべっかを尽したのか、そのもとをさぐると、高村光太郎の友人になりたかつたからである。」(伝)と、六つ年上の光太郎との交際を熱望していたのに、「けれど主人に贈物をしたくても出来ない人間が、それをなし遂げたときには精神的にもうがっかりして、私は光太郎をまたと訪ねる気がしなくなっていた。詩人が贈物で詩を紹介して貰うことに気がさしていたし、」(伝)と、訪問をつづけなかつた。

二人の考え方

犀星が徹底した俗物根性を持っていたか、光太郎に迎合性があり、親分肌であつたり、二人の交友はつづけられたであらう。

我は (鶴、昭和三年 犀星)

我は清く生きんことを願へり、

我は美しき思あらんことを乞へり、

我はまた富と名とを祈れり、

我は――

我は今ほ毀れたる机に対へり、

我が背骨は地球のごとく曲れり、

我が肋骨は幾本かを不足す、

我が頭はブリキを埋積せり。

詩人にして通俗人。犀星は正直な人である。富と名とを祈る心が、三度、多分居留守だつたろうに、四度目に丸谷の大皿を持って、訪問させたのであり、清く生きんことを願へりの心がまた訪ねる気持をなくさせたのである。自分の心に忠実であつた犀星の行動を俗だときめつけてしまうのも、どうかと思うが、そういう感じがどうも感ぜられる。我はの詩も、次の光太郎の詩も犀星の訪問後のものであるが、基本的な心情は変わらないと思うので引用した。

友よ (昭和五年十二月 光太郎)

まづ第一に言つておかう

僕から世間並の友誼などを決して望むな

僕は君の榮達などを決して望まぬ

君のちひさな幸福などを決して祈らぬ

君は見るだらう

僕が逆境の友を多く持ち順境の友をどしどし失ふのを

なぜだらう

逆風の時に持つてゐた魂を願風と共に棄てる人間が多いからだ

僕に特惠園は無い

僕に固定の友は無い

友とは同じ一本の覚悟を持つた道づれの事だ

世間さまを押し渡る相棒だと僕を思ふな

百の友があつても一人は一人だ

調子に乗らずに地でゆかう

お互にお互の実質だけで沢山だ

その上で危険な路をも愉快に歩かう

それでいいのだと君は思つてくれるだらうか

この詩に光太郎はありのままに、率直に友人観を押し出している。自由無礙。如何にも光太郎らしく、犀星の考え方とは、質が、方向が、根本的に違つている。犀星は生涯、詩人として、小説家として文学的に偉大な業績を残しているが、俗世から離脱できぬ人間臭を持つてゐる。絶えず努力して境地を切りひらき、生長していった生き方もすばらしい。が、洗練された雰囲気よりは、生々しい人間の足跡を感じさせる。悪く言えば、泥くささがある。犀星自身も「詩は詩であつても文学は泥くさいほど美しい。泥のついていない詩や文学はご免置りたいものである。」といつてゐる。「愛の詩集」の白秋の序にも「室生君、何と云つても私は君を愛する。さうして萩原君を。君と萩原君とはまことに靈肉相通した芸術的共生児である。……君は土、彼は硝子。君は裸の蠟燭、彼は電球。……」とある。自他ともに認める泥くささである。朔太郎との交も「君子の交」とはいきれぬようだ。光太郎は来るものまで拒まなかつたろうが、生来の離群性のままに行動してゐる。高邁な理想・美の追究の明け暮れであり、卑俗を嫌い、常識や外間を無視した生涯であつた。二人の考え方は次元の違うものであり、対照的な面もある。「友よ」の友人観と、高村光太郎の友人になりたかつた理由を比べたら、こ

「高村光太郎」ノト

その四、高村光太郎と室生犀星と

井田康子

一、「我が愛する詩人の伝記」などを通して見た

光太郎と犀星

はじめに

昭和卅三年十二月十五日、中央公論社発行の室生犀星著「我が愛する詩人の伝記」には、北原白秋・高村光太郎・萩原朔太郎・釈迺空・堀辰雄・立原道造・津村信夫・山村彝鳥・百田宗治・千家元磨・島崎藤村の順で、伝記が掲げられている。この順が愛する順であるかどうかは別として、二番目に二三頁から四二頁にわたって犀星は飾らぬ口調で述べている。その冒頭は「高村光太郎の伝記を書くことは、私にとって不埒な執筆の時間を続けること、なかなかペンはすすまない。高村自身にとっても私のような男に身辺のことを書かれることは、相当不愉快なことであろう。私にとってはほとんど生涯の詩の好敵手であったし、かれは何時も一歩ずつ先に歩いていくこと、詩のうへの仕事の刻み方のこまかさ、用心ぶかさに至っては、私のまなぶべきことを、先に心に置いていた点でも、私は高村にかなわないものを感じていた。年少なかれが早くも当時の立派な雑誌「スバル」の毎号の執筆者であることは、私の嫉みのものであった。」である。犀星の心に、光太郎は知らずが深いようであるが、光太郎の大きさを示している。「私は詩の事を書くたびに光太郎に当たっていたと先きに述べたが、この事で光太郎はいちども当りを返したことはない。かれはなにも読まないふりを装うて、私の悪口をゆるしてくれたものに、思えた。」(伝)とあるが、一方、光太郎は「大変いいけれども、けれども感心しない、なら、君はおれと一番縁の遠い魂だ。」(とげ

とげなエビグラム)のように犀星の書くことを受け取っていたのかもしれない。又、「皮肉ならお止し、どうせ黙つてゐる方が勝つ。」(同前)と思つていたのかも知れない。あるいは、光太郎が自分の内部の相剋・内部財宝の充実に心を奪われていて、悪口を受けてたつ心の余裕がなかったのかもしれない。「孤独の鉄しきに堪へきれない泣虫同志の、がやがや集まる鳥合の勢に縁はない、孤独が何で珍らしい。」(孤独が何で珍らしい)・「生来の離群性は、私を個の鍛冶に専念せしめて、世上の葛藤にうとからしめた。」(美に生きる)・「生来の離群性はなほりさうもないが(山林)などで明確なように、離群性ゆえの孤独で、芸術に心身を削る前進をする光太郎にとって、犀星の批評はいらざるお節介で、無視したのかもしれない。「認識を人に求めるのは弱い、此世に君の世界が花さくか花さかないか、深夜の絶望なんか雲霞に蔽ひませう。人生の甘美自体は断じて亡びぬ。(中略)ちよこまかとして戦ひ獲るのが如何に君の周囲の流行でも、私はもう一度古風に繰返さう。――正しい原因に生きる事、そのみが淨い。――」は、詩、或る親しき友の親しき言葉に答ふの冒頭と結びである。光太郎が犀星のいやみを無視した心情と根は同じではなからうか。犀星は光太郎を意識し、関心を持ったが、光太郎は「詩の勉強」に専敬していたと書いているが、淡々と書いていたようである。

二人の出会い・その結果

大正六年秋、犀星が養父真乘死去後、十日程して帰京した時が初の出会いである。犀星が自分のみじめさ―光太郎のアトリエの前をほとんど毎日通り、かれの生活と自分の生活との比較をし、毎日やつつけられた思いをしてきたこと―を救うために光太郎の知己を得ることによって心の平明をとり入

注

- 一、中山勇次郎「文具清玩二」による。
 - 二、宇野雪村「古墨」一九六七年。
 - 三、李家正文「筆談墨史」一九六五年。
 - 四、同書。
 - 五、前掲、「古墨」。
 - 六、同書。
 - 七、テキストに楊家駱編「文房四譜」民国五十一年刊を用いた。
 - 八、前掲、「筆談墨史」による。
 - 九、前掲、「古墨」。
 - 一〇、福永晴帆、「古墨及び墨絵の話」。
 - 一一、前掲、「文房四譜」。
 - 一二、前掲、「古墨」による。
 - 一三、前掲、「文房四譜」。
 - 一四、前掲、「筆談墨史」。
 - 一五、「日本書紀」第二卷に、次のように記されている。十八年春三月、高麗王貢上僧曇、徵法定。曇徵知五種。且能作彩色及紙墨。并造碾磑。蓋造碾磑始于是時歟。」（「新訂増補國史大系」第一卷下）。
 - 一六、「故宮周刊」の解説。
 - 一七、前掲、「文房四譜」。
 - 一八、同書。
 - 一九、「新訂増補國史大系」第三卷。
 - 二〇、同、二六卷。
 - 二一、この項は、前掲「筆談墨史」によった。
 - 二二、「新訂増補國史大系」第一九卷。
 - 二三、「新修京都叢書」第三卷。
- なお、近世初期の松煙墨については、「古梅園墨談」に、丹波国貝原、伊勢国栗谷、参河国神代山、紀伊国熊野山などの産地があったと記している。
- 二四、近世および近代の奈良の製墨業の実態については、次の諸論文を参照されたい。

藤田祥光「奈良名産史」（「奈良の本」所収）
 松井藤次「奈良の墨」（「大和タイムス」所収）一九六八年。

- 拙稿「製墨業の発展」（「奈良市史」通史三所収）近刊。
 奥西一夫「墨」（「大和タイムス」編「大和百年の歩み」所収）一九六七年。
- 拙稿「朱墨」（同右）
 同「奈良の朱」（「社会科教室」所収）一九六七年。
 同「奈良の製墨」（「教育日本新聞」所載）一九六七年。
- 三、「独殺」の校訂本としては、「燕右十種」所収のものほかに、石川巖校訂の「完本独殺」、水木直箭校訂の「ひとりね」などがある。
- 三、「米庵墨談」。
- 三、「統米庵墨談」。
- 六、宮坂和雄「墨の話」。

一九六八・九・二七

蔭

凡墨蔭用炭灰石灰麥糠三種炭灰為上石灰輪多裂麥糠慢多曲惟炭灰為上凡用炭灰積備弗雜弗濕其下惟厚上之厚薄視墨之大小時之晴晦中以薄紙悉之然置之不平亦曲風亦裂若用石灰蔭當於新瓦器中置炭灰上用紙紙上復加以灰不可厚若用麥糠蔭以綠架葉果室中其上雖低惟平惟均不可有逆雜凡蔭室以靜密温小為貴昼夜不去火然火大則病火暴亦病其昼夜候火隨風日晴晦最為難又有不用蔭者墨成礙於靜密室中聽自乾又有以衣被覆之使乾者

蔭

甕中の灰を毛篩にて土炭の屑を除きとりて堅三尺横一尺五寸深三寸の灰槽をいくらか置槽の中に灰を厚さ六分程に敷其上に厚紙を敷又薄紙厚紙を置其上に灰を厚さ七八分ほどに覆ひ風のなき所に置なり毎日二度つ灰を替る是を灰替と云初一日はしめり灰を用ゆ次の日より段々に乾灰を加へ用ひ三日目に墨の角に形のはみ出しあるを小刀にて削り取り又灰に埋む如此する事凡五日にして灰より出す厚大の墨は七日八日を経て出す但乾灰にて急にしめりをとれば墨砕け裂るなり暑温の節は冷る所に置極寒の時は甕辺又は二重屋根の所に箆を覆て置く暑温には蒸て砕けやすく寒気には凍て裂やすきかゆへなり灰より出して墨のゆかみを能直し二十挺程かさね兩方に小板をあて字體にて能しめ風なき所に掛置事五六日して十挺つづ紙糸にて編み四方より風通ふ所に鈎乾寸片風に当れば墨ゆかむ凡鈎置く事十ヶ月を経て桐の櫃に入れ置く毎年梅雨の後風を当て湿を散す

研

凡研墨不厭遲古語云研墨如病凡研直研為上有研乃見直色不損墨若門磨則假借重勢往來有風以助顏色乃非墨

研

墨を研には墨を半臥させて直に研れば墨の滓をためず墨の真文を顯すに研れば往來にて風を含て墨の顏色

之真色惟舊墨者門研若邪研則木常掛其半而其半不及先所用者惟俗人邪研凡墨戸不工於製作而工於研磨其所售墨則使自研之常優一輩凡煤細研之乾遲煤益研之乾疾凡惡墨研之如研泥

色

凡墨色紫光為上墨光次青光又次之白光為下凡光与色不可廢一以久而不塗者為貴然豈膠光古墨多有色無光者以蒸濕敗之非古墨之善者其有善者雖而不浮明而有饒沢而無漬是謂紫光凡以墨比墨不若以紙比墨或以研試之或以指甲試皆不佳

色

を助れとも真色にあらす洞天研録に云日用の硯目毎に積墨敗水を滌ひ去れば墨光潤ふて墨の真色顯る一二日も過れば膠氣泛て筆に滯るといへり古硯尤よし新硯も下ノ関赤間が関高島等の真硯を選ふし席上の廉硯は墨の好否を試るに堪す

時

凡墨最貴及時韋仲持墨法不得過二月九月買墨曰温時敗臭寒時滄滄當十一月十二月正月為上時十月二月為下時余月無益有害既時須挾晴明無風之日或當靜夜若燧煤之時當以二月三月四月為上時八月九月五月十月六日七日本涼土濕十一月十二月風高水寒皆不利

時

凡墨の色紫黒光を上とす光と色とを合見るへし黒して浮ならず明にして潤ふ是を紫黒光といへり黒を試むるには失漆の板に出て日にうつして見るに漆の光と同じきは是純煙墨なり又膠の色を見るにも朱板の上に数品ならへ置白下にて日に背て窮ふに青黒色を上とす黒色は次なり赤を帯ひ白を帯ふるは又其次の次なり

韋仲持は墨法二月九日を以て上の時とす然とも異域時候の替りある故か本朝にては正月十月十一月を上の時とす時に臘月製をよしといへとも極寒の時は益無して書多し但し寒の水を著へ置常に膠を煎する用とす最晴明風なき時を選らむ

以候厚薄直至一条如帯為度其膠不
可單用或以牛膠魚膠阿膠參和之爰人
旧以十月煎膠十一月造墨今旋旋用
殊失之故潘谷一見陳相墨曰惜哉其用
一生膠耳當以重服者為長

和

凡和煤當在淨密小室內不可通風傾
膠於煤中央良久使自流然後聚力急和
之貴潤沢而光明初和如麥飯許搜之有
声乃良膠初取之和下等煤再取之和
等煤最後取之和上等煤凡煤一片古法
用膠一斤今用膠水一片水居十二兩膠
居四兩所以不善然賈思勰墨法煤一斤
用膠五兩蓋亦未盡善也汎膠多利久膠
少利新匠者以其速傳故喜用膠少觔易
水奚氏欲州李氏皆用一膠所以糞墨時
大膠墨紙黃小膠墨紙微黃其力以是為
差凡大膠必厚厚難於和之柔則剛則
裂若以漆和之凡煤一斤以生漆三錢熟
漆二錢取清汁投膠中打之勻和之如法

和

煤を膠に和するは密室をかまへ板
數高二尺墨工の座する前に爐を切入
微火を著へ其上に三尺四方の松板を
置板の上にて膠と煤を和す凡煤一斤
に膠八兩失煤一斤を板の上にひろけ
置熟解せる熱膠汁を其中へ傾き入れ
かきませ揉合其次に香具を加へ入て
又力を出して揉めは次第に光出て潤
見ゆる時一劑を三ツに分二ツを懷中
に置一ツを又能揉む唐土の法は白に
入れ杵を以て搗くと記せり韋仲符の
墨は鉄白の中にて搗事三万杵又賈思
顔の法は三万杵に限るへから杵多
くして益よしとす玉君徳か法は石臼
を用ゆ其搗事多して光り人を照すを
度とすといへり然るに今の墨家は墨
工只一人にまかせて揉しむいかでか
能熟和するに到らんや祖父石臼にて
搗ことを考しかとも只幾度も能揉む
にししくはなしとて家法には墨工一人
に工子一人を添へ劑を分け同室して
揉しむ

藥

凡墨藥尚矣魏章仲符用真珠麝香二
物後魏賈思勰用栲木鷄白真珠麝香四
物唐王君德用醋石榴皮水犀角膽礬三
物王又法用栲木皮皂角膽礬馬鞭草四
物李廷珪用藤黃犀角真珠巴豆等十二
物今竟人不用藥為貴其說曰正如白麵
清麵又如茶之不可雜以外料亦曰有理
然不及用藥者良旧有別某法一卷

藥

本朝弘治年中に製せる 御府の墨
を試むるに龍麝の真香あり唐土にも
むかしよけて香を用ると見へたり李
太白が詩に蘭麝珍墨に凝るとあり墨
經に韋仲符は真珠麝香の二物を用ゆ
王君德は万榴犀角膽礬の三物を用ゆ
李廷珪は藤黃真珠等の十二物を用ゆ
本朝の墨は只龍脂麝香膠脂等を用ゆ
龍脂麝香とも其性を能弁別すへし下
等の龍脂は木座多し是を龍木と名つ
く墨に入れて害あり麝香珠に弁しかた
し偽物最多し共に上等の香を選へし
龍香の多からんよりは真香のすくな
からんにはしかし明の方于魯一種の
靈草を得てより墨益々勝れり天下に
称せらる余頃年其靈草を考へ法に依
て製し龍脂は麝香栲皮黃蘗蘇木膠脂
と此靈草を合せて七物を用

印

凡底版費乎直寧大不小平版上俯下
平寧重不輕凡底版裂為上面印牙為上
端當底版用案手版用犯蓋底版面印特
以松良与煤為宜凡印大墨以水拭之以
紙按之然 用印凡印方直最難用多
裂易水張遇印多方直者其劑熱可知

印

墨の形むかしは鉄にて造る南都二
諦坊の形今に残れり是を鉄形と云當
時の形は批把或裂の木にて造る形に
大小厚薄の品あり板三枚にして中に
板を墨の厚さとし上下二枚の板に繪
様文字等を彫付るを三枚形と名づく
又二枚形なり

「墨」 経

煤

古用立竈高丈余其竈寬腹小口不出突於竈面覆以五斗甕又益以五甕大小為差穴底相乘亦視大小為差每層泥塗惟密約甕中煤厚住火以筒羽掃取之或為五品或為二品二品不取最先一器今用臥竈掛石累竈取甕高下形勢向背而或長百尺深五尺脊高三尺口大一尺小項八尺大項四十尺胡日亦曰咽口身之末日頭每以松三枝或五枝徐爇之五枝以上烟暴飛以下則煙緩煤細枝數益少益良有白灰去之凡七晝夜而成名曰一會候甕冷探煤以頃煤為二器以頭煤為一器頭煤如珠如纒絡身煤成塊成片頭煤深者曰遠火外者曰近火煤不堪用凡煤貴輕旧東山煤輕西山煤重今則西山煤輕東山煤重凡器大而輕者良器小而重者否凡振之而底手者良擊之而有聲者良凡以手試之而入人紋理難洗者良以物試之自然有光成片者良凡墨有穿眼者謂之滲眼煤雜甕病也旧甕有虫鼠等糞及窸衣露虫雜在煤中莫能陳亦唯唾多可弭之然終不能無

「古梅園墨法十三条」

油煙煤

當時南都にて油煙をとるは煙室壓一丈三尺横一丈軒口の高さ七尺屋根を置にて并く室中の三方に棚二重あり棚の間二尺棚板の上を土にて塗り燈蓋を並へ土器を其上に覆ひ煙を受く燈蓋と土器との間二寸凡一室の煙工一人燈の數上劑六十中劑七十二下劑八十二日に煤を取を事上劑十兩中劑十五兩下劑十八兩上劑は煙をしけく掃によつて煙清くしてすくなし煤の色は黒に青を兼るを上とす紙墨は次なり赤に白を兼るは又次の次なり雪中には煙氣室に擦て煤の色濁る界中には室内の熱に堪ずして煙工勅作に勞し此煤も濁れり二三九十月を上の時とす

松煙煤

當時熊野山にて松煙をとるは煙室堅十間横三間軒口の高さ七尺屋根を置にて并く是を一小屋と云古松を取るに便ある所々に小屋を構へ土甕十四を二行に並へ甕一つ宛に紙障子を四方と上に覆ひ前の障子に小き口をあけ其口より細に切たる松をかなしやくしにて入る甕の内上劑は高六寸

膠

凡墨膠為大有上等煤而膠不如法墨亦不佳如得膠法選次煤能成善墨且潘谷之煤人多有之而人製墨莫有及谷者正在煎膠之妙凡膠鹿膠為上考工記曰鹿膠青白馬膠赤白牛膠火赤鼠膠魚屎膠黃莫先於鹿膠故魏夫人曰墨取廬山松短代郡鹿膠凡鹿膠一名白膠一名黃明膠墨法所稱黃明膠正謂鹿膠世人多誤以為牛膠但鹿膠難得煎法用蠟及胡麻者皆不入墨家之用案隨唐白膠法先以米泔汁漬七日令軟然後煎之如作阿膠淘又一法細剉鹿角与一片乾牛皮同煎即銷燭唐本草注曰鹿角鹿角煎濃汁煎煎成膠今法取虬角斷如寸去皮及赤鮮以河水漬七晝夜又一晝夜煎之得成以少牛膠投之加以竜鬚膠之下當用牛膠牛用水牛皮作家所謂鬚膠皮最良剔除去毛以水浸去腥汗浸不可太軟當須有性謂之夾生煎火不可暴當以篋撥之不停手貴氣出不替時時揚起視之

膠

廣六寸中劑は高八寸廣八寸下劑は高一尺廣一尺障子の内四尺四方高五尺五寸松の細木上劑は木口七分長二寸中劑は木口一寸長四寸下劑は木口二寸長六寸一小屋に煙工二人松取二人六日を経て煙の障子に留りたるを筒羽にて掃ふ凡一日の煤上劑三斤中劑四斤下劑六斤是墨家に通用する煤の法なり

膠を用ゆる事最精しかるへし唐土の謔に潘谷の煤は著れとも墨の潘谷に及ざるは潘谷か膠なきゆへとはこれ膠法の能をいへり煤今按るに唐土は専ら新膠を用れども本朝には古膠をよしとす然とも至て古きは膠の性かわるゆへに家法には三年膠を用ゆ一膠を用へからす兩膠三膠を交へ和して用ゆこれ墨經の説にして経験あり膠は黒の精神といへは最速ふへし凡膠の性水に応じて甲乙あり南部を第一とするは南部の水の清烈なる事他国に異なるか故なり膠汁は細絹にてよく濾へし

ゆるに堪ずといへり。凡煤久しく成れば黒く紫の色を出し膠久しく成れば其性清くして光あり古墨の世に賞せらるは是なり余が六世の祖道珍慶長年中に製せる墨今に残れり其色紫墨光彩ありて新墨の及へきにあらず。」

新墨より年数を経た墨の方がよいという理屈はわかる。それでは、墨は古ければ古いものほどよいのかどうか。これについて、前記「良山堂茶話」に引用している謝在杭は、墨のあまり古くなったものはよくないといっている。この点について、墨の粒子を電子顕微鏡でしらべた結果にもとづき、宮坂和雄氏は次のようにいっている。

「墨汁を限外顕微鏡で見ると、高度に分散している微小粒子は、いつでも不規則の運動を続けている。これはブラウン運動とよばれるが、これが活性カーボン、いわゆる生きた粒子にはかならない。このような粒子を多く含む程、墨は生きてると認められる。大きい凝集状態をしている粒子は、ほとんど運動せずに沈み易いものである。これが不活性カーボン、いわゆる死んでいる粒子である。死んでいる粒子を多く含む墨ほど、死墨化するのはいうまでもない。

(中略) 墨が古くなるに従って墨色が変化するの、死んだ粒子の影響によるのである。墨の粒子が大きい程、表面効果が強調され、墨色が濃く見えるものである。骨董品ならいざ知らず、大抵のものは新しい程、良いのが普通である。墨が古く枯れていて良いなどは、どうしても考えられない。前にも云ったが、私は古墨の多くは見る墨で、使う墨ではないと思う。この場合、墨の劣化がどの程度まで進んでいるかが問題であることは、いうまでもない。墨が枯れると、死墨化するのは避けられない。墨は時々刻々に死墨への変化を辿っているものである。墨の生命は無限のものではない。製墨の

技術や保存の方法などによって著しく相違するが、墨の生命は私たちの考えている程、長いものではなさそうである。五〇年か、せいぜい一〇〇年位のものであろうか(注二八)。

そして同氏は、著名な中国古墨の粒子を顕微鏡で観察し、その劣化の甚しいことを実証している。科学的な古墨観察は、名のある古墨でも、それは骨董的な価値をもつだけで、墨そのものの生命は既に失なわれたものであることを証明しようである。

(六)

製墨技術は、どのように進んだか。これを知るために、こころみに「墨経」と「古梅園墨法十三条」とを対照してみた。前者は一二世紀初の作、後者は一八世紀中期の作である。くらべてみて、墨の製造が、伝統的手法にたよる要素の大きいことを痛感するのである。なお、両者の内容を対照するために、順序をかえ、あるいは省略した部分がある。

(五、六十年間の墨はよしなども、古人は論じたる事あれども) 油煙にて
も中華より渡る古墨は違ひあり、日本一と一口にて言ふべからずと
もいふ人あり」(注二五)。

右の文の中で、柳里恭が、最近渡来する中国墨は悪いといっている
のは、このころ清において、粗悪な仿製墨がさかんに作られたため
である。

つぎに、書家として盛名を馳せた市河米庵についてみると、

「余モ亦墨癖アリ。宋ノ潘衡、明ノ羅小華ノ墨ヲ始トシテ蔵スル
トコロ四十余挺ニ及ベリ。然レドモイマダ譜トスルニ足ラズ。故ニ
墨品諸書併ニ今存スル古墨等ニテ見トコロ且近時舶来ニ至マデ姓氏
八十七人ヲ集録シ同好ノモノニ示ス」(注二六)。

「試古墨法

此方所伝ノ古墨宋元ノモノ絶希ナリ。明墨程君房、方于魯、其名
高シトイヘドモ、今見ルトコロ多クハ贗造ノモノニシテ、其中真墨
トヲモハルルモノハ、湿気ヲ含ミ、香気ナキノミナラズ、墨色モ灰
色ヲナシ、不当用モノ多シ。偶全墨ノ伝ルモノアルモ、試墨ノ法ヲ
得ザレバ知レサルナリ。古今秘苑試墨法ニ

將ニ各種墨ニ磨在ニ退光漆器上候乾放ニ水盆内ニ於ニ日中ニ看レ之。与
ニ漆色ニ無レニ者上也。帶ニ青色ニ者次レ之。帶ニ灰色ニ者為下。高低雖ニ
極不レ等大略不レ外ニ於此一

アリ。余蔵墨五十余丸、所謂与ニ漆色ニ無レニ者ハ僅カニ羅小華ノ
竜柱墨(五雜俎ニ見ユ)程君房ノ墨宝墨、葉向栄ノ竜九子墨(漫堂墨
品ニ見ユ)呉去塵ノ禹碑墨(通雅諸書ニ見ユ)四丸ノミナリ。佳墨ノ
難得コトシルヘシ。試墨法此論ノコトキモノ諸書ニナシ。因テ此ニ
鈔出シテ好事者ニ示ス」(注二七)。

とあり、収集の対象として唐墨だけにしか関心を持っていない。前

者は文化九年、後者は文政一〇年のものであるから、南都製墨業の
繁栄していたころであるのに、和墨についての関心は薄く、中国
墨、ことに古墨尊重の傾向が強いのは、米庵だけでなく、一般的
風潮であった。

このような傾向に対して、和墨を尊しとする説もないではない。
幕末の復古思想の高まりを反映したものとも思われる。たとえば、
文政七年に刊行した「良山堂茶話」の中で、阿部緩州はこういつて
いる。

「八木巽老人之。紙墨ハ吾邦ノ物ヲ以テ最上品トス。唐土ハ之ニ
次グ。朝鮮琉球ハマタ其次ナリ。(中略)彼方(支那)墨工ニ於テハ
名匠代ニ乏シカラズシテ明ノ方氏墨譜、程氏墨苑等ニ至テハ其紋式
精巧ニシテ細ナルコト毫髪ニ入ル。然レドモ唯其書ノ人目ヲ悦バシ
ムルノミニシテ墨品ハ但古今伯仲ノ間多ク優劣ヲ容ズ。タトヒ精工
ノ手ナルモ因土ノ膠氣弱キヲ如何スベカラズ。其墨ノ日久シクシテ
龜斫ヲ為シ或ハ碎裂ニ至ルモ皆コノ所以ナリ。謝在杭云。墨ハナハ
夕陳ケレバ膠氣尽キテ字、光ヲ発セズ。ハナハ夕新シケレバ膠氣重
クシテ筆多ク纏帶ス。惟々三十五年ノ後最モ用フニ合フベシ。方正
が墨、今之ヲ用フレバ己ニ煤土ノ色ヲナス。知ラス仲將何ヲ以テ一
点漆ノ如キ、或ハ曰ク、古墨ハ漆ヲ用ユ、故ニ堅ニシテ亮、今ハ夕
夕膠ヲ用ユ故ニ數々微濕ヲ経レバ則チ敗スト。此方ノ墨ハ此ノ如キ
ノ失無シ。」

中国製の古墨の愛玩は、近代日本になってのちも続き、いわゆる名
墨は高価をよんでいるわけだが、これらは果して骨董としての価値
だけでなく、磨る墨としての価値を持ち続けているものだろうか。
「古梅園墨談」には、墨の新古について次のように書いている。

「衛夫人は十年以上の墨を用ひ陳眉公は新墨三夏を過ぎざれば用

について記されたものはないが、いくつかの資料に、製墨についての記載がある。

「頭戒論縁起」には、大宰府で作った墨を、最澄が唐に持参したことが記されている。「新猿楽記」には、淡路の墨が、「大和本草」には、江州武者墨についての記載がある。そのほか、丹波の柏原墨、播磨の墨、あるいは京都の平安墨などもあったらしい(注二一)。

平安末期、紀州藤代墨についての「古今著聞集」の記事は、あまりにも有名である。

「後白河院御熊野詣に藤代の宿につかせおはしましたりけるに、国司松煙をつみて御前におきたりけり。花山院左府、中山太政入道殿其時右大将にて御前に候はせ給ひたりけるに、此墨いかほどの物ぞ、心みよと勅定ありければ、おとど右大将にすすめられたりければ、硯を引よせて墨をとりてすらせ給ひけり、そのさま除目の執筆の定也けり。左府見とがめて、しきりに感嘆のけしきありけり」(注二二)。

奈良の油煙墨のはじまりといわれる、興福寺二諦坊の製墨は、一四世紀末のことと考えられる。これについての文献に、黒川道伯の「雍州府志」がある。

「墨近江武佐丹波貝原并洛下太平墨之製造自古有之然其色淡黒而疏薄中世南都興福寺二諦坊取持仏堂燈火烟之薰滯屋宇二者和牛膠而製之是南都油煙墨之始也今偶存爾後南都土人倣之取油煙之造之今洛陽稱墨所者亦其製造精密而不愧中華之所作也」(注二三)。

「雍州府志」中の、墨に関する記事はこれだけである。もともとかれは、林羅山に儒学を学んだ医師で、はじめ浅野家に仕えたが、のち京都に移住し、元禄二年に死んだ人物で、ほかにも京都や山城

の園に関するいくつかの著書がある。「雍州府志」は、中国の「大明一統志」にならって、山城の園の地誌として書いたものである。その中の「土産門」の部で、南都の墨にも説きおよんだのであるが、かれは同書の中で京都でも名墨を産するといっているから、平安墨の伝統も江戸時代にはまだ続いていたものと思われる。

天正年間(一五七三—一五九二)に、松井道珍が、南都で墨を作りはじめた。かれは、造墨式の李家製墨法と空海二諦坊油煙墨造法によって、油煙墨の製墨法をうちたてたのである。これが古梅園のこりである。

古梅園六世の松井元泰は、一八世紀の中ごろ、長崎で清園の御墨司徽州の程丹木、汪君彦らに会い墨法を交換した。かれは「古梅園墨談」「古梅園墨話」「古梅園墨譜」を著わし、また、和泉の掾を賜わって、御墨を製造した。つぎの七世松井元泰は、東坡流の紅花墨を作り、非常な成功を拍した(注二四)。

(五)

江戸時代後期になって、南都油煙墨がさかんに製造されるようになってのちも、中国の墨への愛好は続いた。たとえば、奈良に近い郡山に住んでいた柳里恭は、次のようにいっている。

「墨は华庭健が墨よし、されど中華にてさへ半挺さへありがたしと見えたり。奈良墨の古きよし、中々もるこしも及び難し。中国の墨も漱金家蔵といふ墨惣てよし、此頃の渡り墨也。吳天常が此君墨よし。程君房十二竜寶もよし。是も此頃渡るは悲しき也。」

「墨は油煙よりも松煙にて拵へたるがよし。日本にて南都などにも五、六十年以前は格別、其外三十年以来の墨は唐紙にあはぬ也

者曰脂片松品惟下下其降此外不足品第」(注一七)。

これで見ると、前代から続いている産地もあるが、新しくとり上げられた土地も多い。宋は文運のさかんな時期であったから、墨の製造も急増したものであろう。また、松の等級をこまかく分けており、墨にも多くの等級があったことと思われる。

宋のころの名工として潘谷があげられる。蘇東坡の詩「孫莘老寄墨」中に、次のようにかれをほめてゐる。

「徂徠無老松 易水無老工 珍材取染浪 妙手惟潘翁

魚胞熟万杵 犀角盤双竜 墨成不敢用 進入蓬萊宮 蓬萊

春露水 三殿明房枕 金箋灑飛白 瑞霧縈長虹」

東坡は、非常な墨の愛好家で、名墨を多く収集した。そして、さらにすすんで、墨の製法をも研究し、海南松煙で東坡法墨を作つて銘を入れたり、紅花墨を發明したりしたという。

宋代の油煙墨の墨工としては、胡景純が有名である。かれは、南宋漳州の人で、「桐華煙」と名づける油煙墨をつくつた。漆のように黒くて堅い製品を作つたという。「墨史」の文を次に引用しておく。

「胡景純漳州人專取桐油燒煙名曰桐華煙其製甚堅薄不為外飾以眩俗眼大者不過數寸小者圓如錢大每磨硯間其光可鑑面工室之以点目瞳子如点漆李彥穎云長沙多墨工唯胡氏墨千金類隨者最著州之大街西安業坊有煙墨上下巷永豐坊有煙上巷今有鄭子儀自謂得胡氏法俊臣名為胡院子」(注一八)。

宋に続く元のころは、宋のころの手法を踏襲しただけで、大した発展はなかつた。

明代になると、南唐・宋代とならぶ、中国製墨史上の黄金時代となつた。そして、前者では松煙を主としたのに対して、明代には油

煙墨が中心となつた。ことに明末の万曆年代のころ、徽州の方干魯、程君房を最高峯として製墨業が栄えた。

清代には、乾隆年間を頂点とし、以後おとろえた。清墨は、今もかなり遺品があり、日本でも好事家に藏されているものがある。

(四)

日本での製墨がいつからはじまつたか。それについてのたしかない史料はない。ただ「令義解」に次のような記事があるところから、律令制成立期には既に製墨がはじまつていたと考えられる。

「圖書寮……造墨手四人。掌造墨」(注一九)。

圖書寮の造墨手が作つた墨については、「延喜式」に次の記事が見られる。

「凡造墨長功日燒得烟一石五升煮烟一斗五升二百二枚乃得熟成墨九十三廷長五寸五分八分中功日燒得烟九斗煮烟九升成墨八十廷短功日燒得烟七斗五升煮烟七升五合成墨六十六廷」

「凡年料所造墨四百廷長五寸五分絹七尺八寸幅八寸綿八兩調布一丈六尺絹并紺布四端阿膠小六斤八兩席一枚食薦二枚并造手四人給衣服各庸布一段其食人別日米一升六合塩一勺六撮海藻二兩醬滓一合葱單九十三人」(注二〇)。

これによると、圖書寮の造墨手は、夏には日に焼いた烟を一石五升とし、これを二日二夜煮て一斗五升とし、これを原料として九三挺の墨を作つたことになる。

平安時代に入ると、各地で墨が作られるようになったらしい。宮廷の技術が、いつしか民間に伝えられたものであろう。製造の実態

「天平十八年九月二日写後経所解案

写後経所解 申請筆墨事

合請筆一筒 墨式延」

「天平二十年請千部料墨筆帳

正月十一日自内裏給出鹿毛筆二十筒 墨五十延 並千部

料」

「天平宝字二年六月廿一日 写千卷経所移牒案

造東大寺司 體紫微中台

請錢管拾捌貫玖拾貳文

四貫三百廿文 鹿毛筆一百八管 直料 管別卅文

二貫一百文 墨七十延直料 延別卅文 廿文

鹿毛筆廿管直料 管別一文」

正倉院の船型墨は一二本あり、丸棒のものも二本ある。「新羅楊家上墨」「新羅武家上墨」の陽刻のあるものもあり、朝鮮産の墨がまじっていることがわかる。いずれも松煙墨である。文献の上では、日本へ紙墨がはじめて伝わったのは、推古天皇の一八年ということになっている(注一五)。「日本書紀」にあげられている高麗僧曇徴は、伝説上の人物で実在したかどうかは不明であり、推古一八年という年代もたしかなものではない。しかし、五、六世紀は、大陸文化がさかんにとり入れられた時期であり、高麗は前述のように墨の名産地でもあるから、この時期に、大陸より墨がもたらされたことは、まちがいない。だが日本に最も早く墨が伝えられた時期ということになる、大陸と日本との交渉は、既に弥生時代からはじまっているから、文献にあらわれたものよりも、もっと古く溯りうるのではないかと思われる。

五代のころになると、安徽、宣州、歙州の松が使われる。このこ

る中原は戦乱の巷となり、易水に多かつた墨工は、平和な南唐に移り、歙州の地に定着した。歙州は宋のころ徽州と改名、その後千年にわたる徽州墨の名声の基がつくられたのである。南唐初期の名工として伝えられているのが李廷珪で、その父李超の作品とともに李家墨といわれ、宋のころ非常に珍重されたという話が残っている。この廷珪の墨の一つは、民国一九年刊の「故宫周刊」に紹介されている。その後、日本との戦争および国内戦の時期を経ているが、おそらく現存するものと考えられる。李廷珪の墨は、「堅きこと玉のごとし」(注一六)などといわれ、非常に堅いものらしい。かれは、墨をつくるたびに、真珠三兩を使い、杵で一萬回もついで作つたといふ。

宋代になると、松煙墨が引き続き作られるが、北宋後期から南宋にかけて、油煙墨が作られるようになった。ただ、油煙は松煙に比べて高価なので、多くは作られなかったであろう。

宋代の松については、「墨経」に次のような記事が見られる。

「今婺州泰山徂徠山島山嶧山沂州龟山蒙山密州九仙山登州牟山鎮府五台州潞州太行山遼州遼陽山汝州窰君山随州桐柏山衡州共山衢州柯山池州九萃山及宣歙諸山皆産松之所産沂登密之閩山縵謂之東山鎮府之山則曰西山自昔東山之松色沢肥賦性質沉重品惟上上然今不復有今其所有者纔十余歳之松不可比西山之大松蓋西山之松与易水之松相近乃古松之地与黄山黟山羅山之松品惟上上遼陽山窰君山桐柏山可甲乙九華山品中共山柯山品下大槩松根生茯苓穿山石而出者透脂松歳所得不過二三株品惟上上根幹肥大脂出若珠者曰脂松品惟上中可揭而起視之而明者曰揭明松品惟上下明不足而紫者曰紫松品惟中上曠而挺直者曰籤松品惟中中明不足而黄者曰黄明松品惟中下無背油而漫若糖苴然者曰糖松品惟下上無背油而類杏者曰杏松品惟下中其出歴青之余

蕭子良、王僧虔は、ともに梁の人であるから、約二五〇年を経過しており、松煙墨ならばそのような古墨は青墨でなければならぬから、「漆のごとし」という形容はおかしいという考えもある（注九）。

このころの墨は墨汁だという説もある。たとえば、次のような説明がなされている。

「支那の昔、魏や晋の頃に、墨丸というものがありません。之は漆を燃らせた煙と、松を燃やした煙とを混ぜて作りしました。奈良の正倉院御物にもありますような凹心硯、即ち中心の凹んだ硯に入れて墨汁として使用しました。それが貯えて置くと腐敗するものですから、石榴の皮を搾って防腐剤としました。是が非常に貴重なものでありまして『金壺汁』『銀壺汁』と称し、金或は銀の壺に貯えたものであります。」（注一〇）。

しかし、現に晋代の硯が出土しており、墨池をもっていて、固形墨を磨るのに用いたと考えられるので、右の説が認められたとしても、固形墨の存在を否定することはできない。また、一九五八、九年には、このころの顔氏の墓から、墨が発掘されており、成分は現在の墨と同じと報告されている。

なお、「墨経」には、このころの墨について、次のように記している。

「晋貴九江廬山之松衛夫人筆陣図曰墨取廬山松煙」（注一一）。

これによると、晋のころには、九江の廬山の松からとったことにならるが、衛夫人の筆陣図は晋のころのものでなく、梁のころのものであり、したがって衛夫人の作ではないと考えられる。この点について、李家正文氏の「筆談墨史」は、不用意にこの史料を引用しているとのそしりをまぬがれない。

唐代の墨については、元末の陶宗儀の「輟耕録」に、次の文がある。

「上古は墨なし。竹挺漆を点じて書く。中古は石の磨汁を以てす。或は是を延安石液と云う。魏晋の時始めて墨丸あり。乃ち漆烟と松煤を夾和して之を為す。晋人多く凹心硯を用いる所以は、磨墨貯藩を欲するのみ。後、螺子墨あり、亦墨丸の遺製なり。唐、高麗松煙墨を歳貢す。多年の老松煙を用い、麋鹿膠を和して造成す」（注一二）。

これで見ると、唐のころ、高麗から松煙墨がもたらされたようである。その作り方から見ると、良質の墨と考えられる。いっぽう、「墨経」には、次のように記されている。

「唐則易州潞州之松上党松心尤先見貴」（注一三）。

上党の松はすなわち、太行山脈の松である。また、「墨史」には、易水の製墨家の名が見える。易州の松は、かれらによって使用されたものである。李白の詩に、「蘭麝凝珍墨」とあるのは、上党の松に葉を入れた（注一四）ということである。このころ、墨工も多くあらわれるようになっていく。

遣唐使がさかんとした唐のころには、多くの墨が日本に運ばれたものと思われる。正倉院御物の中に、唐代の船型墨が現存している。表には陽刻で「皇極貞家墨」とあり、裏に朱書で「開元四年丙辰作貞□□□□」とあって、七一六年、すなわち玄宗の初期のころのものと思われる。約三〇センチの大きな墨である。やはり正倉院にのこっている硯の大きさから考えて、このまま用いられたものだろうかという疑問が残る。

これに関連して、「正倉院文書」には、次のような記録が残っている。

というふうにあるのによって、墨に対する伝統的な考えを知ることができる。ここにあげられた書名中、「墨書」は不明であるが、「墨經」は宋の晁貫之の著にかかり、製墨についての代表的な古典として有名なものである。晁貫之は、一一―一二世紀の北宋の人で、愛墨家として知られ、自分でも「晁季一奇寂軒造」の銘を入れたすぐれた墨を作った人物である。中国における製墨研究の著述は、「墨經」からはじまり、その後幾多の著述がなされたのである。

(三)

墨の起原については、殷の青銅器文化に先行する彩陶文化に使われた赤墨の顔料に、その原始形を求めるべきだといわれている(注二)。続いて、殷代にも、墨で書かれた甲骨片や陶器が出土しているし、さらに周代の竹簡にも、墨書がみられる。これにより、殷代以降は、墨や筆があったことが確認されるが、どんなものであったかを実証することはできない。

春秋戦国時代の墨は、漆墨であり、漢の杠林が、漆書きの「古文尚書」を手に入れたとか、漢の宮殿の蘭台の藏書に、漆書きの経書があったというのも、みなこれであって、漆に黒さを与えるために、墨の汁をまぜたものだといふ(注三)。また、「周書」に、涅墨(うづまぐ)の刑というのがあり、罪人の顔に入れ墨をさせ、犯人であること目じるしをしたので、これにも墨汁を用いたものであろう(注四)。もっとも、これにより先に石墨で文字を書いたこともあり、「括地志」の次の文章がその証拠だとされる。

「東都寿安県の洛水の側に石墨山あり。岩石尽く黒し。以て疏を書すべし。故に石墨を以て山に名づく」(注五)。

なお、漢代の硯は、いくつか出土しており、多くは墨池を持たないが、安徽省大和县税馬鎮出土のもの、二個の墨池を持つものがある(注六)。また、広州市竜生岡の漢の墓から、まゆずみ用と思われる棒状の墨が発掘されているから、このころ既に固形の墨が作られていたものであろう。

前引の「墨經」には、次のように記している。

「古用松煙石墨二種石墨自晋魏以後無聞松煙之製尚矣漢賈扶風隳終南山之松蔡質漢官儀曰尚書令僕承郎月賜隳大墨一枚小墨一枚」(注七)。

これにより、漢代に松煙墨があったことが知られる。扶風・隳麋は、いずれも陝西省にある地名で、終南山は秦嶺ともいわれる名山である。「鶴林玉露」には、著書が少年のころ鐘陸で、安覚という日本僧に会い、かれが墨のことを日本語で蘇弥(すみ)といったと記しており、ここから、日本語の墨の語源は隳麋だという説が出されている。隳麋はそのころ、墨の代名詞となっていたのである。

ここで、墨を一枚二枚というかぞえ方をしており、さらに晋の「東宮旧事」に、皇太子の初拜に、香墨四丸を給すとあるから、このころの墨は、丸い形であったと考えられる(注八)。なお、墨の成立に大きな影響を与えたのは、紙の使用であらう。伝説では、後漢の蔡倫が、一〇五年に発明したことになっているが、前漢の墓と推定される古墳から紙が発掘されているので、もっと遡りうるらしいが、まず漢のころと比定してよいようである。

三国のころの史料としては、「墨史」「墨海」などに引用されている次の文があげられる。

「潘子良答王僧虔曰仲将之墨一点如漆」。

ただし、仲将は草誕の字で、魏のころ能書をもって聞えた人であり、

製墨史考

奥谷道夫

(一)

墨は日本の発明品でなく、中国より伝わったものである。日本の製墨は、早く律令の職員令に記載があるから、舶載品だけに依存せず、自国で造ることも早くから行なわれていたらしい。しかし、何分にも中国を師とするわけであるから、製墨法などについては、中国における方法の学習を前提としたもので、江戸時代後期の古梅園においてさえ、中国の古製墨法に学び、さらにより進んだ方法を試みようとしている。本稿は、日本の製墨史研究の過程において、中国および日本の製墨について行なった若干の考察を順序不同で書きとめたノートである。

(二)

むかしの中国人は、どのように墨を、あるいは墨の色を愛玩してきたか、これについて、たとえば、清の屠隆の「考槃余事」には、次のように記している。

「むかしの人が墨をもちいるのにならずよいしなものをえらん

だのは、ただうつくしさを今にひるめるばかりではなく、さらにうつくしさを後につたえんためであったと思われる。そのかみの晋唐の書や宋元の画はみな数百年のあいだ伝わってきても、墨の色は漆のようで、神気はそのおかげでもとのままのこっている。もし墨のわるいものであったならば、もちいかたが濃ければ水にあうとにじんでしまうし、もちいかたが淡ければ器具をやりなおすと神気がすっかりなくなり、二三年にもならないうちに墨の色がはやくもあせてしまう。だからこそもちいる墨はよいものでなければならぬのである。高深甫が「墨の上手なもちいかたは、質は軽いものをえらび、煤は滑らかなものをえらび、嗅いでもかおりがなく磨っても音のしないものをえらぶ。あたらしい硯(古い硯の誤りか)にあたらしい水をそそぎ、力をいれないようにして磨る。いそいで磨ると熱くなり、熱くなると沫ができるのを忌む。使うはしから磨るようにして、磨ったのをながらくそのままにしておいてはいけない。埃で墨がよごれ、膠でどろどろになる。使ってしまったら洗っておくようにこころがけ、墨の滓を一ぱいつけておいてはいけない。ながらく貯蔵しておくとも膠が枯れて、墨の作用がよくなるものである。」といっているのは、まことに鑿墨三昧のことばである。古今の墨のつくりかたは墨経、墨書につまびらかである」(注一)